ISSN 1344-9710

宮城学院資料室年報

MIYAGI GAKUIN ARCHIVES OF HISTORY REVIEW

信　望　愛

2019年度

第25号

宮城学院資料室

宮城学院資料室年報　―信・望・愛―（二〇一九年度）　第25号　宮城学院資料室

宮城学院資料室年報

MIYAGI GAKUIN ARCHIVES OF HISTORY REVIEW

信　望　愛

2019 年度

第 25 号

宮城学院資料室

もくじ

□巻頭言　　宮城学院学院長　嶋田 順好 …… 3

□論考…… 5

「生徒たちにとってたいへん面白い本」

―エリザベス・R・プールボー使用の教科書について(1886年～ 1892年) ―

宮城学院女子大学　一般教育部准教授　栗原　　健

□論考…… 15

「増子としの人と業績」

―宮城女学校から幼児音楽教育者の道へ―

宮城学院女子大学　教育学部教授　　松本　晴子

□2019年度戦災復興展の関連行事「宮城学院の日」より

◆「宮城学院卒業生の空襲体験」

宮城学院女子大学　学芸学部教授　大平　　聡…… 70

◆「空襲」　垂石　洋子…… 75

◆「戦争の記憶から」　皆川　洋子…… 77

◆「戦中戦後の宮城学院について」　広瀬喜美子…… 81

□小論…… 84

「宮城学院の植物たち　その１」

宮城学院女子大学　一般教育部准教授　木村　春美

□彙報…… 86

2019（令和元)年度彙報

宮城学院資料室

〔表紙〕宮城学院礼拝堂のステンドグラス　「降誕」
ガブリエル・ロワール(1980)

巻頭言

宮城学院学院長　嶋田　順好

ここに『資料室年報第 25 号』を発行することができますことを神に感謝するとともに、執筆にご尽力いただいた方々に衷心より御礼を申し上げます。幸いなことに今年度も意欲的且つ大変興味深い論考を収載することができましたことは喜び堪えません。

一般教育部准教授の栗原健先生は、「生徒たちにとってたいへん面白い本」―エリザベス・R・プールボー使用の教科書について―をご寄稿くださいました。栗原先生は『E・R・プールボー書簡集』を手掛かりに、プールボー先生が実際に授業で用いた 3 冊の英語教科書を調査研究し、草創期の宮城女学校の英語授業の実際を、生き生きと再構築することに取組んでくださったことです。

また、教育学部教授の松本晴子先生が、「思い出のアルバム」の作詞者として夙に知られている本学同窓生の増子とし氏の生涯と業績について詳細に調査研究し、「増子としの人と業績」―宮城女学校から幼児音楽教育者の道へ―をご寄稿くださいました。先生は、増子氏が幼児のために多くの歌を生み出したのみならず、キリスト者として幼児教育の現場に携わりつつ、その全人的成長と発達のために音楽を用いた意欲的なカリキュラム開発に取組み、多大な貢献を果たされた事実を、詳らかにしてくださったことです。

更に、学芸学部人間文化学科教授の大平聡先生は、―2019 年度戦災復興展の関連行事「宮城学院の日」より―「宮城学院卒業生の空襲体験」をご寄稿くださいました。ここでは昨年 7 月に仙台市戦災復興記念館で開催された企画展「発掘 !! 戦火を越えたタイムカプセル―宮城学院の戦争被害―」と、その展示期間中に持たれた「宮城学院の日」の開催経緯について詳しく報告してくださいました。ことに「宮城学院の日」の企画として、同窓生の広瀬喜美子氏、皆川洋子氏、垂石洋子氏が、仙台空襲時の過酷な体験や終戦直後の宮城高等女学校、宮城学院中高の復興の様子と学びの日々について貴重な証言をしてくださったものを収めることができたことは、まことに意義深いことと存じます。

自然を愛してやまない一般教育部准教授の木村春美先生は、学内遊歩道を散策される折に目にする宮城学院の植物をぜひ紹介したいとの願いを持たれたことです。その連載第一回として「カタクリ」を取り上げてくださいました。これからどんな植物がとりあげられていくのか、大いに楽しみにしたいと存じます。

本書を手に取った方々が、読まれた感想をぜひ資料室までお寄せいただければ幸いです。

最後に編集の労をとってくださった資料室の佐藤亜紀氏にも心からの御礼を申し上げます。

「生徒たちにとってたいへん面白い本」
－エリザベス・R・プールボー使用の教科書について（1886 年～ 1892 年）－

宮城学院女子大学 一般教育部准教授　栗原　　健

はじめに

宮城女学校（現宮城学院）の初代校長として着任したエリザベス･R･プールボー（1854 年－ 1927 年、1886 年着任～ 1893 年離任）や彼女の同僚の教師たちは、どのように授業を行っていたのであろうか。授業の種類やその印象については、学則やプールボー自身の報告、元生徒の証言等から知られているが、詳しい授業内容やその形態については記録が乏しいため定かではない。しかしながら、プールボーの書簡には、彼女が使用した教科書･参考にした図書に関する言及がしばしば登場する。こうした書籍を通じて、当時の生徒たちが学んでいた事柄を詳しく知ることができるのではないだろうか。

本論の目的は、プールボー書簡に登場する 3 点の教科書を取り上げてその内容を概観することにより、女学校草創期における授業風景を再構築する手がかりとすることである。興味深いことに、プールボーが用いた教科書のうち 1 点は 1892 年、ジャイラス・P・モール宣教師（1847 年－ 1935 年）の妻アニー（アンナ）・M・モール（1853 年－ 1910 年）によって短縮版が編まれ、日本語に訳されている[1]。プールボーが米国に戻ることを思案していたこの重要な時期に、なぜ教科書の邦訳が仙台でなされたのであろうか。こうした背景についても本論では探っていきたい。

なお、文中に登場するプールボー書簡の頁番号は、全て『E･R･プールボー書簡集』（宮城学院、2007 年）によるものである。

1　英語の教科書：*Appleton's School Readers*

プールボー書簡に登場する書籍に関する最初の言及は、仙台到着から 13 日後にあたる 1886 年 7 月 29 日に書かれた、改革派教会外国伝道局財務幹事ルドルフ・ケルカー宛の手紙に登場する。「仙台に来て初めての宣教師団会議が、私の家の居間で開かれました。会議の間、キティー（筆者註：プールボーの姪サラ・キャサリン・プールボー）は食堂にいるように言われておりました。会の終了後、その部屋から熱心な声が聞こえてきましたので行ってみますと、キティーが 10 歳と 12 歳の日本人の子供 2 人に、*English Penmanship* を使いながら英語を教えておりました」（16 頁）という一文である。この

[1] モール（Moore）の名は、「ムーア」のほうが実際の音に近いであろうが、宮城学院関連の書籍においてはおおむね「モール」と表記されている。そのため、ここでも「モール」と表記しておく。

English Penmanship がどのような書物であるかは不明であるが、タイトルから見て英習字の本であろう。ただし、キティーはこの時点ではまだ 6 歳であり、この本は彼女自身の学習用に与えられていたものである可能性もあるため、これを直ちに女学校の教科書と見ることは難しい。

正式に教科書に関する情報が登場するのはその約 1 ヶ月後、10 月 26 日に書かれたケルカー宛の書簡である。

「お送りくださった本が今朝届いたことをお知らせでき、たいへん嬉しく存じます。早速使わせていただいており、生徒たちもたいへん喜んでおります。日本人の通常の考え方とは異なるものを教えるには、絵画はほんとうになくてはならないものです。アップルトン・リーダーズの中に描かれている絵を見ますと、それが宗教的なものではなくても、アメリカの子供たちの生活の様子が、自分たちよりもはるかに優れたものであることが分かります。」（29 頁）

末尾の文章の優越意識が気になるが、この文章からプールボーが開校直後から、挿絵が豊富に掲載されている『アップルトン・リーダーズ（*Appleton's School Readers*、以下 *Readers*）』を日本人生徒にアピールしやすい有望な教材として見ていたことが分かる。実際、この *Readers* は、その後の宮城女学校における英語教育の基礎的な教科書となっていく[2]。その重要性がよく表れているのが、開校 2 年後の 1888 年 7 月 3 日付で「メッセンジャー」紙宛てにプールボーが記した文章である。

この中で彼女は、女学校には入学を希望する少女たちが溢れていたが、それは、「彼女らの多くは、即座に、いわば 1 日で、英語を身につけたいと熱心に望んで」いたからである、ほどなく「英語の習得に『王道なし』」と理解した多くの者は脱落していき、「最後には、真面目な少女たちだけが残ったのです」と若干のユーモアをこめて記している（104 頁）。書簡の末尾でプールボーは、クリスマスにプレゼントを女学校まで送ってくれるよう読者に呼びかけているが、そこには、「プレゼントにぴったりの本もあります。少なくとも 20 名の生徒たちは、クリスマスまでにアップルトン・リーダーズ第 3 巻の全訳を難なくこなせるようになっていることでしょう。ですから、短い物語などは十分に楽しむことができると思います」との文が見られる（106 頁）。

ここからプールボーらが、*Readers* 収録の話を日本語に翻訳させるという授業を行って

[2] 1891 年 7 月 21 日の書簡には「リード＆ケロイ著の『上級英語』（Reed & Kelloy's "Higher Lessons in English"）を 12 冊お送り願います。」（213 頁）と記されているため、プールボー在職期の後期には、この教科書も英語教育のために用いられたことが分かる。なお、Alonzo Reed and Brainerd Kellogg. *Higher Lessons in English*（New York: Maynard Merrill, 1898）は Google Books USA で読むことが可能である。

いたことが分かる。ということは、*Readers* 第 3 巻を見れば、当時の生徒たちの英語レベルがどの程度のものであったかがうかがえることになる。

幸いなことに、1881 年版の同書第 3 巻が Google Books USA 上において公開されているため、誰でも読むことができる[3]。1881 年版の *Readers* 冒頭に登場するのは、「*Bob Brown's Dog*」という話であり、このような文章で始まる。

Little Bob Brown had a fine large dog, named Rover. Bob and Rover were great friends, and used to play together nearly all day long.

When Bob's sixth birthday came, he had to go to school. Bob was glad to go, but he was very sorry to leave Rover at home. When the time to start came, he put his arms around the dog's shaggy neck and whispered something in his ear.

ボブが学校へ行った後ローヴァーはこっそり学校に忍び入り、ボブがいる教室を見つけ出して入り込むと、ボブを引っ張り出そうとする。先生も子供たちも大笑いとなり、ボブを犬と一緒に帰宅してよいこととなった、という物語であり、犬を迎える少年の挿絵が添えられている。このテキストの後に物語の短い要約が置かれているが、ところどころに空欄があり、生徒は、空欄を英語で埋めながらこの要約全文を書き写すよう指導されるのである（「*Rover was a _____. He followed _____ to school. In the hall he found Bob's _____ and _____.*」以下略）[4]。

第 5 話まで行くと、宣教師が運営する女学校にふさわしい話が登場する。この「By the Brook」という話は、小川のほとりに遊びに行った少年と少女が、そこで見たものを母親に報告する話である。純真な少女は「鳥たちが神様に感謝しているのを見た」と主張する。鳥は水を啜るたびに天を仰ぐ。「鳥は水のことを感謝しているんだと思うわ。そうでしょう、お母さん？」 これに対して母親は、「鳥は嘴に水を入れて喉に流し込まなくてはならないので、そのようなポーズをしているだけなのよ」と説明しつつも、「でも、鳥たちが神様に感謝しているというのはとても良い思いつきね。そういうふうに考えるなんて、お母さんは嬉しいわ（*But that was a very pretty conceit of yours about their giving thanks to God, and I am glad you thought of it*）」と話す[5]。この文章を説明しながらプールボーは、神に感謝することの意味を生徒たちに教えたのかも知れない。

---

[3] William T. Harris, Andrew J. Rickoff, and Mark Bailey, *Appleton's School Readers: The Third Reader*（New York: D. Appleton, 1881）。なお、宮城学院資料室に保存されている *The Third Reader* は、1902 年以後に American Book Company から刊行されたものであり、プールボーの在職期間中に使用されていたものではない。内容は同じであるが、最終部分に 30 頁あまり旧版には無い物語や詩が追加されている。

[4] *The Third Reader*（1881）, 3-5.

[5] Ibid., 15-16.

これらが教科書の冒頭部分にある物語であることを考えると、巻末にたどり着いた時には生徒たちの英語力は相当なものになっていた筈である。まして、彼女たちはテキスト中の全ての話を翻訳できるまでに成長できるとプールボーは見込んでいる。これが彼女の誇張でなければ、生徒たちは在学中に英文の書物をかなりの程度、読みこなせるようになっていたことであろう[6]。なお、第3巻を学び終えた者についてはさらに高度の *Readers* 第4巻に進んだこと、生徒たちは教科書を借用するのではなく購入していたことが、1889年6月13日付のケルカー宛てのプールボー書簡からうかがえる。

「次年度に必要な書籍が若干（それほど多くはありません）ございます。内訳は、アップルトン・リーダーズ第3巻を1ダースと、『讃美歌と聖書』（ネヴィン社）を3ないし4ダース、教師手帳を6冊、『ビール式柔軟体操と健康体操』を1冊、リーダーズ第4巻を12冊です。ニューヨーク市ベックマン街29 & 31のエクセルシオール出版社の『子供たち』もお願いいたします。これらは全部、生徒たちに購入させますので、その請求書もお送りください[7]。」（141頁）

2　聖書の教科書（1）：ワイザー著 *A Child's Life of Christ*

プールボーは、どのように聖書の内容を生徒たちに教えたのだろうか。この点に関する情報が登場するのが1887年2月8日付のケルカー宛の書簡であり、ここで彼女は聖書の授業で用いる教科書について言及している。

「聖書の学びは私たちにはたいへん必要ですので、聖書辞典は重宝することでしょう。もう1冊の *Abbott & Giltman's Harmony of the Gospels* は、自分のためにお願いしました。その本をお見かけの際は、買っていただければ幸いです。他の2冊の本 *Story of the Gospels* とワイザー博士の *Life of Christ* は、博士自らがご親切にも送って下さいました。生徒たちにとってたいへん面白い本だということが分かりました。その英文は生徒たちが容易に習得でき、内容もごく新しいもので、熱心に取り組めるようです。*Life of Christ* を来年度の教科書として使うつもりです。」（42頁）

---

[6] プールボーは、初級の英語クラスを *Readers* 第3巻をもって始めたのだろうか。この内容は、初めて英語に触れる日本人には難し過ぎるように見える。1887年1月19日付のプールボーの書簡には「初等リーダーのクラス（my class in the First Reader）」（38頁）という言葉が登場する。これは、第3巻よりもやさしい *Readers* を用いていたということを意味するのであろうか。しかしながら、書簡の中で教科書として注文されているのは第3巻と第4巻のみである。推測であるが、「First Reader」のクラスでは *Readers* ではない平易な読み物が用いられていたのであろう。

[7] *The Fourth Reader*（New York: D. Appleton, 1885）も Google Books USA において公開されており、その内容を見ることができる。

言及されている書籍のうち、*Abbott & Giltman's Harmony of the Gospels* と *Story of the Gospels* については詳細は不明であるが、重要なのは「ワイザー博士の *Life of Christ*」である。プールボーが、生徒たちの反応を考慮した上でワイザーの著作を教科書として採用していたことが、この文章から明確に読み取れるからである。

ここで言われている「ワイザー博士」とは、ペンシルヴァニア州スピナーズタウンの Trinity Great Swamp Church 牧師であったクレメント・ツヴィングリ・ワイザー（Clement Zwingli Weiser、1830 年－ 1898 年）のことである。彼はドイツ改革派教会外国伝道局の理事長でもあった人物であり、プールボーの日本宣教にも大きな関心を抱いていた筈である[8]。その彼が宣教活動の一助にとプールボーに送付したのが、児童向けにイエスの生涯を説き明かした自著 *A Child's Life of Christ*（1886 年）であった。

この著作の序文の中でワイザーは、多くの米国の児童たちは、イエス・キリストが人類を救うためにこの世界に来たこと、ベツレヘムで誕生して十字架にかかったことは知っているものの、それ以外については実際にはほとんど理解していないと嘆いている。キリストについて彼らが知っていることは「大きな石ころの山（*a large heap of stones*）」のようであり、その全容がいかなる順序でつながっているかを理解していないというのである。ワイザーはこの状態を、深海の底に広く散らばっている真珠に比較し、福音書に記されているキリストの行いや教えは、丹念に集めてつなぎ合わせ、冠のようにすべきものであるとする[9]。

そのため、この著作の中で彼は、福音書に記されているイエスの生涯の物語を可能な限り時系列的に並べ直し、各エピソードの背景を説明しながら、個々の物語からどのようなことを学ぶことができるか、児童でも理解できる平易な文章で解説していくのである（対象は「若い子供たち、8、10、12 歳の少年少女」と序文にある[10]）。ワイザーの文章は明晰でバランスが取れており、過度の感傷性に落ち込むこともなく、教育者・文筆家としての彼の有能さが見て取れる。また、16 点の美しい挿絵が加えられており、日本人の挿絵好きを見抜いていたプールボーがこの書籍を教科書として選択したのも、理解できるところである。

3　教科書の抄訳：モール夫人著『童蒙基督一代記』とその背景

プールボーたちは、ワイザーの著作を用いてどのように生徒たちに指導したのであろうか。挿絵を含めて 328 頁もある長大な著作である以上、この書物の内容を全て授業中に網羅したとは考えにくい。彼女たちはこの教科書のどの部分を強調し、いかなる説明を加え

---

[8] ウィリアム・メンセンディク『ウィリアム・ホーイ伝－苦悩の生涯と東北学院の創立』（出村彰訳、東北学院、1986 年）、88 頁。

[9] Clement Zwingli Weiser, *A Child's Life of Christ*（Reading: Daniel Miller, Philadelphia: 1886）, 10-11.

[10] Ibid., III.

たのであろうか。

そのヒントとなる資料が存在する。実は、ワイザーのキリスト伝の抄訳がプールボーの日本滞在中に作成されているのである。これは『童蒙基督一代記』（以下、『一代記』）と題された一書であり、ワイザーの *A Child's Life of Christ* をアニー・モール夫人が大幅に短縮してまとめたものである。この英文原稿を三浦ケイ子なる女性が、当時仙台神学校本科で学んでいた須藤鬼一の助けを得て邦訳し、1892 年（明治 25 年）夏に刊行したのであった [11]。

ここで気になるのが、この翻訳がなされた背景である。『一代記』がどのようにして誕生するに至ったのか、確実なことは定かではないが、1 つの推測は成り立つであろう。手がかりは、三浦ケイ子が書いた序文にある日付である。

序文の末尾において三浦は「明治二十五年七月」と日付を記入しており、その文面から、この序文を書いた時点では翻訳の原稿が完成していたことがうかがえる [12]。モール夫人がワイザーの著作を書き改め、その後直ちにこの翻訳がなされたのだとすれば、夫人が『一代記』の英文を書いたのは 1891 年（明治 24 年）後半から 1892 年（明治 25 年）冒頭のことと考えることができよう。特に、『一代記』には原著の挿絵のうち数点が転載されており、挿絵の原版はペンシルヴァニアから直接取り寄せられたものである [13]。この点を考えると、この出版プロジェクトには少なくとも数ヶ月から 1 年を要した筈である。

ここで重要になるのは、1891 年から 1892 年という時期は、プールボーやその周辺の人々にとって非常に困難な時期であったことである。いわゆる「宮城女学校のストライキ」騒ぎによって 5 名の優秀な生徒が退学になったのは、92 年 1 月 21 日である。しかしながら、学校の管理運営権を日本人の手に移譲して日本流のカリキュラムを組めという一部教員や幹事からの突き上げは、前年の 91 年夏頃から学校内に混乱をもたらしていた [14]。

プルーボーは以前から日本語学習の難しさを嘆いていたが、この時期には「もし私が日本語をうまく使いこなせていたなら、日本人の特性にうまく対処できたはずだと思います。（略）6 年に及ぶ厳しい、祈りのうちの学習にもかかわらず、私はまだ日本語が身に着いておりません」と述べ、「文字通り、耳も聞こえず口もきけない状態」だとまで言い

---

[11] アンナ・モール『童蒙基督一代記』（三浦ケイ子訳、1892 年）。この書物は国会図書館のオンラインコレクションで公開されている。http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/824230

[12] モール、「序」2 頁目（頁番号無し）。

[13] 挿絵に関するこの情報は、ペンシルヴァニア州ランカスターの福音・改革派歴史協会に所蔵されている『童蒙基督一代記』添付の情報カードに記されている。挿絵に関するカード中の文章は以下の通りである。"The pictures were printed at Reading, Penna, by Elder Daniel Miller, proprietor of the 'Reformed Church Board' and forwarded to Sendai by R. F. Kelker, for Mrs. Moore, and there the Japanese explanations were printed on them on the margins, and then bound up with the other portions of the work."

[14] この問題の詳細については以下を参照。宮城学院『天にみ栄えー宮城学院の百年ー』（宮城学院、1987 年）、234-253 頁。

切っている(1892年8月24日、252頁)。これがプールボーだけの問題ではなかったことは、「在日宣教師団の中に、実用的な日本語の心得のある女性が1人もいないことは、私たちにとって大きな損失となっております」(1891年8月18日付、214頁)との彼女の文章からもうかがえる[15]。こうした米国人教師陣の日本語能力の無さは、宮城女学校における教育を「洋風一天張」(相馬黒光)と批判する反対派の不満に拍車をかけるものであった筈である[16]。

この状況の中でプールボーが、聖書教育のために日本語の教材が必要であると痛感し、愛用の教科書の短縮版を邦訳することを考えたとしても、これは自然な流れであろう。しかし、校長の激務は彼女にその作業に取り組む時間を許さない。そのために、彼女はこの仕事をモール夫人に依頼したのではないだろうか。三浦ケイ子による翻訳が完成したのが92年の7月であるとすると、これはまさにプールボーが米国に帰国することを正式に申し出た時期(7月1日)と重なっている。彼女にとっても、教科書の邦訳が完成間近であることは安堵の材料であったことであろう。

プールボーの書簡には『一代記』に関する情報は見当たらないため、上記のことは全て状況に基づく推測である。しかしながら、もう1つ手がかりとなる事柄がある。この本を翻訳した三浦ケイ子という女性であるが、彼女は何者なのであろうか。彼女が宮城女学校の関係者であった可能性はあるのだろうか。

三浦の名前は、女学校の教職員名簿・学生名簿には記されていない[17]。しかし、彼女については、東北学院史資料センター調査研究員の日野哲氏から重要な情報を得ることができた。三浦の名は、仙台東一番丁教会の転入会者名簿の中に登場するのである[18]。名簿の記載事項によると三浦は明治元年に東京・小石川に出生しており、明治24年に東一番丁教会に転入会している。名簿上では彼女の住所は「東三番町」とある。宮城女学校の住所が東三番丁であったことを考えると、この時点で三浦が女学校と何らかのつながりがあった可能性が強いであろう(ただし、『一代記』の発行者欄には「仙台市南町通十番地　三浦ケイ」とあるため、翌年には彼女は東三番丁には居住していなかったと考えられる)。もしも三浦が女学校の関係者であったとすれば、この翻訳作業にはプールボーの意向が反映されていたと推測することができる。

ここが興味深い点であるが、もしもこの邦訳がプールボーの意向によるものであったとすれば、『一代記』を読めば、プールボーや彼女の同僚たちがどのように生徒を教えていたかを想像することが可能であろう。特に、ワイザーの原著と比較した上で、どの箇所が

15　プールボーはこのほか、1890年10月28日付(189頁)、1891年2月11日付(200頁)の手紙においても自己の日本語学習の遅さを嘆いている。

16　相馬黒光「宮城女学校最初のストライキ」より。『天にみ栄え』、237頁。

17　この点について、宮城学院資料室の佐藤亜紀氏に確認して頂いた。

18　日野哲氏は「三浦ケイ」が登場するページのコピーを送付して下さった。感謝を申し上げたい。また、日野氏からは、この翻訳の手伝いをした須藤鬼一の経歴に関する情報も頂いた。

削除されてどの箇所が残されたか、ワイザーのメッセージのどの点に強調が置かれているかを分析すれば、彼女たちが生徒に教えようとしたポイントを読み取ることができるのではないだろうか。

仮にこの本の作成がプールボーの希望でなされたものではなく、モール夫人が自身の判断のみで行ったものであったとしても、モール夫人はプールボーの帰米後に宮城女学校の副校長に就任した人物である。授業の際には、自らがまとめたこの書物を指導用に用いたことであろう。その点を考えると、この『一代記』は、当時の宮城女学校でどのように聖書教育がなされていたかを伝える貴重な史料であると言えよう。今後、同書の内容について詳しい分析がなされることが期待される。

4　聖書の教科書（2）：ガンス著 *Gospel Lessons*

プールボーの書簡には、ワイザーのキリスト伝以外の書物も聖書の教科書として言及されている。1888 年 9 月 29 日付の宛先不明の書簡の中で彼女は、「私の教えるあるクラスではゴース博士（Dr. Gaus）の *Gospel Lessons* を使い授業をしています。オムラさんと日本人教師のうち 1 人が、遅れ気味の生徒を担当しています。」（122 頁）と述べている。

この「ゴース博士の *Gospel Lessons*」については、当初は全く情報を見つけることができなかったが、ペンシルヴァニア州ランカスターのランカスター神学校図書館に問い合わせたところ、意外な事実が判明した。この書物は David Gans が著した *Gospel Lessons*（1869 年）のことを指すと見られるのである[19]。「Gans」と「Gaus」の綴りは筆記体では見分けがつきにくく、容易に誤読し得る。このため、『E・R・プールボー書簡集』には誤った著者名が記載されてしまったのであろう。

著者デイヴィッド・ガンス（1822 年－ 1903 年）の生涯については情報が乏しく、1859 年にはペンシルヴァニア州ハリスバークで牧師として奉仕していたこと、1869 年に *Gospel Lessons*、翌 70 年に使徒書簡を扱った *Epistle Lessons* をフィラデルフィアで刊行したこと以外には、詳しいことは知られていない。しかしながら、*Gospel Lessons* の序文には、この著作が日曜学校における需要を満たすために書かれたむねが記されており、著者が長年にわたって日曜学校の指導にあたっていたことがうかがえる[20]。プールボー自身が成人前、日曜学校においてガンスの本に馴染んでいた可能性も考えられよう。

Gospel Lessons の構造を見ると、教会暦に従って福音書のテキストが置かれており、それに続いて聖書箇所の内容に基づく質問とその短い答えが列記されるという形を取っている。質問には 2 種類があり、大き目のサイズの活字で印刷されている質問は全般的で容

---

[19] David Gans, *Gospel Lessons arranged according to the church year : for the use of Sunday-schools, Bible classes and families*（Philadelphia: Reformed Church Publication Board, 1869）。この点を指摘して下さったのは、ランカスター神学校図書館の司書マイカ・ケネディー・スティーブンス教授である。

[20] Ibid., iii.

易なもの（その日の聖書箇所を読めば回答可能なもの）、小サイズの活字による質問は聖書に関する幅広い知識を要するものである。これらの質問に回答していくことにより、生徒はテキストの内容とそのメッセージをより深く把握していくのである。

一例として、クリスマスシーズンの冒頭を飾るアドベント（待降節）第 1 主日の第 1 レッスンを見てみよう。ここではまず、「この季節の名前は何であるか。アドベント」、「アドベントの意味は何であるか。ラテン語の *ad* と *venio* からであり、『来る』との意味である」といった問答が登場し、その後にマタイによる福音書 21 章 8 － 11 節に記されているイエスのエルサレム入城の場面が記される。それに引き続いて、この福音書の記述に関して大活字と小活字による種々の質問が来るのである。

例えば、大活字で「人々はこの場面で何をしていたと言われているか？」との質問が挙げられ、その後に小活字で「イエスは弟子たちに何を命じたのか？　第 2 節」等の問いが続き、「これは何の預言の成就であるか。ゼカリヤ書 9 章 9 節」、「イエスの到来から何年前にこの預言は語られたのか。457 年前」、「衣を敷くことは何を示すのか。列王記下 9 章 13 節」と尋ねられる。その後再び大活字により「そこには大勢の人が集まっていたのか？」、「他の者は何をしていたのか？」等の質問がなされた後、小活字で「人々が枝を切った木は何であるか。ヨハネによる福音書 12 章 13 節」、「棕櫚の木は何を象徴するのか。黙示録 7 章 9 節」、「ホサナとは何の意味か。救って下さい」、「これは何の預言の成就であるか。詩篇 72 篇 17 節」、「どのような意味でこれは主がメシアであることを示すのか」等の問答が述べられていく[21]。

こうした内容について、プールボーがどのように指導したのかは定かではない。簡単な質問を選んで生徒に答えさせていたのかも知れないが、参考書のように用いていた可能性もあろう。いずれにしても、このような形でガンスの著書を丹念に学んでいけば、生徒は改革派教会の聖書解釈について一通りの理解を得ることができた筈である。現代人の目から見るとガンスの著は教理問答のようであり、そのスタイルもいささか無味乾燥にも見えるが、プールボーにとっては福音書を深く読み込むための頼もしい教材であったと考えられる。

5　結論

以上のように、プールボーの書簡に登場する教科書を実際に読むことにより、彼女の在職時に宮城女学校においてどのような授業が行われていたのか、教師陣がどのように英語や聖書を教授しようと努めていたのか、具体的な手がかりを得ることができた。殊に聖書の授業については、ワイザーのキリスト伝の内容と『一代記』を比較することにより、プールボーらが強調しようとしたメッセージを読み取ることが可能であろう。より詳しく教

[21] Ibid., 13-14.

育内容を再構築することができるよう、今後の研究が待たれるところである。

謝辞

本研究は、2019 年 8 月 24 日から 28 日まで東北学院大学の資料調査チームと共に行ったランカスター神学校内の福音・改革派歴史協会（ERHS、Evangelical & Reformed Historical Society of the United Church of Christ）での調査の成果である。主たる内容は、2019 年 10 月 3 日に東北学院のラーハウザー記念礼拝堂で開催された「第 2 回ランカスター神学校調査報告会」においてすでに報告されている。東北学院大学の野村信教授、松谷基和教授、日野哲氏、また我々調査チームを温かく迎えて下さったランカスター神学校のキャロル・リッチ校長、ランダル・ザックマン教授、また神学校図書館の司書マイカ・ケネディー・スティーブンス教授、ERHS 事務局長のアリソン・マリン氏に深く感謝の意を表したい。特に日野氏からは、本文・脚注で記したように三浦ケイ子と須藤鬼一に関して重要な情報を頂いた。明治時代の宮城女学校の生徒・教職員については、宮城学院資料室の佐藤亜紀氏が調査して下さった。また、東北学院チームと共に米国に赴くことが可能となったのは、宮城学院の嶋田順好学院長のはからいによるものである。この場を借りて御礼を申し上げたい。

増子としの人と業績

―宮城女学校から幼児音楽教育者の道へ―

宮城学院女子大学 教育学部教授　松本　晴子

はじめに

宮城女学校で学んだ後、さらに修養を積み各方面で活躍した女性は数多く存在する。一人ひとりの業績の解明と資料の整理にはそれ相当の時間を要すると思われる。1997（平成9）年度と1998（平成10）年度の宮城学院女子大学大学祭では、文学の世界で活躍している卒業生20数名と本学で教鞭をとっていた教員の中から4名[1)]を取り上げ、大学祭参加企画として『宮城学院の文人展』（以下『文人展』）の展示会と『文人展』の冊子をまとめている。この冊子は、発起人であった犬飼公之先生を中心とする『文人展』実行委員会[2)]が本学の文人の紹介とその業績の一端をまとめた貴重な資料であり宮城学院の財産となっている。

1998（平成10）年度の『文人展』においては、石井昌光先生と増子とし（以下とし）[3)]を取り上げている。としは、現在でも日本全国の幼稚園や保育園などの卒園シーズンで歌われることの多い楽曲《思い出のアルバム》の作詞者である。『文人展』ではとしの生涯とともに《思い出のアルバム》誕生のいきさつを中心に紹介している。

本稿は、この『文人展』では確認しきれなかったとしの歩んだ道と《思い出のアルバム》以外の業績などについて検討し、としの全体像を明らかにしようとしたものである。研究にあたっては、としの娘である吉野トキ子氏（以下吉野氏）[4)]への聞き取り調査と親族の回想文[5)]、『天にみ栄え宮城学院の百年』、『宮城学院資料室年報』、宮城学院資料室と宮城学院同窓会が保存する資料、国立国会図書館のデジタル資料、頌栄の記念誌[6)]などの文献を用いた。

1. としの歩んだ道

1.1　としの家庭環境と宮城女学校時代

としは、1908（明治41）年2月3日宮城県名取郡六郷村沖野に、丹野保五郎・良（りょう）夫妻の四女として誕生した。父の保五郎は早稲田大学を卒業後政治家になることを目指していたが、宮城県名取郡六郷村の人々に請われて村長となり[7)]、その後沖野小学校校長になった。丹野家の菩提寺は仙台市若林区沖野7丁目の「清涼寺」で、ここには江戸中期から江戸後期に和算学を修めていた丹野家ゆかりの2つの祖先の碑があり、これは仙台市指定遺跡となっている[8)]。

としには、四男五女[9)]の兄弟姉妹があり、長男の元也は丹野家の財産を使い果たして

しまい、家族は苦しい生活を強いられたことから長男の元也のことを快く思っていなかった。またこのことから両親は長男の元也ではなく、次男の保次と暮らすようになったようである。保次は東京の多摩墓地に丹野家のお墓を建立しこれは現存している[10)]。三男の三壽は仙台の中学を卒業後横浜税関に務めたが関東大震災で仙台に戻り、家庭教師をしながら東北学院専門部文科を卒業した。東北学院専門部文科の同級生 7 人の中に、のちにとしの夫となる増子鐵哉がいた。四男の四郎治は仙台の中学校の帰りには、仙台市内に嫁いだ長女きよしの婚家に必ず立ち寄っていた。彼は七高から九州大学医学部に進み医師となった。次女ふきは沼津、五女のぶ子は山口県にそれぞれ嫁いだ。三女スミは宮城県女子師範学校を卒業後、東京女学院（東京公文書館「東京女学院設立願い」）の 1 期生として学び、東京の小川町小学校などいくつかの小学校に教員として勤務した。

母の弟の吉田信太は東京音楽学校本科師範部を卒業後、広島高等師範学校、神奈川県立第一中学校などで教鞭をとりながら作曲家としても活躍した[11)]。吉田信太は神奈川県の音楽教員をしていた時に、横浜市の小学校教員をしていた三浦俊三郎[12)]と親しくなったようで、その縁で三女スミは三浦俊三郎と結婚している。このように父兄姉や叔父などそれぞれの道で活躍していた身近な人々に影響を受けながら、四女のとしは職業観と人生観を醸成していったと思われる。

としは、1921（大正 10）年 4 月、13 歳の時に宮城女学校高等女学科（5 年制）に入学した。この頃宮城女学校の校長はファウスト校長[13)]であった。英文専攻科では土井晩翠[14)]が教鞭をとっていた。としのほぼ同世代の学生には晩翠の長女土井照子（第 31 回卒業）、次女土井信子（第 33 回卒業）が、先輩には畠山千代子（第 28 回卒業）[15)]が在籍していた。このような先輩たちと、としとの直接的な交流の形跡を確認する資料は認めることができなかったが、「文芸会」や文学会誌「橄欖」[16)]などを通して同窓生の多くから影響を受けたであろうことは十分に推察できる。としは成長期の多感な 5 年間を宮城女学校で学び、プロテスタンティズムの自由に溢れる校風のなかで、真理の追究と価値観、人間性を形成していったと考える。としは宮城女学校で学び、姉のスミは宮城県女子師範で学んでいる。姉妹の進んだ学校が異なったのは、としに宮城女学校高等女学科への入学を勧めた両親の考えもあったのかもしれない[17)]。としは、1926（大正 15）年 3 月に 18 歳で宮城女学校高等女学科を卒業した。宮城女学校第 34 回卒業生である。

ところで、としが幼少期、成長期を過ごした大正時代は、一般的に大正デモクラシーともいわれるように政治、社会、文化などにおいて自由主義的な運動が起こり、また女性が一揆を起こし女性には社会を動かす力があるということが社会に認識されるようになった[18)]。女性の自立と職業婦人が認知されるようになってきた時代である。しかしながら、女性が職業婦人として働くことを認めていた家庭はそれほど多くはなかった時代でもあり、女学校に入学し学問を学ぶことができた女性は相対的に家庭環境の恵まれた子女であった。としの両親は、進歩的な教育観と人生観をもち、娘たちに教育の機会を与え、女性

の職業的社会的自立を尊重する家庭であったということが推測できる。としは、宮城女学校高等女学科を卒業と同時に1926（大正15）年4月、神戸の頌栄保姆伝習所（以下頌栄）[19] に入学する道を選んだ。

1.2　宮城女学校から頌栄へ

としが進学した頌栄は、1889（明治22）年に設立された我が国最初の2年制の幼稚園教員養成機関で学科内容やそのカリキュラムは、キリスト教主義に基づく保育者養成機関の模範となる学校であった[20]。日本における最初の幼稚園教員養成機関は、1878（明治11）年東京女子師範学校（現在のお茶の水女子大学）に1年制の保母練習科として設けられたが数名しか応募がなかったことから校則を改正し、小学校教員養成課程の本科生が幼児保育法などの保育科目を履修すると小学校教員と幼稚園教員の双方の資格が得られるものとした。

キリスト教主義による最初の幼稚園保育者養成機関は、1884（明治17）年東京の桜井女学校（現在の女子学院）に1年制の幼稚保育科として設置された。しかし1896（明治29）年頃に廃止されている。なおキリスト教主義の幼稚園は、1886（明治19）年にミス・ポートルが私立英和幼稚園（現在の北陸学院第一幼稚園）を設立しており、今日まで続いている最古のキリスト教幼稚園となっている。ミス・ポートルは幼稚園の設立にあたり専門性を習得した教員が必要と考え、学費などの費用を負担し1年間桜井女学校で吉田鍼（えつ）を学ばせている[21]。

このような幼稚園教員養成の状況から、としのように宮城女学校から幼児教育の専門家を目指す学生にとって、キリスト教主義に基づく幼稚園保育者養成機関の先駆者であった頌栄に進むことは、自然な学びの道であったといえる。実際にとしが頌栄に入学する前に、すでに宮城女学校の幾人かの先輩が学んでいたことが次の記述から確認できる。

「私ども14人は大正11年に入学しましたが､14人のうち8人までが各地のミッション・スクールの出身者でした。函館の遺愛、仙台の宮城、金沢の北陸、東京の女子聖学院、大阪のウィルミナ、神戸女学院、姫路の日の本、松山女学校、それに上の級には仙台尚絅、ひとつ下の級には名古屋の金城、下関の梅光があり本当にミッション・スクール出品展覧会といった光景でした。」[22]

1922（大正11）年時点で「仙台の宮城」と記載されていることから、としが頌栄に入学する1926（大正15）年以前に、宮城女学校を卒業した先輩が学んでいたことは明らかである。宮城女学校で学びさらに幼児教育を専門的に修得したいと希望を抱くようになった学生に、神戸の頌栄へ進む道筋が開かれるようになった理由としては、次の2つが考えられる。第1に1943（昭和18）年まで続く宮城女学校には、本科や高等女学校の上に専

攻科として聖書科、家政科、英文科、音楽科は存在したが、幼児教育、保育にかかわる専攻科は設置されていなかった。このことから幼児教育者を目指す学生が専門的な知識や技能を身に着けるためには、新たな学校を求めて学ばなければならなかった。第2に各地で伝道や教育に励んでいた宣教師たちの情報交流が頻繁に行われていたことによって、頌栄の教育内容の水準の高さは、キリスト教主義の教育界に広く定着していた。そこで日本全国のプロテスタント諸教派のミッション・スクールの女学校は、頌栄の教育に信頼を抱き、幼児教育に関心を寄せ保育者になることを希望していた学生を入学させた。これらから、宮城女学校で学びさらに幼児教育者になることを目指していた学生には、頌栄へ進む道が開かれていたといえる。ただ希望すれば誰もが進学できたわけではなく頌栄では各女学校から推薦された優秀な学生に限って入学を認めていたようである。このことから頌栄に推薦されて入学した学生たちは、喜びと誇りを持って意欲的に学んでいた。まさにとしはその一人であった。

また1922（大正11）年には、JKU（Japan Kindergarden Union of Japan）[23]の東北部会が設立されている。としが頌栄に進学する1926（大正15）年頃は、東北地区の幼児教育関係者の交流はより活発になっていたことが推察できる。もとより全国の幼児教育関係者同士の交流によって、宮城女学校の教職員にも頌栄の充実した教育内容やエ･エル･ハウ（以下ハウ）[24]の優れた指導は伝わっていただろう。ハウの頌栄での働きと幼児教育界における貢献については、拙稿[25]で述べたが、とし自身が頌栄の学生生活において直接ハウの薫陶を受けることができたのは1年間たらずであった。しかしハウの影響は大きかったと思われる[26]。

なお、頌栄で学ぶ学生のほとんどは、寄宿舎生活を送っていたことが、「通学可能な学生は通学願いを出して許可を受けた」[27]という記述から読み取れる。としは当然ながら寄宿舎生活を送り、キリスト教精神に基づく生活と学びのなかで人格を磨き、自立した女性に成長していったといえる。

1.3　幼児教育者としてのスタート

1928（昭和3）年3月､頌栄での2年間の学びを終え20歳となったとしは､1929（昭和4）年4月から幼児教育者として第一歩を踏みだすことになった。初任地は、山形市の山形千歳幼稚園（以下千歳幼稚園：現在の千歳認定こども園）であった。千歳幼稚園の設立は1916（大正5）年で、山形市柳町（現在の七日町5丁目）に、C・Dクリーテ（以下クリーテ）宣教師夫妻によって開園された[28]。千歳幼稚園の初代園長はクリーテ夫人が務め、助手として宮城女学校卒のミセス・長島（ママ）[29]が加わった。としにとって保育者として初めて赴任する幼稚園に、宮城女学校卒業のOGが関わっていたということはひときわ心強かったと思われる。

宮城学院とつながりが深いクリーテについて、『天にみ栄え宮城学院の百年』[30]の記述か

ら確認しておきたい。クリーテは1883（明治16）年合衆国ケンタッキー州リヴィル市デュートに生まれ、1907（明治40）、オハイオ州のハイデルバーグ大学を卒業、その後セントラル神学校（のちに合併されてモンタナ州ウェブスターグローブ神学校）を卒業し、オハイオ州アッパー・サンダスキの牧師として伝道に従事していた。1911（明治44）年、外国伝道局と外国伝道についての契約を交し1911年の11月に来日している。以後19年間、山形・秋田両県で福音伝道の仕事に携わっていた。クリーテは他の宣教師と共に山形中学校（現在の山形東高等学校）と山形高等学校（現在の山形大学）で英語を教えたり、巡回説教を毎年精力的に行い伝道に心血を注いだことからその成果が順調に伸びていた。

そんな布教活動と幼稚園の運営が軌道に乗ってきていた1930（昭和5）年の春、クリーテに宮城女学校校長として着任してほしいという話がおこり（第6代ファウスト校長は自分の後任にはクリーテが適任と推薦したことによる）、クリーテは当惑する。多忙であっても比較的自由だった伝道生活から学校長という新しい生活への転換は熟慮せずにはいられないものだったであろう。しかしついにクリーテは宮城女学校校長の就任を決意し、ファウスト校長の後任として、1930（昭和5）年4月より1940（昭和15）年まで10年間宮城女学校の第7代校長として尽力することとなる。クリーテが校長の時、宮城女学校は50周年記念行事を行っている。クリーテ夫人は1926（昭和元）年12月に千歳幼稚園園長を辞任し、1935（昭和10）年9月から1941（昭和16）年6月まで宮城女学校の英語教師として尽力した。

としが千歳幼稚園に就職したのは1929（昭和4）年であり、クリーテが宮城女学校校長となるのが1930（昭和5）年であることから、としは赴任後1年間はクリーテ夫妻とともに千歳幼稚園の運営と教育に力を注いだことが確認できる。ミセス・永島に加え、幼稚園行事で母親たちのコンサートを開催したおりには、宮城女学校からハンセンと菅井りう[31]が援助に来たこともあった。これらから宮城女学校関係者が千歳幼稚園を時折訪れていたのは明らかであり、千歳幼稚園と宮城女学校の関係は深いものであったといえる。

千歳幼稚園は2016（平成28）年に創立100周年を迎えた。その時の記念誌『千歳幼稚園100周年に寄せて』には、としが作詞した《思い出のアルバム》の歌詞とともに、旧職員柳原悦子がとしについて次のような記憶を記している。

「園児が帰ったあと音楽に合わせてダンスの練習に汗を流していた。」

「ただ一人洋服姿で若々しく元気に踊ったり、歌ったりしていらしたハイカラな丹野先生を、義姉は驚きと憧れのまなざしで見ていました。」[32]

としが就職した1929（昭和4）年は、まだ和服が主流であった時代である。神戸の頌栄では幼児教育、保育について学びながらファッションセンスをも磨いたのではないだろうか。洋服を着こなしいきいきと動き回る若さあふれるとしは、心身ともに輝いていたこと

が推測できる。幼児教育に情熱を傾けていたとしの姿は、同僚に対しても大きな影響を与えていただろう。またとしは、千歳幼稚園に勤務していた時に、山形六日町教会の日曜学校の先生もしていた（注 5）参照)。

千歳幼稚園に 3 年間勤務した後、としは新設される幼稚園に移動することを決意する。盛岡善隣館とその一角に幼稚園を創設する計画があることを知り、1931（昭和 6）年 4 月、23 歳の時に幼稚園創設のメンバーとして尽力する決意をし、千歳幼稚園を退職したのである。この盛岡への移動が、としにとってのちに夫となる増子鐵哉との出会いとなる。

ここで盛岡善隣館設立の概略を記しておく[33)]。米国ジャーマン・リフォームド・チャーチ教団は、盛岡基督教会（現在の下ノ橋教会）を応援するために派遣した宣教師の居住の場として、1888（明治 21）年現在地に約 900 坪の土地を購入した。1895（明治 28）年に会堂と牧師館が完成する。1920（大正 9）年にシングレー宣教師によって宣教師館が建設され完成した。その後シュレーヤ宣教師夫妻が 1922（大正 11）に来日し、1924（大正 13）年に着任する。シュレーヤは宣教師館の敷地の一角に新しい建物を建てる計画を立てた。当初の計画では幼稚園を設置する予定だったが、幼児のみならず全ての年代の人々が利用できる施設として、社会教育を目的としたキリスト教教育センターの設立を決め、1931 (昭和 6) 年に幼稚園開園と同時に盛岡善隣館が誕生する。この創立のために 1930 (昭和 5）年からシュレーヤを補佐していたのが、増子鐵哉（以下鐵哉）であった。彼はシュレーヤの通訳と翻訳をしたり業務を補佐したりするために、1931（昭和 6）年正式に盛岡善隣館に就職する。

一方、としは、同じ年に開園された泉幼稚園に赴任する。としのここでの仕事ぶりの記録を確認することはできなかったが、シュレーヤ夫妻のもと新しい園舎で、キリスト教精神に根差した幼児教育の実践に日々取り組んでいたであろうことが推測される。

鐵哉については前述しているが、としの兄である三男の三壽と東北学院専門部文科の同級生であったことから、鐵哉ととしはすぐ打ち解け、お互いに惹かれるようになったのではないかと思われる。二人はシュレーヤ夫妻に見守られて、シュレーヤ宣教師の司式により、1933（昭和 8）年 7 月 20 日に結婚した。鐵哉 28 歳、としは 25 歳であった。

写真1　旧宣教師館：大沢川原センター
（www.city.morioka.iwate.jp/shisei/moriokagaido/rekishi/1009379/1009390.htmlより転載）

なお、シュレーヤ夫妻は宮城学院と関連が深いので次のことを確認しておきたい。コーネリア・L・シュレーヤ夫人は1957（昭和32）年から1959（昭和34）年まで宮城学院の大学で英語の教鞭を取っている。宣教師で夫のギルバード・W・シュレーヤは1962（昭和37）年に軽井沢別荘を宮城学院へ寄贈している。軽井沢別荘については宮原論文[34]で詳細に述べられているので参照いただきたい。

その後善隣館は1976（昭和51）年に盛岡市に売却され、現在は宣教師館のみが盛岡市の大沢川原センターとして市民に親しまれ現存している。教会は下の橋教会として別の場所で活動している。

1.4　増子とし として

鐵哉は岩手善隣館、としは併設の泉幼稚園に勤務した縁で巡り合い結婚した。結婚の2年後1935（昭和10）年12月に鐵哉は体調不良を理由に善隣館を退職することになり、としも泉幼稚園を退職し一緒に上京する。鐵哉は、1936（昭和11）年に横須賀海軍工廠光学実験部（潜水艦のレンズの研究）に勤務が決まり、終戦まで横須賀海軍工廠に勤務した。その後日本綿糸布輸出組合[35]、代々木学院、東京ヒレル・トレーディング・カンパニーに勤務した。

としは、1936（昭和11）年5月1日に東京市入谷尋常小学校[36]附属幼稚園代用保母として採用され1939（昭和14）年12月15日まで勤務する。1940（昭和15）年4月30日には東京市明石幼稚園に保母として、1942（昭和17）年12月15日まで勤務する。戦時体制下の色合いが濃くなってきた1943（昭和18）年3月31日には、東京市月島幼稚園に移動した。当初は保母としての勤務であったが、半年後の同年9月には幼稚園長兼保母職となる。

この月島幼稚園に勤務し始めた1943（昭和18）年にとしは、山梨県で国民学校教員免許状音楽専科訓導を取得している（写真2）。第二次大戦中・戦後の国民学校教員検定の状況について丸山剛史は、『山梨県教育百年史』を手掛かりに次のような報告をしている[37]。山梨県では、第1に1941（昭和16）年に初等科訓導講習会を開催し、同年山梨県立臨時教員養成所を設置した。1944（昭和19）年4月には臨時教員養成所を増設した。第2に山梨県は、教員資格向上のために長期の講習会を設けて、その修了者に対して上級の免許状を与えることを行っていた。第3に検定の受験者･合格者は東京、長野、神奈川、栃木、埼玉、山口、三重、北海道など県外受験者が多くいた。そして、1941（昭和16）年の専科訓導の記録から専科訓導の無試験合格者は3名（10名中）、試験合格者は13名（86名中）であったことなどを述べている。としは1943（昭和18）年に検定試験によって国民学校教員の資格を取得しているが、この時期は月島幼稚園の保母として勤務し始めた頃であり、在職中の7月14日に検定試験に合格したことになる。国民学校教員免許状を取得したことによって、9月30日には月島幼稚園園長兼保母となった可能性が大きいとい

えよう。一般的にこの当時の公立幼稚園園長は小学校の校長が兼務していたが、国民学校教員の資格を取得したことによって、としは35歳にして園長職を認められたと考える。

國民學校教員免許狀
増子とし
試驗檢定ノ上國民學校
音樂專科訓導タルコトヲ免
許ス
昭和十八年七月十四日
山梨縣
第一二七九號

写真2　山梨縣で取得した国民学校教員免許状

1941（昭和16）年10月文部省は、空襲の危険が迫ってきたことから一定期間幼稚園の保育を停止することを示唆したが、1944（昭和19）年に現実となる。空襲被災地域では幼稚園や託児所の閉鎖が進められ、5月には、東京都では幼稚園は全面的に休止されることになった[38)]。

1944（昭和19）年4月、月島幼稚園は月島戦時託児所長と変わったため、としは幼稚園長から所長となり、東京都戦時託児所事務も嘱託される。としと明石幼稚園、月島幼稚園と同僚で主任保母だった細川とよ（以下細川）の回想[39)]によると、月島・京橋地区の幼児の疎開先が鮮明に記録されている（写真3）。1945（昭和20）年6月18日、としは長野県富士見疎開保育所へ31名の幼児と6名の保母、2名の調理担当者とともに疎開し、東京都富士見疎開保育所所長を兼務することになる。

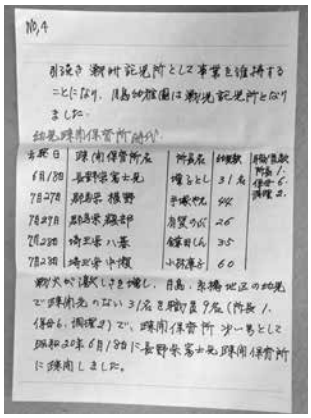

No.4
引続き 戦時託児所として事業を継続することになり、月島幼稚園は戦時託児所となりました。
幼児疎開保育所 始末
年月日 | 疎開保育所名 | 所長名 | 幼児数 | 職員数
6月18日 | 長野県富士見 | 増子とし | 31名 | 所長1. 保母6. 調理2.
7月27日 | 群馬県 榛野 | 手塚やち | 44 |
7月27日 | 群馬県 嬬恋 | 角賀うめ | 26 |
7月28日 | 埼玉県 八基 | 鎌田しん | 35 |
7月28日 | 埼玉県 小畑 | 小沢庫子 | 60 |
戦火が激化しさを増し、月島・京橋地区の幼児で疎開先のない31名を戦災者9名（所長1、保母6、調理2）で、疎開保育所 第一号として昭和20年6月18日に長野県富士見疎開保育所に疎開しました。

写真3　としと同僚だった細川とよ氏の回想メモ

1945（昭和 20）年 11 月 30 日、終戦によって疎開事業が終了となる。細川はこの疎開保育事業で得たものとして、次の 3 つを記している。①親子の愛情は他人が如何に努力しても及ばないものである。②疎開時に体験した苦労は、今後どんな辛い時があっても乗り切れる力と自信を持たせてくれた。③敗戦後昭和 21 年 3 月 12 日都立保育園 20 ケ所が開設されたが、園長について男性にするか女性にするか大変な問題だった。女性が園長というポストに就くことは考えにくかった。しかし、戦時中に子どもを守り疎開の保育事業を見事にやってのけた女性の力が見直され、保育園の運営ができないことはないと、民生局厚生課職員の猪鼻、山下両名が奮斗した。昭和 22 年頃、民生館が設立され保育園を吸収統合し、男性が園長の地位を占めようとしたが、この時としをはじめ女性園長が一致団結して民生局長の前で猛烈に抵抗し対決した。その結果女性側に軍配があがり東京都の公立保育園 7 か所の保育園長はすべて女性が務めることになったのである。

終戦後 1945（昭和 20）年 12 月 1 日、としは東京都民生局厚生課厚生係の兼務を依頼される。これによって 1946(昭和 21)年 4 月 30 日に東京都月島幼稚園園長兼保母を退職し、同日に東京都婦長の任命を受け民生局勤務となる（写真 4)。さらに同年 12 月 27 日には民生局児童課勤務となる。

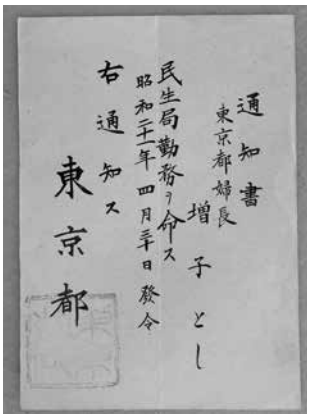

通知書
東京都婦長
増子とし
民生局勤務ヲ命ス
昭和二十一年四月三日 發令
右通知ス
東京都

写真4　東京都民生局辞令通知書

文部省

写真5　文部省からの委嘱状

40 歳となったとしは 1948（昭和 23）年 10 月 10 日に、文部省より「保育要領改訂委員会臨時委員」を委嘱される（写真 5)。このことは、音楽教育者として、としの知見を深める要因となったと思われるので後述することとする。

ところで、1949（昭和 24）に創立 60 周年記念を迎えるにあたり頌栄では、記念行事として 8 月 1 日から 6 日まで「夏期学校」を開校している。その際、広島文理科大学学長長田新は保育学の基本問題、関西学院大学文学部長今田恵は保育における教育心理、頌栄同窓会長兒玉古麻は母の遊戯、そして文部省保育要領改訂委員となった卒業生のとしが招聘され、増子敏子（ママ）は改訂保育要領に於ける音楽リズムの理論と実際の講演をそれぞ

れが行った。この記念行事には大阪、京都を含め外来の参加者、頌栄の学生などで盛会であったことが記録されている[40)]。

さらにとしは、1949（昭和 24）年検査吏員に任命され（写真 6）、東京都民生局の福祉部と厚生課に勤務することになり、合わせて東京都立高等保母学院の講師としても尽力した。この都立高等保母学院は 1948（昭和 23）に児童福祉法が施行されたのに伴い、保母養成機関として開設されたものであった。としは他に白梅短大と聖徳短大でも「音楽リズム」の講師を引き受けており、「音楽リズム」の教授者として引っ張りだこで、この時期は毎晩帰宅が遅かったようである[41)]。

技師 増子 とし
児童福祉法第四六條の規定による検査吏員を命ずる
昭和二十四年八月一日
東京都

写真6　東京都検査吏員任命書

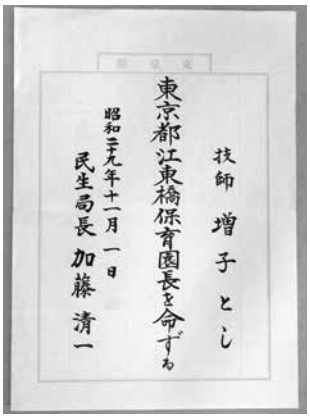

技師 増子 とし
東京都江東橋保育園長を命ずる
昭和二十九年十一月一日
民生局長 加藤 清一

写真7　東京都江東橋保育園長の任命書

1954（昭和 29）年 46 歳のときに、としは東京都江東橋保育園長に任命される（写真 7）。この江東橋保育園は 1949（昭和 24）年 9 月に地域の要求に応え誕生した保育園で、前述の都立高等保母学院は同じ建物の 2 階を使用していたが、1 階と屋上増設分を使用して乳幼児福祉のセンターとして事業を開始することとなった。都立高等保母学院が 1950（昭和 25）年 7 月に港区に新築移転することになると、建物は全面的に保育を拡充する施設として運営されることになった。としが江東橋保育園長として赴任するのが 1954（昭和 29）年であることから、まさにこの保育の拡充、乳幼児福祉センターとしてスタートして間もなくだったといえる。その後江東橋保育園の園舎は、1958（昭和 33）年 7 月から 9 月にかけて園舎の大改築が行われ、10 月 18 日に新装の園舎で保育が再開された。

子どもの発達、成長にかかわるセンター的役割を担っていた江東橋保育園の園長として、子どもと身近に接することのできる保育の現場に復帰できたとしは、喜びにあふれていたのではないだろうか。江東橋保育園長を務めていた時のとしの様子について、読売新聞の増沢一彦にインタビューを受けた出版社フレーベル館の元編集者河合隆一は、次のように述べている。

「打ち合わせで園長室にいると、子供たちがひっきりなしに入ってきて、園長と楽しそ

うにおしゃべりしていく。一方、大人にはとても厳しい人で、約束の時間に遅れたりすると、“この次から会わないからね”とはっきり言われました」

「河合さん、今度できた曲、いいわようと、ふだんは怖い先生が顔をくしゃくしゃにして、うれしそうに手書きの原稿を渡してくれたんです」[42)]

この曲が、『幼児のためのリズミカルプレー』（1961（昭和36）年出版）に収められた《思い出のアルバム》であった。江東橋保育園長の時代にとしは理想の保育、幼児教育を実践するために、全精力を傾けていたのではないかと思われる。

ところで、夫の鐵哉は東京ヒレル・トレーディング・カンパニーを退職後、1961（昭和36）年に自費を投じて、江戸川区に私立善隣館保育園[43)]を設立している。善隣館保育園を設立することにした背景には、としと鐵哉の盛岡善隣館での日々が理想的なものだったことが関係しているのではないだろうか。としは江東橋保育園という東京都の公立保育所園長となり、日々の保育に邁進していたと思われるが、とし自身の教育理念はキリスト教精神に基づいた保育、教育を実践できる環境であり、その在り方について鐵哉と日ごろ語り合っていたのではないかと推測する。

ただ善隣館保育園を設立するとまもなく、としと鐵哉はそれぞれ体調がすぐれない日々が多くなり、支えあって善隣館保育園を運営していたようである。としは1963（昭和38）年に脳髄膜炎を発病し、慶応大学医学部附属病院に入院する。その後自宅療養の生活に入る。

鐵哉は善隣館保育園理事長と園長として幼児教育に関わり、1969（昭和44）年に辞任するまで善隣館保育園を支えたが、日常の実務に携わっていたわけではなかったようである。現在も保育が受け継がれ行われている江戸川区の善隣館保育園、横浜市泉区の善隣館幼稚園のホームページを見ると、としが善隣館保育園の園長をしていたと記されているが、実際はとしが園長として活躍した形跡はなく、記念写真などにも二人の写真は見当たらないことなどから窺える[44)]。

1963（昭和38）年3月とし55歳での発病以来、吉野氏によると介護はかなり重労働であった。夫の鐵哉はとしを施設に入れることを拒み、娘の吉野氏と手となり足となり自宅で共に暮らしながら看病にあたった。鐵哉は1988（昭和63）年83歳で亡くなり、その後は吉野氏が看病に努めた。としは1997（平成9）年89歳で亡くなった。

このことからとしの89歳の人生の後半34年間は療養生活だったことになる。つまりとしが残したさまざまな業績は、それまでの55年間のものでありそこに凝縮されているといえよう。

自宅療養中のとしの状態について、読売新聞に次のような記述がある。

「自宅で家族と静かに暮らしていた増子の記憶は、日がたつごとに途切れ途切れになっていた。ある時、テレビから『おもいで（ママ）のアルバム』が流れてきた。朝のワイ

ドショーで芹洋子が歌っていたのだ。見ていた増子がポツリと漏らした。「ああ、いい曲ねえ、この歌・・・・・・」自分が作詞した曲とはわかっていない様子だった。夫の鐵哉(88年死去)がびっくりして言った。「とし子、これはお前が作った歌じゃないか！」長女の吉野トキ子（55）は「自作のことさえ忘れてしまった母を見て、父は相当ショックを受けたんでしょう。堪え切れずに、思わず大きな声を出したんだと思います」としみじみ語る[45)]。

吉野氏はとしの晩年について、家の中でも手を引いて連れて歩く容態だったこと、他の記憶は薄れていっても、ピアノに向かわせるとスラスラ弾いたりしたことを語られた。これは音楽の記憶力、読譜の記憶力、ピアノを弾くという脳と指が連動する反応力は最後まで衰えることなく残されていたということを示しているのではないだろうか。としにとって音楽によって培われた感覚は、生きることの中枢にあり続けた。つまり、としが健康な時期に修得した読譜力と音楽の記憶、ピアノを弾くという技能は終生生き続け、脳細胞に働きかける力を有していたといえる。

2. としの業績

としは、幼児音楽教育者としての業績と東京都の行政職としての業績を残したが、ここでは次の3つの観点について整理する。第1は東京都の行政職時代に文部省に任命された保育要領改訂委員にかかわることについて検討することである。第2はとしの作詞した作品をまとめ作詞者としてのとしの作品の特徴について考察することである。第3は幼児教育者としての著書、論考などの業績のまとめとそこから見えてくる特長について探ることである。

2.1　保育要領改訂委員として

1946（昭21）年4月に東京都の行政職として民生局に勤務することとなり（写真4)、6月には東京都保育研究会を発足させる中心メンバーとして奮闘する。この研究会は東京都の公立保育園に勤務している保育者をメンバーとし、働く保育者の待遇の問題や保育についての研究を協議していた[46)]。この民生局での仕事ぶりが評価され、幼児保育分野における音楽教育関係の適任者として推薦されたと思われる。としは1948（昭和23）年10月10日付けで、文部省より保育要領改訂委員会臨時委員に任命されている（写真5)。

保育要領改訂委員会（以下委員会）は、1948（昭和23）年3月に出版された『保育要領』全体の改訂のために1948（昭和23）年9月に文部省学校教育局初等教育課（以下文部省）により設置された。設置時の委員の名簿、記録は残されていないが、委員会を運営する文部省の課長であった坂元彦太郎は、委員には音楽リズムについて一歩進めることのできる人たちばかりを招集した[47)]と記しており、その委員の一人として、としは委員会設置の

1 か月後に臨時委員として任命されたと思われる。坂元は、特に保育内容の項目の一つである「リズム」について研究を重ね、「遊戯」の刷新をはかることを検討しようとしていた。またこの委員会には『幼児のためのおんがくとリズムの本』の作成と『幼稚園のための指導書　音楽リズム』を作成するという目的があった。この本の執筆者関係者は 22 名で、としは、東京都庁民生局児童部技師増子トシ（ママ）として名を連ねている。

さて、初等中等教育局初等教育課長が坂元から大島文義に交代した時の 1949（昭和 24）年 6 月の史料には、保育要領改訂委員名簿に 23 名が記されている[48]。それによると委員の内訳は幼稚園教諭 5 名、小学校教諭 3 名、大学教員 2 名、文部省関係者 10 名、その他 3 名である。その他 3 名は、東京都庁民生局児童課増子トシ（ママ）、舞踏家の邦正美（としがのちに『幼児のための音楽カリキュラム』を出版するにあたって推薦のことばをよせた）、そして作曲家の大中寅二である。大学教員は、東京女高師教授戸倉ハルと東京家政大学教授山下俊郎の 2 名である。小学校教諭は、世田谷区立尾山台小学校教諭酒田富治、杉並区立杉並第九小学校教諭関根保江、東京高師附属小学校教諭小林つや江の 3 名である。幼稚園教諭は、東京都港区西櫻幼稚園教諭山村きよ、財団法人日出学園幼稚科主事土屋まさ、東京女高師附属幼稚園教諭菊池フジノ、東京昭和幼稚園長沢野千年、東京第一師範附属幼稚園教諭安藤寿美江の 5 名である。委員全体のなかでもまた文部省関係者のなかでも音楽的知見が高かったのは作曲家で文部省社会教育局視学官であった諸井三郎[49]であろう。初等中等教育局初等教育課には真篠将の名前もある。『幼稚園のための指導書』のまえがきには「本書の編修（ママ）委員会を組織したのは昭和二十三年九月で、当時の学校教育局初等教育課が、保育要領の改訂の仕事として、まず音楽リズムの指導をとりあげたのに始まり、翌年省内の組織替えによって、この仕事は初等中等教育局初等教育課で引きついで今日に至った。以来編修委員会を開くこと前後三十回、さらに小委員会を十五回、動きのリズムのための集まりを二十回開催した」[50]とあり、委員は毎週のように時間をかけて議論を重ねていたことが読み取れる。

なお田邊はこの時の委員の一人でであった真篠将に 2013 年 8 月にこの会議の様子をインタビュー調査している。それによると毎回審議事項が予め委員に知らされ分担された委員が原稿を書き、それを持ち寄り細部にわたり納得するまで議論をしていたこと、当時はアメリカの占領下にあり委員会で話し合ったことは司令部の検閲を受けていたことなどを報告している[51]。

としはこの保育要領改訂委員に任命されたことによって、当時日本の音楽分野、音楽教育分野の第一線で活躍していた人々と毎週のように顔を合わせ、議論をかわす機会を得たのである。これによって、としが音楽教育者として視野を広げるきっかけとなったであろうことは十分に推察できる。

ここで、文部省がつくった最初の幼児教育書といわれる 1948（昭和 23）年 3 月 1 日に刊行された『保育要領』について確認しておきたい[52]。この『保育要領』は、アメリカ

連合軍最高司令部民間情報部教育部顧問のヘレン・ヘファナンの指導のもとに作成された。ヘファナンは幼児の特性をおさえた保育要領の作成を主張し、音楽については幼児は音楽に敏感で聞いたり歌いながら踊ったりするのを好む傾向にあり、幼児が遊びながら自然に歌うのは、安全感、幸福感があふれている証拠であるとした。このことから教師は幼児が音楽を聞き、リズムを認識し、これに感応するような支援をし、幼児と共に唱和すべきであるとした。またヘファナンは幼児の興味を重んじる自由保育を主張したが、この考えには『保育要領』作成委員長の倉橋惣三も納得し、最終的には倉橋を中心としてまとめられた。国の定めた基準を示したものではなく、教育・保育の内容や方法について参考となる教育書で新しい幼児教育の方向性を指向するものであった。『保育要領』には次のような特徴がみられる。1 つは、保育内容として幼児の広い生活範囲が取り上げられ見学、リズム、休息、自由遊び、音楽、お話、絵画、製作、自然観察、ごっこ遊び・劇遊び・人形芝居、健康保育、年中行事の 12 項目が示された。それまでの保育内容が遊戯、唱歌、観察、談話、手技等であったことからすると、休息、ごっこ遊び、年中行事などの諸種の分野を含む総合的な幼児の生活に基づいた活動が項目として取り上げられたことは、幼児教育の独自性を示唆するものである。2 つは、保育の内容は幼児の経験であるとして、一日の生活は自由遊びが主体であり、子どもの興味や要求を誘い促し助けたり、成長発達に適した環境を作ったりなど幼稚園、保育所、一般の父母に役立たせようとした幼児教育の手引き書となっていることである。また、リズムの唱歌遊びの項においては、歌に合わせて遊びたいという幼児の自然な要求からくるもので、大人の考えた振り付け遊戯をその形のままで教え込むよりも、幼児の自由な表現を重んじることと記されている。このような『保育要領』の刊行は、終戦直後の混迷に陥っていた幼児教育の関係者に具体的な示唆と希望を与えたが、実践に反映させることが難しい保育現場も多かった。12 項目の保育内容は、以後 8 年間終戦後のわが国の幼児保育界で盛んに研究、論議、実行されたが、1956（昭和 31）年には健康、社会、自然、言語、音楽リズム、絵画製作の 6 領域に変更されることになる。

この頃小学校教育においては、児童の発達と生活全体に即した経験主義に基づくカリキュラム編成すなわちコア・カリキュラム運動が展開されていた。その影響を受け、幼児教育においてもカリキュラム作りに熱心に取り組む園も見られるようになったが、実情と合わず机上の計画になる場合もあった。こうした動きのなかで、保育要領改訂委員会が発足した。委員会では初めに「リズム」の問題を取り上げ、検討を重ね『幼稚園のための指導書－音楽リズム編』を刊行したのである。

なお、『保育要領』における保育内容は、リズムと音楽は別の活動として示されており、音楽リズムということばは使用されていない。音楽と身体表現を融合する概念として『幼児のためのおんがくとリズムの本』の作成会議において、音楽リズムということばが用いられるようになっている。1953（昭和 28）年に文部省から発刊された『幼稚園のための

指導書　音楽リズム』においては、幼児の音楽リズム指導の目標、幼児の生活と音楽リズムとの関係、幼児の生理的心理的発達と音楽リズムとの関係、幼児の音楽経験の指導など音楽リズムについての解説と指導法を具体的に記している。また付録として、楽譜を掲載している。

上：写真8、下：写真9　としの講演の様子

2.2　作詞者としてのとしの作品と特長

次に作詞者としてのとしについて、作風とその理念にせまってみたい。としは、子どもの歌の作詞を数多く行っているが、その詩の魅力、特徴はどこにあるのだろうか。子どもの詩についてとしは論考[53]でいくつか考えを述べている。

たとえば、子どもの発達をあまり認識せずに過重な教材を与えがちになる一般的現象に警鐘を鳴らし、童謡詩人の創作による立派な美しい詩やうたであっても、子どもが理解できないものは適していないと次のように主張している。

・「詩や、うたとしては、拙劣なものであっても、こどもの言葉をかりた詩であり、うたであることが肝要です。それは、こどもが理解し、こどもの感情にアッピールし、こども自身のものとなれるからです。」（p.285.）

また、幼児に対する緻密な深い観察の必要性を何度も述べ、幼児がどんなことばに興味を抱き、何度も口ずさんでいるか、幼児が表現しやすい、表現したいという気持ちを起こ

すような素材を用意することの大切さを次のように述べている。

・「幼児が、見たり、発見したり、経験したり、想像したりしたままを、きわめて自然に、うたい出せるようにこどもが日常使っている言葉で、しかも、リズミカルに綴ったものーそのような歌材を用意しておく必要があります。」（pp.293-294.）
・「こどもの心はそのまま詩であるといわれますが、その詩情をこだわりなく率直に発現させるための音楽をーその音楽に誘われて自分たちの歌が、自分たちの言葉で率直にうたい出される歌曲をー保育者としては用意しておかなければなりません。」（p.294.）
・「幼児のうたは、こども自身の感情の発露であり、しかも、その間に流れ出る美しい音楽によって、一層、刺激された場合、幼児は、うたうだけに終ることはないでしょう。心に浮かぶ想像の世界にあそびながら、首を振り、手足を動かして、うたあそびをはじめます。」（p.295.）

これらからとしは、子どもの歌は大人からみて詩が平易であっても、子どもが日常使っていることばで繰り返して口ずさむような詩であること、子ども自身の耳にふれ、目に映り、手でさわった感をもつ素材による歌であること、子どもの発達にあった興味にあった詩であることを子どもの歌の理念として作詞にあったと考える。

ところで上田豊は、童謡・唱歌、子どもの歌について風景をキーワードにして歌詞について論じている。この論考からも、としの詩について検討をしてみたい。上田は、唱歌が基調としているのはその誕生の経緯から花鳥風月という日本の風景であり、童謡は子どもの姿がうたわれているもののやはり風景のなかで描写される傾向があるとしている。しかし時代が下ると、感情や願望が主となり風景が従の役割になっている歌が多くなっていることに疑問を投げかけている[54)]。

さらになつかしさを感じる卒園のうたとして《ありがとう･さようなら:井出隆夫作詞、福田和禾子作曲》《思い出のアルバム：増子とし作詞、本多鉄麿作曲》《さよならぼくたちのほいくえん：新沢としひこ作詞、島筒英夫作曲》の 3 曲に着目し、それぞれの曲の歌詞について次のように分析している。《ありがとう・さようなら》は具体的な保育の風景ではなく、漠然とした内容であり、《さよならぼくたちのほいくえん》は先生が別れのメッセージとして園児との別れの心情を白露しているように感じられる。それに比して《おもいでのアルバム》の歌詞は、先生（保護者）と園児の対話形式の曲であり、先生の呼びかけに園児らがそれぞれの季節における出来事を応え、出来事が具体的な遊びの風景としてうたわれている。この 3 曲についての考察をふまえ、卒園の歌として歌い継がれる要素をもっているのは《思い出のアルバム》である[55)]と指摘している。

確かに《ありがとう･さようなら》には、「まぶしくかがやく」、「おもいでのきず」、「夢のつばさ」という子どもには伝わりにくい抽象的な文言が並んでいる。《さよならぼくた

ちのほいくえん》には、「なんどわらって、なんどないて、なんどかぜをひいて」「どこではしって、どこでころんで、どこでけんかをして…」という子どもが主体というよりは保育者が子どもとの生活を回想しているような文言がみられる。

一方《思い出のアルバム》は、「ぽかぽかおにわで　なかよくあそんだ …」のぽかぽかの擬声語のリズムが生かされ、子どもが主体となる言葉で構成されている。としの歌詞は、子どもの心に寄り添った子どもが体験した風景を素直に描写している歌詞、表現している歌詞ということができる。また、演出家で作家の久世光彦も三月の晴れた朝にいつも近くを通る幼稚園からこの歌が聞こえてくると立ち止まっておしまいまで聴いてしまいこっそり泣いてしまっていたという。春なら庭に咲いたきれいなお花、夏なら麦わら帽子に砂山、四季を通じて、子どもたちが遊んだ思い出をうたっているが、久世には自分の学生時代や仕事、家族のことなど自分の人生を振り返る歌にきこえた[56]といえよう。

表 1 に示したようにとしはおよそ 50 篇ほどの子どもの歌の詩を作成しているが、その詩には安西愛子、磯部俶、落合保、小林利夫、本多鉄麿、松田トシ、森義八郎、渡辺茂（五十音順）という 8 人の作曲家、音楽家、教育者が作曲をしている。作曲者の一人で歌のおばさんとしても名を知られた松田トシは、歌の選択として子どもが耳から聞いてすぐ理解できるもの、日常子どもが使っている言葉のもの、詩情のあふれているものを選ぶべき[57]としている。これからもとしの詩に作曲をした人々は、子どもの心情と子どもが体験したと思われる風景がみずみずしく綴られているとしの詩に思わず、曲をつむぎだしたのではないだろうか。

としの詩は、子どもの目でみた心で感じた風景と情景を表した内容となっており、子どもはもちろんその風景や情景は大人には懐かしさと同時に、素直な気持ちになってその時々を追体験させるようなことばで作られているように思われる。

表 1 はとしの作詞による主な子どもの歌をまとめたものである。

表1　増子とし作詞による子どもの歌（主なもの）

曲名	作詞	作曲	所収本	初版（上）・資料とした版（下）
1ツリーのおかざり	増子とし	森義八郎	保育のための 音楽カリキュラム2	1952（昭和27）年10月1日 1953（昭和28）年6月20日
2ゆきのこ	増子とし	森義八郎	同上	同上
3まりあそび	増子とし	Roeder.	同上	同上
4かたつむり	増子とし	安西愛子	幼児のための 音楽カリキュラム春	1956（昭和31）年5月20日 1978（昭和53）年3月30日62版
5あめはなぜふるの	増子とし	松田トシ	同上	同上
6きんとと	増子とし	松田トシ	同上	同上
7じどうしゃブーブー	増子とし	松田トシ	同上	同上
8みずたまり	増子とし	松田トシ	同上	同上
9おはなのトンネル	増子とし	渡辺　茂	同上	同上
10さくらのはな	増子とし	渡辺　茂	同上	同上
11おじぎ	増子とし	無記名	同上	同上

12あまだれポッタン	増子とし	本多鉄麿	同上	同上
13なみとび	増子とし	ドイツ民謡	幼児のための 音楽カリキュラム夏	1956(昭和31)年7月20日 1977(昭和52)年2月10日60版
14にじのはし	増子とし	無記名	同上	同上
15きしゃポッポ	増子とし	増子とし 編曲	同上	同上
16おちばのおどり	増子とし	磯部　俶	幼児のための 音楽カリキュラム秋	1956(昭和31)年11月20日 1977(昭和52)年2月10日62版
17うまごやのエスさま	増子とし	ドイツ民謡	同上	同上
18うんどうかい	増子とし	本多鉄麿	同上	同上
19さんりんしゃ	増子とし	本多鉄麿	同上	同上
20フレーフレーフレー	増子とし	本多鉄麿	同上	同上
21おはよう	増子とし	本多鉄麿	幼児のための 生活あそび	1959(昭和34)年5月10日 1975(昭和50)年11月25日49版
22くつのアパート	増子とし	本多鉄麿	同上	同上
23またあした	増子とし	本多鉄麿	同上	同上
24おだんごころろん	増子とし	渡辺　茂	同上	同上
25こいぬのぼうや	増子とし	渡辺　茂	同上	同上
26おかたづけ	増子とし	増子とし	同上	同上
27おもいでのアルバム	増子とし	本多鉄麿	幼児のための リズミカルプレー	1961(昭和36)年 1963(昭和38)3月10日再版
28はるのコーラス	増子とし	渡辺　茂	同上	同上
29はながさいた	増子とし	本多鉄麿	同上	同上
30かざぐるまがまわる	増子とし	渡辺　茂	同上	同上
31ごあいさつごっこ	増子とし	落合　保	同上	同上
32ゆうえんち	増子とし 作詞構成	渡辺　茂	同上	同上
33どうぶつえんごっこ	増子とし	本多鉄麿	同上	同上
34ゆうだち	増子とし 構成(作詞)	本多鉄麿	同上	同上
35こかげ	増子とし 構成(作詞)	本多鉄麿	同上	同上
36うんどうかいごっこ	増子とし	本多鉄麿	同上	同上
37おにんぎょうさん	増子とし	渡辺　茂	同上	同上
38おやまにいきましょ	増子とし	本多鉄麿	同上	同上
39むしのアンサンブル	増子とし 構成(作詞)	渡辺　茂	同上	同上
40はっぱとどんぐり	増子とし 構成(作詞)	渡辺　茂	同上	同上
41つみきあそび	増子とし	本多鉄麿	同上	同上
42ありがとう	増子とし	落合　保	同上	同上
43ふゆじたく	増子とし 構成作詞	本多鉄麿	同上	同上
44おいしいおかし	増子とし	本多鉄麿	同上	同上
45クリスマス・プレー	増子とし	森義八郎	同上	同上
46おもちゃのクリスマスイブ	増子とし 構成(作詞) *	小林利夫	同上	同上
47ねずみのおしょうがつ	増子とし	渡辺　茂	同上	同上
48さむくはないぞ	増子とし	渡辺　茂	同上	同上

49ゆきこんこ	増子とし 構成(作詞) *	本多鉄麿	同上	同上
50かぜっこ	増子とし 構成(作詞) *	本多鉄麿	同上	同上

＊『幼児のためのリズミカルプレー』の目次と楽譜集のタイトルには平仮名で《おもいでのアルバム》と記してあるが、『幼児のためのリズミカルプレー』解説書のなかでは《思い出のアルバム》と漢字を用いている。

としが作詞をした楽曲が所収されている著書を確認すると、作詞者名を記入しなかった年代も見受けられることから、この表 1 に記した以外にも、としの作詞による曲は存在することが推測される。最後の著書となる『幼児のためのリズミカルプレー』は、ストーリー性を持ち、歌・踊り・遊びと音楽が一体となった《思い出のアルバム》を含む 32 の楽曲を編集している。表記には作詞構成、構成作詞、構成と若干違いがみられるが、1 つの楽曲は歌の部分とピアノ伴奏に合わせてストーリーをより楽しく表現するために手足や首などを動かしたり踊ったりする部分とで構成され完結するものとなっている。そこでここでは、歌の歌詞がついているものは表 1 に構成・作詞として、歌詞のついていないものについては表 2 に構成としてまとめた。なお、としのいくつかの詩（作詞）については資料として後述することとする。

またとしは、作曲と編曲をする力を持ち合わせており、トライアングル、鈴、タンブリン、マラカス、ハンドカスタ、太鼓などの打楽器を用いた楽曲を数曲作曲している。各楽器の演奏箇所については楽器を絵で示しわかりやすくしている（表 2)。としは作曲と編曲をする力を持っていたことが明らかである。しかしながらとしは、歌詞の作成により力を入れていた。それは、子どもの気持ちに寄り添った子どもが生活のなかで使っていることばで表現するということに、こだわりがあったからではないだろうか。

表2　増子とし編曲、リズム編曲、構成(詩のついていない楽曲)の一覧

曲名	用途	拍子	調	所収本	
みんなたのしく	マーチ(ピアノ譜)	4分の4	ハ長調	保育のための 音楽カリキュラム2	増子とし 編曲
はっぱはひらひら	歌と楽器奏	4分の4	二長調	保育のための 音楽カリキュラム2	増子とし リズム編曲
				幼児のための 音楽カリキュラム夏	
あひるのみずあび	歌と楽器奏	4分の2	二長調	幼児のための 音楽カリキュラム夏	増子とし リズム編曲
楽しき農夫 (シューマン)	楽器奏	4分の4	ヘ長調	保育のための 音楽カリキュラム2	増子とし リズム編曲
				幼児のための 音楽カリキュラム秋	
おさんぽしましょ	自由表現のための ピアノ曲	4分の4	ト長調	幼児のための リズミカルプレー	増子とし構成 落合　保作曲

はるがきた	楽器奏と踊りのための ピアノ曲	4分の4	ハ長調	幼児のための リズミカルプレー	増子とし構成 本多鉄麿作曲
はるのあそび＊	踊りのためのピアノ曲	4分の4	へ長調	幼児のための リズミカルプレー	増子とし構成 本多鉄麿作曲

2.3　としの残した著書

次にとしの著書について考察を進めることとする。としは幼稚園教諭、保育者として働きながら著書の執筆と論文執筆などを精力的に行っていた。この 1950 年前後に、同じように音楽教育や幼児教育分野で活躍していた人物から次の 4 人について確認しておきたい。小林宗作（1893 ～ 1963）は、音楽の基礎であるソルフェージュ、リズムなどを身体で感じ受け止め表現するという音楽教育の立場から日本の小学校教育、幼児教育にリトミックを紹介し普及させた。天野蝶（1891 ～ 1979）は、体操教師であったことからリトミックを体操の視点からとらえ体操と音楽を結びつけた天野式リトミックを考案した。戸倉ハル（1896 ～ 1968）は、日本女子体育連盟を創設し、学校ダンス、幼児教育に貢献した。ダンスと音楽という視点で活躍している。一宮道子（1897 ～ 1970）は、『子どものバイエル』の筆者編集者であり、子どもの歌の作曲も行った。小林つや江（1901 ～ 1987）は、小学校教諭として数々の子どもの歌を作曲しているが、《まつぼっくり》は特に知られている。この当時幼稚園教諭、保育者向けの著書、テキストがいくつか出版されており、戸倉、天野、一宮は共著で 1948（昭和 23）年に『たのしい歌と遊戯』、『うたとゆうぎ　春の巻・秋の巻』、『こどものこよみ』を発刊している。また、戸倉と小林つや江は共著で 1958（昭和 33）年に『うたとあそび』第 1 集、第 2 集（不昧堂）を発刊している。いずれも楽曲とその指導法を解説する内容となっている。これらの人々はとしとほぼ同時期にそれぞれの立場で幼児教育、音楽教育に尽力し保育者と教員に影響を与えていた。

としは、『幼児のための音楽カリキュラム』春・夏・秋・冬（フレーベル館）を 1956（昭和 31）年に刊行した。それは 1982（昭和 57）年まで 66 版を重ねるロングセラーとなった。4 つの季節ごとに楽譜集とその楽曲の指導法が示されている解説集の 2 冊セットになっているものである。としは、この著書を出版するにあたって、はしがきに次のように記している。

幼児の音楽生活はまず聞くことから始まります。周囲の人々のうたう歌や、レコードやラジオを聞くことを好みます。聞くばかりではなく、さらにすすんで自分自身でうたいだし、あるいは手に触れる物をとって音を出し、歌や音に合わせて身体を動かしておどるなど、多種多様な音楽活動を始めます。

従来、歌は歌、踊りは踊りと、別個のものとして取り扱われてきた傾きがありますが、幼児期においては前記の各行動の間に、密接不離のつながりがありますので、これを有機的立体的に取り扱わねばなりません。

歌曲としてもどんな基準でえらぶべきでしょうか。たとえば「さくら」という歌題のものは数多くありましょうが、お手もとにある歌の参考書の中から、受け持つ幼児にふさわしい歌といえば、そこには自ずと限定されてまいりましょう。すなわち、歌詞や曲の長さ、発音の難易、歌意の理解、メロディーの難易、音域の問題等要するに幼児が興味をもってうたい、しかもこれを簡単な打楽器を用いて伴奏つけ得るもの、グループの踊りに発展し得るものがのぞましいのです。

このように、各方面から考慮して選択すべきでありまして、もし、本書にのせてある歌や曲が五歳児向きのものであって、あなたの受け持たれるクラスが、三、四歳の幼児である場合は、当然三、四歳児向きのものを選択しなければならないのですが、幼児の音楽理解程度によっては、五歳児のものをそのまま使用することも差し支えありません。前記の歌や曲に限らず踊りも楽器もゲームもいずれも年齢層に応じ、発達段階に沿う基本的なものを考慮いたしました。

本書はこれの前身ともいうべき、『保育のための音楽カリキュラム』上下二巻を、「春・夏・秋・冬」の四巻に分冊し、多数の新作を加えて、新装いたしました。みなさまの日々の保育のよき伴侶としていただければ幸いに存じます。

なお、本書はとくに体裁と編集に考慮を払い、歌曲ごとに挿絵を加えて「解説」を別冊にいたしました。

保育に用いる歌材がいかに数多く、そして適当なものが用意されましても、その歌材に対する保育者の十分な理解と、適切な取り扱いを欠きますと、せっかくの歌材を活かすことができません。

本書をお用いになる方は、どうぞ別冊の「解説」を熟読くださいませ。著者は「解説」に多大の努力を払ったつもりです[58)]。

ここには保育者への 2 つの示唆が記されている。1 つは子どもの年齢にこだわらず目の前の子どもの発達と興味に応じた教材を選ぶことである。2 つは選んだ教材、歌材を十分に教材研究し指導方法を検討することである。どのように歌材を指導したらよいか迷う保育者のためにそのモデルとなるものとして「解説」を独立させたと考える。このことから『幼児のための音楽カリキュラム』は、保育者にとって心強い本でありテキストであっただろう。

また、巻頭言には推薦の言葉として、東京帝国大学文学部で美学を専攻しその後日本を代表する舞踊家となった邦正美が次のように寄せている。

教材のための教材ではなく、はっきりした保育目的と方法があって、その方法を具象的なものを借りて達成する場合にのみ、教材は教育的意義を持つものであるが、増子としさんはこの点を十分に研究考慮して、本書を書いている。すなわち増子としさんは教

材をならべるために、かくも多くの例をあげたのではなく、はじめにりっぱな方法論があり、それを達成するために具象的な教材例をあげたのである。

しかも、一つの教材を通して運動のリズム、音楽のリズムその他を多角的にあつかっている点に、本書の特色があり、またこのことについては、筆者がここ三年熱心に研究していたことを私はよく知っている。幼児だからといって音楽と舞踊の本質を混同すべきではないし、だからといって幼児保育にこれらを別々にあつかうことも無理である。今までの多くの書物は、この最も大切な点に、なんらの解決も与え得なかったのであるが、本書はこれを解決した点においても注意すべきであり、一般の保育者はもちろんのこと、およそ幼児を持つ母親にとっても、参考以上の価値があるものと思う[59]。

（傍線筆者）

邦ととしは、保育要領改訂委員会の会議をとおして面識を得たことは前述したが、この会議のなかでのとしの発言や言動に邦は共感するものを感じていたのではないだろうか。巻頭言に、「増子としさんはこの点を十分に研究考慮して…」、「筆者がここ三年熱心に研究していたことを私はよく知っている。」ということばを寄せたことからも推察できる。

としは、『幼児のための音楽カリキュラム』の前に 1952（昭和 27）年『保育のための音楽カリキュラム 1・2』（フレーベル館）を発刊しているが、この本はひとつの楽曲について左側のページには楽譜、右側のページにはうたい方、あそび方などの指導方法が記され見開きになっている構成となっている。使いやすく、月ごとのカリキュラム表が掲載されていたことから保育者にとって参考となり愛用されていたと思われる。その後、曲数を増やし春夏秋冬と季節ごとに分けて 4 冊とし、楽譜集と解説集の 2 冊で 1 セットという形に変えて発刊されたのが『幼児のための音楽カリキュラム』である。この後に出版された『幼児のためのリズミカルプレー』も同様の楽譜集と解説集で 1 セットとなっている。本の内容、構成はうたい方、あそび方を示しているもので、これは戸倉、天野、一宮、また戸倉と小林が著したものと大きな差が認められるわけではない。としの著書が保育者に愛用され増版された一番の理由は、やはり月ごとのカリキュラムが示されていることであろう。カリキュラムは各月の単元、目標が示され、保育活動（①きく②歌う③踊り④楽器⑤ゲーム）のそれぞれに対応させ、準備、注意事項、効果判定が詳細に示されており、保育者は毎月の実践計画を立案するにあたって大いに参考になった思われる。他にはどんな違いが見られるだろうか。

そこで、同じ楽曲についてすべての同時代に発刊された本を比較検討しようとしたが、としの著書と戸倉・小林の著書には数曲同じ曲が見つけられたが、戸倉・天野・一宮、あるいは天野・一宮の著書には全く同じ楽曲についての記載は見当たらなかった。そこでここでは同じ《こいのぼり》を取り上げている戸倉ハル・小林つや江（A 版）と、とし（B 版）

について比較検討してみることとする。

表3　《こいのぼり》の比較

A：戸倉ハル・小林つや江　版

戸倉ハル 小林つや江	速度	拍子	調	所収
えほんしょうか　はるのまき 《こいのぼり》	♩=120	4分の3	ハ長調	うたとあそび　第1集 1958（昭和33）年初版発行 1973（昭和48）年15版発行 不昧堂出版　pp.14-15.
＜うたい方＞	＜あそび＞			指導の過程
1. 全体として明るく元気にうたう。 2. ハ長調､4分の3拍子、速度　♩=120 音域　一点ハ～二点ハ（1オクターブ） 3. 3拍子は割合に少ないから、この曲で拍子とリズムをしっかりみにつけさせる。 3拍子　♩　♩　♩｜♩　♩　♩‖ 3拍子　♪♪♩　♩｜♩　♩　♩‖ やねよ　り　た　か　い 4. 一段目、四小節は　*mf* ＜　＞ 二段目、四小節は　*p* ＜　＞ 三段目、四小節は　*mf* ＜ ＞　＞ ＊四段目、四小節は　*f* ＜　＞ 5. おおきいまごい―おとうさま ちいさいひごい―こどもたち があやまりやすいから注意する。 あそび こいのぼりをつくる。こいのぼりの絵をかく。	準備　一列円陣 方法 やねより　たかい　こいのぼり 互いに両手をとって、左の方にまわる。 おおきい　まごいは　おとうさま 右の方にまわる。 ちいさい　ひごいは 両手を肩にかけながら、円心にはいる。 こどもたち 手を肩にとったまま、かしらを左右に四回かるくまわして、おとなりと話合う様子をする。 おもしろそうに 次第に手をつなぎながら後ろにさがってもとの円にかえる。 およいでる 四拍手する。			○子どもとこいのぼりについて、話合いをする。 ○園のこいのぼりを、みんなであげる。 ○三拍子の曲想を、感得させる。 ○こいのぼりのまわりで、この動作を教える。 ○お節句のよろこびをたたえさせる。 取扱の注意 ○軽快に動作をさせる

＊p.15.には四段目ではなく三段目と記してあり、三段目、三段目と三段目が2つになっている。ここでは四段目とした。

（戸倉ハル・小林つや江『うたあそび』不昧堂p.15.より転載）

B：増子とし　版

増子とし	速度	拍子	調	所収
えほん唱歌《こいのぼり》	♩=120	4分の3	二長調	幼児のための音楽カリキュラム（春）解説 1956（昭和31）年初版発行 1978（昭和53）年62版発行 フレーベル館　p.25.

＜うた＞	＜おどり＞	○あそび方
(1) うたう気持ち…明るく、元気に (2) うたいだす機会 5月初旬のこいのぼりの観察のおり、おぼえるともなくききおぼえ、歌詞を理解してうたいだすようにする。 (3) 指導上注意を要する点 A　3拍子のリズムをしっかり身につけさせる。 B　拍手したり、楽器を打ったりする。 C　歌詞を正しく発音して、調子よくうたう。 ♩ ♩ ♩	♩ ♩ ♩ ‖ ♪ ♪ ♩ ♩	♪ ♪ ♩ ♩ ‖	○あそびのめあて 3拍子のリズムを、動きを通して、自然に覚えさせる。3拍子の動きを、𝄾か 𝄾𝄾𝄾 のどちらかの動きに表現し、子どもらしく把握させる。	A　順序 (1) こいのぼりが風に吹かれるようすを、お話からはいってあそぶ。こいのぼりになったり、ながめたりする。 (2) 3拍子のリズムを𝄾か 𝄾𝄾𝄾 のどちらかの動きで遊ぶ。 最初は手だけであそぶ（拍手、体をたたく、手をふる）♩♩♩ (3) うたいながら歩く（1拍目を強く踏む） 片足とび（右足 ♩ ♩ ♩　左足 ♩ ♩ ♩） 床を打つ（右足 ♩ ♩ ♩　左足 ♩ ♩ ♩） 1足とび（1拍めでとぶ） (4) 手と足を結合する。 B　方法 1列円形 「やねよりたかいこいのぼり」 3拍子の1拍めにアクセントをつけて伸び上るようにして、1小節ごとに右手、左手、右手、左手と交互にあげ、上の手をみるようにする。 「おおきいまごいは」 両手のひらを円の中に向けてあげ、左右交互に、前後に動かしながら6歩円心に前進。 「おとうさま」 立ち止まって首を右にかしげ、左斜めを見るようにして、両手を左右にひろげて上下にゆする。 「ちいさいひごいはこどもたち」 「おおきいまごいはおとうさま」と同様動作をおこなって円周にもどる。 「おもしろそうにおよいでる」 連手して円周上を右方に軽く飛び歩きをする（1拍めにアクセントをつけるとよい）。

（増子とし『幼児のための音楽カリキュラム（春）解説』フレーベル館p.25より転載）

A 版、B 版の共通点、相違点はそれぞれ 3 つあげられる。共通点は、第 1 に明るく元気な気持ちで歌うこと、第 2 に《こいのぼり》が 3 拍子の曲であることをふまえて、この曲を歌ったり踊ったりしながら 3 拍子の感覚を身に付けさせること、第 3 に一列の円陣、円形であそぶ形を示していることである。

相違点は、第 1 に A 版はハ長調、B 版はニ長調と調が異なっていることである。原曲はニ長調であることをふまえると、B 版は原曲を活かし原調のニ長調で取り扱っているといえるが、A 版は保育者がピアノ伴奏を弾きやすいようにハ長調に転調させたのではないかと推測できる。第 2 に A 版は段ごとに強弱を詳細に示し、こいのぼりを作ったり絵をかいたりする活動と連動させている。それに対して B 版は、曲の強弱というよりも歌詞を正しく発音し、歌詞を理解して歌うということに力点を置いている。第 3 に A 版は子どもとこいのぼりについて話合いをし、こいのぼりをみんなであげるという活動に結びつけているが、B 版は子どもにこいのぼりを観察させ、風に吹かれるようすなどを話たりしながら、こいのぼりになった気持ちになって歌ったり遊んだりすることと子どもの心情に迫るような活動を示している。

このように、同一曲であっても著者、編集者によって内容に若干の相違がみられることが明らかとなった。としの B 版の特徴は、あくまでも子ども主体となっていて、子どもがこいのぼりをどう理解し表現したいのかを大切に扱っている、保育者は教材選択、教材研究にあたって、子どもと一緒にどう学びを深めていくかを追求することを忘れてはならないことを示唆していると考える。

2.4　論考・著述

としの著書、論考などを作品目録として表 4 にまとめた。特徴としていえるのは、楽譜とその楽譜をどう実践するか、子どもにどのようにその曲を用いるかなどを述べた具体的要素を持ったものが多いことである。そのなかで『幼児保育講座　第 3 巻』の「幼児のリズム遊び」と『現代保育講座 2　保育の技術（上)』の「音楽リズム 2 音楽リズムの指導の実際」は、共同執筆による学術書であり、当時幼児教育に尽力していた人と一緒に執筆している。そこで、この 2 つの論考に共通している点について次に考察してみたい。

『幼児保育講座　第 3 巻』は 1950（昭和 25）年に出版された。幼児保育に関連するそれぞれの項目、たとえば「人間の生涯と幼児」、「幼児の家庭教育」、「親を困らせる幼児の質問とその導き方」、「集団遊びについて」、「子供に多い病気」、「季節保育所の開設の手引」「幼稚園職員の資格と教養」などで構成されている。としは「幼児のリズム遊び」[59] について 12 節にわたって論じている。12 節全編にわたって一貫している教育理念は、保育者は幼児の発達段階に応じた身体的、精神的、知的特質を基礎知識として理解すること、幼児を知ることが大事で、そうしてこそリズム遊びの充分な効果がおさめられるとしていることである。幼児にとって遊びこそは最も重要な幼児の生活であるが、リズム遊びは幼

児の興味をひく活動であり、歌や楽器をとおして自己表現の機会を与え、遊びに豊かな内容を与えることが可能となる。リズム楽器や音の出る玩具が身近にあることは幼児のリズム感の発達に影響を与えるので、この点を母親や保育者は特に留意し環境の整備を考える。また、幼児の身体的リズム表現には①幼児自身の内部にある本能的欲求によって自然に自発的に筋肉活動をおこすもの、②環境からくる外的刺激からおこるものの 2 つがあるが、音楽のリズムは②に相当する。幼児に音楽を聞かせてそれに体のリズム活動を調和させようと試みるのが、「音楽によるリズム遊び」であるとしている。未熟な表現であっても幼児自身が音楽を聴いて直接受けた感銘が動きや踊りになってあらわされることから、幼児の反応をよく観察し次への力となるようにヒントを与えたり助言したりし、幼児自身の表現をひろいあげて遊びにとりいれてゆくことが大切であると示唆している。保育者は全体の中で迷ってしまう一人がいたらとくに親切にたすけの手を差し伸べることをしなくてはならないとも述べている。保育者として、子ども一人ひとりを慈しみ、子ども主体の保育を実践するために教材研究と指導法の工夫を研究する必要性を提言している。

『現代保育講座 2　保育の技術（上)』は 1956（昭和 31）年に出版された。1 章幼児のカリキュラム、2 章自然の観察、3 章社会の観察、4 章音楽リズムその 1、5 章音楽リズムその 2 で構成されている。4 章の 1 節は真篠将が「音楽指導の考え方」、2 節は松田トシが「音楽指導の実際」を執筆している。5 章の 1 節は戸倉ハルが「幼児の遊戯の指導」、2 節はとしが「音楽リズム指導の実際」[60]、3 節は、小林宗作が「リズムによる教育（リトミック)」を執筆している。

としはこの論考において、保育施設の環境は一つとして同一ではなく、幼児一人ひとりの知的、身体的発達の程度、家庭環境の中で経験する歌や音楽によって興味も異なる。まったくバラバラの幼児を対象として保育をするときに必要なのは幼児を緻密に観察すること、幼児に対する深い観察が要求されると述べている。幼児の音楽の受け取り方は幼児の興味と深く関連しており、歌は子どもの言葉で子どもが理解するものであること、調子にのりやすくはずむようなリズムの曲であること、気に入り繰り返し歌ったり表現している部分はどこかを見定めることなどを記している。さらに、幼児の生活行動、生活環境を音楽によって進めるようにすることは、保育者の計画と指導には高い知性と技能が要求されるが、従来の言葉による保育方法よりも保育労力においてはひじょうに軽減される特長を持っていると述べている。なお、この理念のもとに出版したのが『幼児のための生活あそび』で、「〇〇をなさい」「〇〇をしましょう」とことばを用いて教えたりしつけたりする方法から、音楽リズムの助けをかりて気分良く、自然に、楽しく、スムーズに生活の動きを習慣的に行わせていくことを目指していた。

以上 2 つの論考から、2 つの共通点が見えてくる。1 つは観察の重要性である。子どもの実態を把握するために一人ひとりを緻密に観察すること、主体は子どもであるから子どもがどんなことに興味を抱き、どんな遊びに夢中になり、どんな歌を喜んでロずさんでい

るかなどじっくり観察することの大切さについて述べていることである。2 つは、保育者はあくまでも助ける人、支援者であることである。子どもが主体であることを大事にし、稚拙な遊び、表現であったとしても子どもの心から出てきたものは共感し次にステップアップできるように適切なアドバイスや表現（ダンス）などができるように保育者は常に研究を怠ってはいけないということである。としの子どもに向ける温かい眼差しと保育者はあくなき向上心を持って保育にあたることを主張していると考える。

次にその他の著述について確認したい。としは、月刊誌『保育の友』のなかで「音楽リズム」について、1956（昭和 31）年 1 月から 1959 年（昭和 34）年 2 月まで 3 年間連載を担当している。他に『月刊保育カリキュラム』と『教育技術幼児と保育』にも執筆している。また、カラー版の『たのしい幼稚園』という教育絵雑誌では、童謡のページを担当し、「おかあさまへ」という見出しで母親に語りかけるように歌とその歌にまつわる解説を連載している。このコーナーは絵がとても重要であり、としは初山茂、岩崎ちひろなどの画家とも交流を持ったことが推測できる。これらは東京都江東橋保育園長の時代である。

このように、としは多岐にわたり著述活動を行っていたことが明らかとなった。ただその活動はおよそ 40 歳から 50 歳頃に集中している。『保育要領改訂委員』に任命され、「音楽リズム」について十分思考する機会を得てから、幼児音楽教育者として密度の濃い 10 年間を過ごしたといえる。

おわりに

本稿はとしの人と業績について考察を行ってきた。としが宮城女学校で学び頌栄に進み幼児音楽教育者として歩んだ道は決して平坦ではなく、戦争と保育現場における女性の社会的地位の獲得などその時々の社会的状況に翻弄されていたように思われる。しかしとしは、決して消極的になったり悲観的になったりすることなく、前を向いてしなやかに生きていたと考える。これはとしの書いた詩やお母さまへと記した記述、著書のまえがきなどを読むと、としの温かくも凛とした人柄が伝わってくる。一人ひとりの子どもへの教育愛がこもっている。この土台には「神を畏れ隣人を愛する」というキリスト教精神が根底にあったように思われてならない。宮城女学校での学び、頌栄での学びと、としがいつどこで洗礼をうけたかは確認できなかったがクリスチャンとしての歩みは、戦争やいかなる場面においてもけっして後退することなく、生涯を通じて一直線の歩みであった。

としを偲ぶ会において、戦前から戦後まで公私ともに懇意にしていた細川とよ（1 章 4 節参照）が寄せたことばを借りて本稿のまとめとしたい。

この会場にお集まりの先生方、お久しぶりでございます。皆様方に、お目にかかれますのも、増子先生の御引き合わせで、先生をお偲びしながら、過ぎし日のじぶんをも振り返るチャンスを与えて頂きました。これも感謝でございます。

増子先生には昭和16年4月、京橋区、現在の中央区の明石幼稚園でご一緒させて頂きました。それから何と56年の歳月が流れ、当時30才半ばでいらした先生は89才、私は80才となりました。

保育に携わっていらした20数年間のことも、短時間ではとても言い尽くせません。たくさんの業績のおありになる先生ですが、私はその一端の戦争中の幼児疎開保育と研究会での先生のご活躍をあげたいと思います。

疎開保育のことは、当時ご苦労を共になさった先生方がいらっしゃいますので、お話を伺いたいと存じます。

研究活動は、戦後、今までつかっていた教材は新しい時代には不向きで、使用出来なくなり必要に迫られて始まりました。音楽に堪能な先生は、リーダーとして後輩を引っ張って資料作成に努められました。歌に、手遊びに、現在様変わりをしていますが、明石町保育園の或いは勝鬨橋保育園のホールに集い、教材の検討をし、夜遅くまでかかってガリ版での印刷をして、皆に配ったこと等、あの当時の様子が鮮明に甦って来ます。皆、明日の保育の為に、愚痴も言わずによくやりました。

増子先生のご努力によって、研究の成果が本として出版され、保育者仲間に普及し、愛用されていきました。

音楽カリキュラムによる教材、楽器あそび、手あそび、生活あそび、リズミカルプレー、三才未満児の教材と、とどまる所を知らず研究は進められ、保育内容も豊かとなりました。今でも3月になるとなつかしい曲「思い出のアルバム」の歌が、テレビやラジオから流れます。増子先生が作詞をなさり、本多鉄麿先生が作曲なさったもので、NHKの「みんなのうた」として放送され、大きな反響を呼びましたが、名曲として歌いつがれています。

鐵哉先生には、富士見の疎開保育所でお目にかかりました。物静かで、暖かく、実直な方でとし先生のよき理解者でいらっしゃいました。戦後建てられた目白の高台のお宅にはよく寄せて頂きました。お子様のいらっしゃらない先生方は、白いスピッツをお座敷で飼って、可愛がって居られました。キャンキャンとよく啼いていました。犬好きでない私には一寸苦手でした。とし先生がご不在の時も、鐵哉先生が応対して下さり、私の持っていったとし先生にお目通し頂く筈の原稿等にも、アドバイスを頂いたこともありました。先生には大変お世話になりました。

増子先生は、今頃天国で先にいらした保育の先駆者の秋田先生、音楽の大好きな深谷先生、組合活動で活躍なさった渡辺みき先生、その外佐々木先生、松平先生、今野先生方と賑やかに保育談義に花を咲かせておいでのことでしょう。

今日は、皆様方から多方面にご活躍の先生の折々の思い出を伺わせていただきまして、先生をお偲び致したいと思います。充分に意を尽くせませんでしたが、挨拶を終わらせていただきます。ありがとうございました。

平成9年11月24日　細川とよ

注

1) 1997 年度の『文人展』では、教員から原阿佐緒、土井晩翠、石井昌光、扇畑忠雄の 4 名を取り上げている。卒業生からは、生地みどり、大井康江、佐々基子、田崎榮、相馬黒光など俳句、短歌、随筆、小説分野で活躍している 22 人を取り上げている。1998 年度の『文人展』では前年度に続きさらに詳しく石井昌光を、卒業生からは増子としを取り上げている。としについては、縁故関係のあった当時宮城学院の事務局長渡邉弘道（弘道の妻信子の叔父が増子鐵哉であった）がまとめている。渡邉弘道については注の 5）も参照されたい。

2) 『文人展』の実行委員会は日本文学科教授犬飼公之先生が発起人となり日本文学科の教員や宮城学院資料室、同窓生の職員、学生などが携わった。

3) 増子としは、残っている資料によると増子敏子、増子とし子、増子トシなどその時々によって使い分けていたようであるが、ここでは戸籍謄本に記されている増子としを用いることとする。

4) 吉野トキ子氏（以下吉野氏）は、秋田県の生まれである。吉野氏がとしと出会ったいきさつは以下のようである。としは秋田県で講演を行った際、秋田県の教育長と面識を得た。当時寺の住職を兼ねていた教育長は、としの講演について講話のなかで語り、それを聞いた檀家の吉野氏の母が、娘が幼児教育に関心をもっていることを住職に伝えた。吉野氏は教育長の取り持つ縁で、としの家から千葉の聖徳短大に通学することになった。1975（昭和 50）年に、吉野氏はとしと鐵哉氏に増子家の養女になってほしいと懇願され米沢トキ子から増子トキ子になった。1976（昭和 51）年増子トキ子は吉野良一と結婚し吉野トキ子となった。（1998 年度『宮城学院の文人展』の冊子には吉野氏は本学の同窓生と記載されているが、吉野氏への聞き取り調査によって正確な出身校を確認できた。）

5) 親族の回想文として次の 2 つを資料とした。1 つはとしの兄三壽の次男である丹野富士雄氏が 2019（平成 31）年 1 月に回想したものをまとめていただいた記録である。2 つは渡邉弘道氏が 1998（平成 10）年に北山キリスト教墓地でとしを埋骨した増子家記念会に合わせて作成したとしと夫の鐵哉についてまとめた 22 ページに渡る栞である。なおその栞には弘道氏が幼少時代は山形で過ごし千歳幼稚園を卒園した後に、としが千歳幼稚園の教諭として赴任したことから、弘道氏の弟は千歳幼稚園でとしに教わったことが記されている。また父の渡邉良亮氏は山形日本基督教会（現在の山形六日町教会）の牧師を務めていたこともあり、兄弟で日曜学校に通っていたとき、としはこの教会で日曜学校の先生をしていたので自分たち兄弟はとしに教わったという記述をしている。なお、『千歳幼稚園 100 周年記念誌』によると渡邉良亮氏は、1927（昭和 2）年 1 月から 3 月と 1941（昭和 16）年 5 月から 1944（昭和 19）年 9 月まで園長を務めたことが記されている。

6) 『頌栄保育学院 85 周年記念誌』頌栄保育学院 1974

7) 『仙台市史』によると丹野保五郎の六郷村村長期間は、1892（明治 25）年 10 月から 1898（明治 31）年 12 月までの 6 年間である（「旧郡町村首長」『仙台市史』資料編 8　仙台市史編さん

委員会　2006　p.20.)。沖野小学校校長については仙台市教育委員会に調査依頼をしたが資料が保管されておらず確認できなかった。

8)　前述5)に記した丹野富士雄氏の回想記録による。吉野氏が交流を持っている親族の1人であり、吉野氏の依頼により丹野家について回想しレポートにまとめた貴重な記述である。

9)　本研究を進めるにあたって、吉野氏がとしの本籍を確認くださり、四男五女であったことがわかった（1998年度の「宮城学院の文人展」の冊子には四男四女と記載されている。）長男:元也、長女:きよし、次男:保次、次女:ふき、三女:スミ、三男:三壽、四男:四郎治、四女:とし、五女：のぶ子の9人きょうだいである。

10）5）と同様　丹野富士雄氏回想記録

11）吉田信太（1870.3.27 ～ 1954.12.24）は、仙台市の生まれで、としの母の弟である。としにとっては叔父にあたる。東京音楽学校本科師範部を卒業の後、広島高等師範学校、神奈川県立第一中学校、第三中学校、高等女学校、東京女子高等師範学校などで教鞭をとった。音楽教師、作曲家として活躍した。主な作品に《みなと》、《とんぼ》など現在愛称されている曲がある。

12）三浦俊三郎は、横浜市二谷尋常高等小学校（現在の横浜市立二谷小学校）、横浜市立一本松尋常小学校、横浜市立本町小学校など横浜市の小学校教員として勤務した。その傍ら『横浜貿易新報』に「国民性と時代相とを基礎とした新音楽の出現」の記事を9回にわたって掲載している。また日本への洋楽の伝来と変遷、明治期の音楽教育の歴史を述べた848ページに渡る研究書『本邦洋楽変遷史』を1931（昭和6）年に日東書院より出版している。

13）ファウスト（アレン・クライン・ファウスト）は、1913（大正2）年に宮城女学校第6代校長に就任し、1930（昭和5）年まで17年間奉職している。この長期の在職は男性の歴代校長では初めてで、宮城女学校の発展に寄与した重要な人物の一人である。ファウストは、アメリカ合衆国ペンシルヴェニア州の出身で、1900（明治33）年に東北学院の宣教師として来日したが、流暢な日本語から教授となり教会史や教育史、教育学、社会学の他、ギリシャ語とラテン語などの教鞭をとり東北学院にも貢献した。仙台の孤児院や盲学校などの経営を助け、結核予防など社会福祉事業の草分けとして活躍し政府から表彰されている（早坂禮吾『天にみ栄え宮城学院の100年』宮城学院、1987、pp.477-539．宮城学院資料室『宮城学院資料室年報』、2003、p.61.）

14）土井晩翠は、仙台市生まれの英文学者、詩人。1915（大正４）年から1924（大正13）年12月まで宮城女学校英文専攻科で教鞭をとった。『天地有情』『晩鐘』など多くの詩集を発表している。学校校歌の作詞も数多く「宮城女学校」校歌の歌詞もその一つである。中学校音楽科歌唱共通教材曲《荒城の月》の作詞者である。

15）畠山千代子は1902（明治35）年登米郡中田町の生まれで8歳の時に転倒し右腕を骨折した時の治療が遅れたことにより切断し義手となる。他の高等女学校では入学を断られ宮城女学校でも幾人かの教師が難色を示すが、ファウスト校長は入学を許可する。英語力に優れ「リア王」の主役を演じるなど快活な女性であった。詳細は宮城学院資料室「大正期の宮城女学校と畠山千代子」『宮城学院資料室年報』2003、pp.59-66. を参照されたい。

16）宮城女学校職員､同窓会委員､学生及び校友の間の交流を深めるねらいで 1890（明治 23）に「文學會」が創設されている。毎月 1 回の例会、毎年 1 回の大会が開かれその記録を記す雑誌として「萩の下露」を発行することとした（『天にみ栄え宮城学院の 100 年』p.449.）。その後「萩の下露」などの定期出版物を合冊し 1917（大正 6）年 10 月に「校報」第一号が発刊された。「文學會」は継続し行われ、1917（大正 6）年 11 月には文學會第 26 回記念大會が開催されている。この記録には英詩暗誦や文章朗読、英語対話戯曲などの他に、土井照子、信子姉妹によるピアノ連弾、独唱、合唱も披露されたことが記されている（『天にみ栄え宮城学院の百年』pp.521-522.）。なお活動の盛んな文学会（ママ）は 1921（大正 10）年に「橄欖」の創刊号が発刊された。そこには英語教師であった土井晩翠が巻頭に詩を寄せている。学生の文芸関係の活動や運動部、課外活動の状況が詳しく記され、研究発表などかなり高度なものも掲載された（『天にみ栄え宮城学院の百年』p.526.）

17）吉野氏は聞き取り調査のなかで幾度となく語っていたことによる。

18）綜合女性史研究会『史料にみる日本女性のあゆみ』2000、吉川弘文館　pp.156-164.

19）頌栄は現在も、頌栄短期大学として保育者養成に尽力している大学である。としは推薦されて頌栄に入学したことが吉野氏への聞き取り調査からわかった。また頌栄保育学院 85 周年記念誌 48 ページには「私たち 17 回生のクラスは 9 名でしたが、宣教師の方や教師の推薦で入学したものばかりでした」という記述があることから、としが推薦で入学したことは確かなのではないかと考える。

20）文部省『幼稚園教育百年史』、1979、ひかりのくに　pp.86-89.

21）文部省『幼稚園百年のあゆみ』1977、pp.32-33.　20）と同書、p.89.

22）6）と同書　p.68

23）JKU（Japan Kindergarden Union of Japan）とはハウをはじめ宣教師たちの力によって設立された幼稚園だけの組織である。ハウは初代の会長に任命された。6）と同書　p.37. p.41､文部科学省『幼稚園百年のあゆみ』pp.32-33．JKU に関する論考としては、清水陽子「キリスト教主義幼稚園普及における J.K.U の役割について」『日本保育学会大会研究論文集』41、1988、pp.664-665. 永井優美「日本幼稚園連盟（JKU）における保育者養成論:保育者の資質能力への共通理解の形成」『教育学研究年報』東京学芸大学教育学講座学校教育学分野・生涯教育学分野編 33、2014、pp.107-122. などがある。

24）エ・エル・ハウ（1852.1.12 ～ 1943.10.25）は、マサチューセッツ州ボストン近郊のブルックラインに生まれた。両親は信仰の熱い開拓者であった。幼い頃シカゴの校外ワシントン・ハイツに移住し両親は農業に従事した。両親は熱心なクリスチャンであった。ハウは 1858 ～ 1867 年までイリノイス州クリプトンの公立学校とニューハンプシャ州ワルポールの私立学校で学んだ。1867 年ロックフォード女子専門学校（現在のロックフォード大学）の音楽科に入学し 1869 年まで二年間研鑽を積む。その後勤めながら通信講座で史学、建築学を学んだ。1876 年から 2 年間シカゴ・フレーベル協会保姆伝習学校に在籍し卒業した。そして 26 歳でシカゴに

私立幼稚園を開設し3年間園長を、続いてミス・グランドの学校に招かれて幼稚園教育に6年間従事した。9年間保育の実務経験を積んだ。1887年35歳の時に来日し、1927年引退帰国するまで40年間頌栄での保育者養成に尽力した。（高野勝夫『エ・エル・ハウ女史と頌栄の歩み』1973、頌栄短期大学）

25）松本晴子「教育者増子としの人格形成過程」『発達科学研究』宮城学院女子大学、2019、19、pp.17-24. このなかで頌栄のカリキュラムについても若干考察を行った。

26）吉野への聞き取り調査から、生前としは、ハウから大きな影響を受けたという話をよくしていたことがわかった。

27）高道基編著『幼児教育の系譜と頌栄』頌栄保育学院、1996、p.132.

28）『千歳幼稚園100周年記念誌』学校法人山形つのぶえ学園

29）『天にみ栄え宮城学院の百年』のp.540にはミセス長島と記してあるが、永島てる（旧姓：布施）であることが次の3つの資料から判明した。①宮城女学校の同窓会名簿より、1897（明治30）年宮城女学校第5回卒業の布施てるであるといえる②『校報』第2号1918（大正7）年12月発刊より、布施てるは永島忠重夫人として1916（大正5）年4月より山形市にお移り遊ばし宣教師夫人を助けて専ら神の御事業におつくしていらっしゃいますとの記述がみられる③『山形六日町教会120年の歩み』p.137より、永島てる1916（大正5）年7月21日仙台日本基督教会より山形六日町教会へ転入との記されている。

30）『天にみ栄え宮城学院の百年』宮城学院　1987、pp539-561.

31）ハンセンは英語、聖書、音楽の教員として1907年から43年間宮城学院に奉職した。特に音楽科への貢献は大きく現在のハンセンホールの名称からも偲ばれる。菅井りうは、宮城学院同窓会名簿によると1918（大正7）年宮城女学校高等女学科第26回卒業と同時に宮城女学校音楽専攻科に入学し、1921（大正10）年に宮城女学校音楽専攻科を卒業している。学生時代はハンセンが信頼を寄せていた学生のひとりだったと思われる（『宮城学院資料室年報』宮城学院資料室、第20号、2014、p.62）。

32）28）と同書　pp.20-21.

33）http://www.zenrinkan.com/christiancenter_zenrinkan_history.html
http://structure.cande.iwate-u.ac.jp/german/schraeyer.htm
旧宣教師館の歴史について記したhttps://mosu3.blog.fc2.com/blog-entry-206.htmlによると、1943（昭和18）年には下の橋保育園を開設し､1945（昭和20）年12月23日に会堂が全焼している。1948（昭和23）年、下の橋保育園を廃園し、4月から善隣館の2階で下の橋教会附属泉幼稚園を開園している。

34）宮原育子「宣教師たちの夏休み～宮城学院宣教師たちの軽井沢における別荘所有の変遷～」『宮城学院資料室年報』第24号、2018、pp.39-45.

35）日本綿糸布輸出組合はのちの繊維貿易公団のことで、1947（昭和22）年4月公布の貿易公団法に基づいて設立された四貿易公団の一つである。政府全額出資の公法人で政府直営の機関と

して油種乳の貿易事務を行った。1951（昭和 26）年 1 月に解散している。吉野氏への聞き取り調査によると、鐵哉は戦時中も米軍との通訳など重要な仕事を担当し、政府機関にも英語力を高く買われて重要な任務をおい勤めていた（https://www.jacar.jp/glossary/tem1/0110-0010-0050-0030-0010-0020-0020.html）

36）1908（明治 41）年に入谷尋常小学校と改称された。前身は、1875（明治 8）年創設の第五中学区第一五番公立小学下谷学校である。1923（大正 12）年の関東大震災の被害を受け 1926（大正 15）年に木造校舎から鉄筋コンクリートの校舎となる。震災後に国と東京市が連携し建てたいわゆる復興小学校の一つで大正モダンのあふれた校舎であった。1941（昭和 16）年に東京市入谷国民学校と改称し、1946（昭和 21）年には三校が合併し東京都下谷坂本国民学校、1947（昭和 22）年には台東区立坂本小学校と改称、1996（平成 8）年には区立大正小学校との統合により閉校となっている。ただ校舎はそのまま残っている。としは併設されていた幼稚園に勤務した。

37）丸山剛史「第二次大戦中･戦後の国民学校教員検定」『宇都宮大学教育学部紀要』第 63 号第 1 部、2013（平成 25）、pp.29-30.

38）文部科学省「幼稚園令と幼児教育」『学制百二十年史編集委員会』
http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusyo/html?others/detail/1318241.htm

39）細川とよ（以下細川）は、長野県諏訪郡富士見町出身で、としが子どもを連れて疎開した先は細川の生誕の地であった。細川は東京の明石幼稚園でとしと同僚となり、その後も同業者として公私にわたって長く交流を持っていた。細川は絵画・製作で 1955（昭和 30）年 9 月号から 12 月号まで『月刊保育カリキュラム』に執筆している。

40）高道基編集『幼児教育の系譜と頌栄』頌栄保育学院、1996、p.175.

41）吉野氏への聞き取り調査による。

42）増沢一彦「おもいでのアルバム㊦」『うた物語－唱歌・童謡－』読売新聞、1998.2.15　この記事は 1999 年に、読売新聞文化部が岩波書店より『唱歌・童謡ものがたり』として出版した著書の pp.280-283. に掲載されている。

43）1961（昭和 36）年、土地提供者神尾清吉、長島金蔵、長島秀吉、幼児教育の権威者増子とし・鐵哉夫妻善意によって、施工者上村慎次郎氏の協力によって完成された。翌 37 年 10 月厚生大臣の認可をえて、社会福祉法人善隣館保育園として今日に至っている。http://www.zenrinkan-h.ed.jp/sub1.html

また、江戸川区の善隣館保育園が開園した当時からの保育者だった丸岡夏子、隆夫妻は、自分たちの幼稚園をつくりたいと横浜市泉区に善隣館幼稚園を 1967（昭和 42）年に創立する。開園のことはとてもお喜びになり、『善隣館』という名前を分けてくださいました。http://www.zenrinkan.ed.jp/profile.htm

44）盛岡時代のとしの足跡について調査していたおりに、盛岡下ノ橋協会の松浦裕介牧師より教会員で宮城学院 OG の菊地節子さんを紹介いただいた。菊地さんからはシュレーヤの著書を翻訳

した三原圭子さん、横山ユウさん、長坂綏子さんを紹介いただき 4 人に話を伺う機会を得た。三原、横山、長坂さんはシュレーヤと鐵哉について調べているうちにとしについて興味を惹かれ山形千歳幼稚園、東京の善隣館にも足を運んだことを知った。その時に伺った情報が元となっている。貴重な資料もお借りすることができた。

45）42）と同書

46）水野浩志「全国保育連合会の発足」『日本幼児保育史　第 6 巻』日本図書センター、2010、pp.217-218.

47）坂元彦太郎「「音楽リズム」の成り立ちについて（音楽リズム特集号）」『幼児の教育』59 巻 6 号、1960、p.5.

48）田邊圭子「『幼稚園のための指導書　音楽リズム』（昭和 28 年）刊行過程の研究（2）－保育要領改訂委員会資料（昭和 24 年）と関係者へのインタビュー調査からー」『北陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要』第 8 号、2015、p.73.

49）諸井三郎（1903 ～ 1977）は作曲家。限られた動機・主題の、緊密で有機的でテンショナブルな展開・発展による、音の伽藍の構築を目指し、大規模かつ意志的、論理的な、19 世紀風のソナタや交響曲や協奏曲こそが、諸井にとって作曲に値するものだった。日本に真の論理的・構築的作曲の伝統を根づかせることを、自らの使命と考えた。戦後の諸井は、音楽教育行政、音楽大学の運営、それから理論的著作の仕事に主に関わった（片山素秀：音楽評論家。第 153・154 回演奏会（日本の交響作品展 96）新交響楽団プログラムより）

50）文部省『幼稚園のための指導書　音楽リズム』、1953.

51）48）と同書　pp.75-76.

52）20）と同書　pp.331-336.　村山貞雄「保育要領の刊行」『日本幼児保育史　第 6 巻』1975、フレーベル館、pp.240-271.

53）増子とし「音楽リズム指導の実際」『保育の技術 上 現代保育講座 2』1956、金子書房、pp.293-295.

54）上田豊「童謡･唱歌､子供の歌を再考するー風景をキーワードにー」『吉備国際大学研究紀要（人文・（社会科学系）』増刊号、2017、p.157.

55）54）と同書　p.160.

56）「筆洗」『東京新聞』, 2020、3、2.

57）松田トシ「音楽指導の実際」『保育の技術 上 現代保育講座 2』1956、金子書房、p.235.

58）増子とし『幼児のための音楽カリキュラム　春』フレーベル館、1956（昭和 31）年初版発行、1978（昭和 53）年 62 版発行、p.2

59）58）と同書、p.1.

60）増子とし「幼児のリズム遊び」『幼児保育講座第三巻』1950、国民図書刊行会、pp.113-146.

謝辞

本研究を進めるにあたって、調査にご協力をいただいたとしの遺族の吉野トキ子氏には厚く御礼申し上げます。としの兄三壽の次男である丹野富士雄氏には丹野家について回想し記録いただきました。心より御礼申し上げます。また本学の資料室の佐藤亜紀さん、資料保存にご尽力いただいた人間文化学科の大平聡先生には感謝を申し上げます。

本研究は拙稿「教育者増子としの人格形成過程」『発達科学研究』宮城学院女子大学、2019、19、pp.17-24. を大幅に加筆修正した。また、平成 30 年度科学研究費助成事業（基盤研究（C）課題番号 18K02678）による研究成果の一部である。

表4　増子とし　作品目録
Ⅰ．著書

著書名・タイトル	出版社	出版年
『踊と劇』: 新作学校教材1　（分担執筆） 「劇　クリスマス・プレー（児童劇）」pp.17-19. 楽譜　ジングル　ベルス　編曲　増子とし　p.20 　聖夜　　讃美歌105　おそらくこれも編曲　p.21	白眉社	1948（昭和23）年
増子とし（分担執筆） 「幼児のリズム遊び」pp.113 ～ 146 『幼児保育講座　第三巻』 9人による共著	国民図書刊行会	1950（昭和25）年
増子とし編著 『保育のための音楽カリキュラム　第一巻』	フレーベル館	未確認
増子とし編著 『保育のための音楽カリキュラム　第二巻』	フレーベル館	1952（昭和27）年
増子とし編著 『親と子のたのしいホームゲームとやさしいフォークダンス』 作詞作曲者名は無記名　踊り方遊び方を記している	フレーベル館	1954（昭和29）年
増子とし著 『リズム遊び：空間を活かした第1集』	ひかりのくに昭和出版	1955（昭和30）年
増子とし著 『幼児のための音楽カリキュラム　春』 『幼児のための音楽カリキュラム　春　解説』	フレーベル館	1956（昭和31）年5月20日初版 1978（昭和53）年3月30日62版 1956（昭和31）年5月20日初版 1978（昭和53）年3月30日62版
増子とし著 『幼児のための音楽カリキュラム　夏』 『幼児のための音楽カリキュラム　夏　解説』	フレーベル館	1956（昭和31）年7月20日初版 1977（昭和52）年2月10日60版 1956（昭和31）年7月20日初版 1977（昭和52）年2月10日60版

増子とし著 『幼児のための音楽カリキュラム　秋』 『幼児のための音楽カリキュラム　秋　解説』	フレーベル館	1956(昭和31)年11月20日初版 1977(昭和52)年2月10日62版 1956(昭和31)年11月20日初版 1977(昭和52)年2月10日62版
増子とし著 『幼児のための音楽カリキュラム　冬』 『幼児のための音楽カリキュラム　冬　解説』	フレーベル館	1956(昭和31)年12月20日初版 1978(昭和53)年4月10日60版 1956(昭和31)年12月20日初版 1978(昭和53)年4月10日60版
増子とし編著 『幼児のための生活あそび』	フレーベル館	1959(昭和34)年5月10日初版 1975(昭和50)年11月25日49版
増子とし著 『リズミカルプレー：幼児のための曲集』	フレーベル館	1961(昭和36)年5月
増子とし(分担執筆) 「音楽・リズム」pp.57-64. 『新しい保育計画』 保育界の多年の経験を積まれた練達の先生方の手によって作られた。さきに作られた全保連の委員会編の『標準カリキュラム』より、さらに一歩進んだ。	新標準保育カリキュラム委員会ひかりのくに昭和出版株式会社	1954(昭和29)年8月初版 1956(昭和31)年6月8版
増子とし(分担執筆)都立江東橋保育園長　高等保育学院講師 「音楽リズム　二音楽リズム指導の実際」pp.284-302. 『現代保育講座2　保育の技術(上)』牛島義友、谷川貞夫、平井信義編著	金子書房	1956(昭和31)年初版 1972(昭和47)年11版
「めくらおに」写真提供p.153.都立江東橋幼稚園 増子とし　都立江東橋保育園長 『現代保育講座3　保育の技術(下)』牛島義友、谷川貞夫、平井信義編著	金子書房	1956(昭和31)年初版 1972(昭和47)年11版

Ⅱ．論考

著書名・タイトル	学会誌、本名、出版社	出版年ページ
『音楽手帖』 増子とし　「リズム楽器による幼児の遊びの導き方」 (筆者は東京都児童課指導員)	第5巻　第3号 音教社	1950(昭和25)年 pp.48-52.
『愛育』育児雑誌 増子とし子(ママ)「幼児向きレコード」 東京都庁民生局児童部技師	第18巻　第8号 社会福祉法人恩賜財團 母子愛育會	1953(昭和28)年 8月号　pp.16-17.
『月刊保育カリキュラム』 増子とし「音楽リズム(楽譜)」	ひかりのくに昭和出版株式会社	1953(昭和28)年 9月号　pp.50-63.
『月刊保育カリキュラム』 増子とし「音楽リズム」	ひかりのくに昭和出版株式会社	1953(昭和28)年 10月号　pp.46-64.
『月刊保育カリキュラム』2(11) 増子とし「音楽リズム」 ①歌曲9曲について、めあてと歌、楽器、おどりの指導方法を具体的に記した。 ②生活あそびについて5曲の指導方法を述べたもの。 ③音楽鑑賞4曲の開設。	ひかりのくに昭和出版株式会社	1953(昭和28)年 11月号　pp.53-65.

『月刊保育カリキュラム』 増子とし「音楽リズム」12 冬の曲、クリスマスの曲について歌の指導、歌い方、おどりの指導、あそび方、楽器の指導など丁寧に解説している。	ひかりのくに昭和出版株式会社	1953（昭和28）年 12月号　pp.47-55.
『月刊保育カリキュラム』 増子とし「音楽リズム」1月 選定した8曲について歌の指導、おどりの指導について丁寧に解説している。	ひかりのくに昭和出版株式会社	1954（昭和29）年 1月号　pp.50-60.
『月刊保育カリキュラム』 増子とし「音楽リズム」2月 選定した7曲について歌の指導、おどりの指導について丁寧に解説している。	ひかりのくに昭和出版株式会社	1954（昭和29）年 2月号　pp.48-57.
『月刊保育カリキュラム』 増子とし「音楽リズム」3月 2年間このコーナーを担当した最後の巻。	ひかりのくに昭和出版株式会社	1954（昭和29）年 3月号　pp.48-56.
『保育』: 先生とお母さまの雑誌 増子とし「夏のあそび着のつくり方」	第5巻　第8号 全日本保育連盟　編集	1950（昭和25）年 8月号　p.42-43.
『保育』: 先生とお母さまの雑誌 増子とし「幼児教育の音楽リズムについて」	第5巻　第12号 全日本保育連盟　編集	1950（昭和25）年 12月号　pp.26-35.
『保育』: 先生とお母さまの雑誌 増子とし「幼児向体操について」 東京都庁児童課	第9巻　第10号 全日本保育連盟　編集	1954（昭和29）年 10月号　pp.48-53.
『保育』: 先生とお母さまの雑誌 増子とし「リズム教室」	第10巻　第4号　No.124 全日本保育連盟　編集	1955（昭和30）年 4月号　pp.62-68.
『保育』: 先生とお母さまの雑誌 増子とし「リズム教室」	第10巻　第5号　No.125 全日本保育連盟　編集	1955（昭和30）年 5月号　pp.59-64.
『保育』: 先生とお母さまの雑誌 増子とし「リズム教室」	第10巻　第7号　No.127 全日本保育連盟　編集	1955（昭和30）年 7月号　pp.38-41.
『保育』: 先生とお母さまの雑誌 増子とし「リズム教室」	第10巻　第8号　No.128 全日本保育連盟　編集	1955（昭和30）年 8月号　pp.47-49.
『保育』: 先生とお母さまの雑誌 増子とし「リズム教室」	第10巻　第10号　No.130 全日本保育連盟編	1955（昭和30）年 10月号　pp.45-48.
『保育』: 先生とお母さまの雑誌 増子とし「リズム教室」	第10巻　第11号　No.131 全日本保育連盟編	1955（昭和30）年 11月号　pp.53-57.
『保育』: 先生とお母さまの雑誌 増子とし「保育の中の音楽リズム」	第11巻　第2号　No.134 全日本保育連盟編	1956（昭和31）年 2月号　pp.25-28.
『保育』: 先生とお母さまの雑誌 増子とし「保育の中の音楽リズム」 　このシリーズ担当の最終回	第11巻　第3号　No.135 全日本保育連盟編	1956（昭和31）年 3月号　pp.34-37.
『保育の友』 増子とし「リズム遊び」	第四巻　第一号 全国社会福祉協議会	1956（昭和31）年 1月号　pp.38-39.
『保育の友』 増子とし「音楽リズム」	第四巻　第七号 全国社会福祉協議会	1956（昭和31）年 7月号　pp.35-36.

『保育の友』 増子とし「音楽リズム」	第四巻　第八号 全国社会福祉協議会	1956（昭和31）年 8月号　pp.35-36.
『保育の友』 増子とし「音楽リズム」	第四巻　第九号 全国社会福祉協議会	1956（昭和31）年 9月号　pp.35-36,
『保育の友』 増子とし「音楽リズム」	第四巻　第十号 全国社会福祉協議会	1956（昭和31）年 10月号　pp.39-40.
『保育の友』 増子とし「音楽リズム」	第四巻　第十一号 全国社会福祉協議会	1956（昭和31）年 11月号　pp.35-36.
『保育の友』 増子とし「音楽リズム」 「クリスマスパーティーのあそび」	第四巻　第十二号 全国社会福祉協議会	1956（昭和31）年 12月号　pp.35-36. pp.40-42.
『保育の友』 増子とし「音楽リズム」	第五巻　第一号 全国社会福祉協議会	1957（昭和32）年 1月号　pp.35-36.
『保育の友』 増子とし「音楽リズム」	第五巻　第二号 全国社会福祉協議会	1957（昭和32）年 2月号　p.35.
『保育の友』 増子とし「音楽リズム」	第五巻　第三号 全国社会福祉協議会	1957（昭和32）年 3月号　p.35-36.
『保育の友』特集・現実を一歩ひきあげるには 増子とし「運営の合理化をめざそう」 「音楽リズム」 ＊年間計画表（三・四才児一年保育、五才児二年保育）が記載されているが音楽リズムを担当したと思われる。	第五巻　第四号 全国社会福祉協議会	1957（昭和32）年 4月号　pp.15-16. p.36-37.
『保育の友』 増子とし「音楽リズム」	第五巻　第五号 全国社会福祉協議会	1957（昭和32）年 5月号　p.42.
『保育の友』 増子とし「音楽リズム」	第五巻　第六号 全国社会福祉協議会	1957（昭和32）年 6月号　p.44.
『保育の友』 増子とし「音楽リズム」	第五巻　第七号 全国社会福祉協議会	1957（昭和32）年 7月号　p.42.
『保育の友』 増子とし「音楽リズム」	第五巻　第八号 全国社会福祉協議会	1957（昭和32）年 8月号　p.42.
『保育の友』 増子とし「音楽リズム」	第五巻　第九号 全国社会福祉協議会	1957（昭和32）年 9月号　p.44.
『保育の友』 増子とし「音楽リズム」	第五巻　第十号 全国社会福祉協議会	1957（昭和32）年 10月号　p.42.
『保育の友』 増子とし「音楽リズム」	第五巻　第十一号 全国社会福祉協議会	1957（昭和32）年 11月号　p.42.
『保育の友』 増子とし「音楽リズム」	第五巻　第十二号 全国社会福祉協議会	1957（昭和32）年 12月号　p.42.
『保育の友』 増子とし「特集　10年後の保育所は……一週五日の保育と遊びの指導法の確立」　東京江東橋保育園長 「一月保育計画表・保育計画解説　五才児二年保育音楽リズム」	第六巻　第一号 社会福祉法人 全国社会福祉協議会	1958（昭和33）年 1月号　p.20-23、p.42.

『保育の友』 増子とし「二月保育計画表・保育計画解説　五才児二年保育　音楽リズム」	第六巻　第二号 社会福祉法人 全国社会福祉協議会	1958（昭和33）年 2月号　p.42.
『保育の友』 増子とし「三月保育計画表・保育計画解説　五才児二年保育　音楽」　終わりにあたって	第六巻　第三号 社会福祉法人 全国社会福祉協議会	1958（昭和33） 3月号　p.42.
『保育の友』 増子とし「保育計画のページ　五才児一年保育・6月の保育計画　二人組と輪唱」	第六巻　第六号 社会福祉法人 全国社会福祉協議会	1958（昭和33）年 6月号　pp.34-36.
『保育の友』 座談会「保育のなかの歌をめぐって」 増子とし　東京都立江東橋保育園 西垣郁美　東京私立愛隣団保育園 深谷敦子　東京都立神田保育園 丸山政子　東京私立子どもの家保育園 ＊東京神代幼稚園園長　本多鉄麿　「幼児がつくるメロディーの指導」p10-11	第七巻　第二号 社会福祉法人 全国社会福祉協議会	1959（昭和34）年 2月号　pp.14-19.
教育技術『幼児と保育』 特集　子どもをおくる園の行事 増子とし　「お遊戯会」 東京都立江東橋保育園園長	☆先生とおかあさんのために☆ 小学館	1960（昭和35）年 3月号　pp.15-17.
教育技術『幼児と保育』 特集　楽しい園生活の出発 増子とし「子どもに好かれる先生の条件」 東京都立江東橋保育園園長	☆先生とおかあさんのために☆ 小学館	1960（昭和35）年 4月号　pp.18-19.
教育技術『幼児と保育』 特集　観察記録をどう生かすか 増子とし「こうして身体発育表を生かす」 東京都立江東橋保育園園長	☆先生とおかあさんのために☆ 小学館	1960（昭和35）年 12月号　pp.24-25.
教育技術『幼児と保育』　特集　幼児のリズム遊び 増子とし「年齢別にみた新しいリズム遊び　1：身体活動を活発にする　＜四・五才児用＞はるがきた」	☆先生とおかあさんのために☆ 小学館	1962（昭和37）年 3月号　pp.10-13.
教育技術『幼児と保育』 特集　リズム遊びを活かした発表会 増子とし「発達段階に即したリズム遊び　三歳児のリズム遊びの傾向」　東京・江東橋保育園	☆先生とおかあさんのために☆ 小学館	1963（昭和38）年 2月号　pp.14-15.
教育技術『幼児と保育』増刊 「3・2・1・0歳児の保育」 みんないらっしゃい　作詞・作曲　増子とし おかたづけ　作詞・作曲　増子とし	☆先生とおかあさんのために☆ 小学館	1971（昭和46）年 10月号　p.184.

文・作詞

著書名・タイトル	出版社	出版年
日本のこども絵本 『チャイルドブック』(ごっこあそび) 「むぎふみ」増子とし 　みんなで　むぎふみ　たんたんたん 　そろって　むぎふみ　たんたんたん	チャイルドブック社	1949(昭和24)年12月 第13巻　第12号 ページ不鮮明
キンダーブック絵本観察 『はなうりおじいさん』文　秋田美子　増子とし 絵　沢井一三郎	フレーベル館	1949(昭和24)年3月 第3集　第11編 ページ不鮮明
観察絵本　キンダーブック 「こびとの　くつやさん」 作詞編曲　リズム構成　　増子とし	フレーベル館	1956(昭和31)年12月号 第11集　第9編 ページ不鮮明
雑誌　ひかりのくに 『うれしい　あめ』 「あまだれ　ぽったん」増子とし・詩 本多鉄麿・曲 岩崎ちひろ・絵 こどもは手や首を振りながら気分を出してうたっていますが、これが踊りや楽器あそびなどにつながるリズム教育の基になるものです。そこで上手にうたうことだけで終わらせずにうたいながら手を打ったり自由に踊ったりすることも奨励してあげて下さい。東京都江東橋保育園長　増子とし	ひかりのくに昭和出版株式会社	1958(昭和33)年6月号 第13巻　第6号 ページ不鮮明

表5　資料

著書名・タイトル	出版社	出版年
講談社の教育絵雑誌 『たのしい幼稚園』 東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 童謡「さくらんぼ」　初山　茂・絵　作詞作曲者不明 　おかあさまへ 　仲良く手をつないださくらんぼうが、緑の中から赤いほっぺたをのぞかせているのは、このうえない魅力です。 　初夏の風に吹かれながら、庭や公園を散策して、ぶらぶら揺れているさくらんぼうを見つけたときに、自然に歌い出したくなる楽しい歌です。見たまま、感じたままに、子供たちのことばとして歌いだせるように、美しい絵を見ながら、いっしょに歌ってあげてください。	大日本雄弁会講談社	1957(昭和32)年 7月号　p.12-13.
講談社の教育絵雑誌『たのしい幼稚園』 東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 童謡　「はなび」　　うたのほん 　おかあさまへ 　暑さに追われて飛び出した川原の夜空にぱっと咲いてぱっと散る花火は、夏の夜になくてはならない景物の一つです。 　花火を見ながら、おかあさまは、花火の散ったあとにまたたく星にまつわる、美しい伝説などを話してあげてください。	大日本雄弁会講談社	1957(昭和32)年 8月号　pp.12-13.
講談社の教育絵雑誌『たのしい幼稚園』 東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 童謡　「うさぎ　うさぎ」　日本古謡　　松本かつぢ・絵 　おかあさまへ	大日本雄弁会講談社	1957(昭和32)年 9月号　pp.20-21.

十五夜の月が、ちょうど広い原っぱの真上に来たとき、あちらの森からも、こちらの森からも、大うさぎ・小うさぎがぴょんぴょんと集まってきました。「さあ、みんな集まったね。今夜はいつもよりにぎやかに踊ろうよ、十五夜さまだもの。」 大うさぎも小うさぎも、大きな耳を、女の子のリボンのようにひらひらさせて、手を振り、足を上げて踊りだしました。月の中のうさぎさんは、ペッタンコとおもちをついていますよ、原っぱのうさぎさんたちにごちそうしてあげようと。		
講談社の教育絵雑誌『たのしい幼稚園』 東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 童謡　「まつぼっくり」　広田孝夫・詩　小林つや江・曲 松本かつぢ・絵 おかあさまへ 松ぼっくりって、松かさのことですね。花びらのように開いた松かさの間には、とてもこうばしい実がはいっているんです。わたしも、小さいころに拾って食べたものでした。 さて、高い高い山に、松ぼっくりがあったんですって。それが、ころころ、ころころ、たくさんころがっていました。そこへ、さるたちが、やって来て、松ぼっくりを拾って、おいしいなあって、大喜びで食べたんですって……。お話は、これでおしまい。よく聞いていらっしゃい。(優しい声で、お話をするように歌ってあげてください。)	大日本雄弁会講談社	1957(昭和32)年 10月号　pp.12-13.
講談社の教育絵雑誌『たのしい幼稚園』 東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 童謡「しもばしら」 野口雨情・詩　本居長世・曲　初山　茂・絵 おかあさまへ あたりの木は、葉っぱをみんな落して裸で立っています。冷たい風がみの虫の家をゆらゆらゆすって、なにもかもみんな凍ってしまいそうな朝です。 こんな寒い朝でも、すずめの子たちは、元気でザックザックと霜柱を踏んで遊んでいますよ。すずめたちだけに踏ませないで、みなさんも、霜柱が立っている庭や畑を歩いてごらんなさい。おもしろくて、寒さなど忘れてしまうことでしょう。そして「ざっくざっく ふんだ　しもばしら……。」と、元気な歌声を響かせましょう。	大日本雄弁会講談社	1957(昭和32)年 12月号　pp.8-9.
講談社の教育絵雑誌『たのしい幼稚園』 東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 童謡「びっくりばこ」 南雲純雄・詩　渡辺　茂・曲　若菜　珪・はり絵 おかあさまへ おみやげにもらったきれいな小箱―なにがはいっているのかな。浦島太郎の玉手箱より、舌切りすずめの宝のつづらより、もっといいものがはいっていそうな、ふしぎな小箱―。あけたらびっくり、なにが飛び出したの、泣きだしたりしたらおかしい。そうら、飛び出した人形をよく見てごらんなさい。 ねこのみけちゃんがニャーと鳴いたり、小いぬがぴゅうんと飛び出したり、びっくり小人たちが踊りだすかもしれませんよ。あなたの驚いた顔も、びっくり人形みたい。飛び出した人形のまねをしてごらんなさい。	大日本雄弁会講談社	1958(昭和33)年 1月号　pp.24-25.
講談社の教育絵雑誌『たのしい幼稚園』 東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 童謡「ゆきの　ぺんきやさん」 則武昭彦・詩　安藤　孝・曲　岩崎ちひろ・絵 おかあさまへ 雪の子供たちは、ちらちら空から舞い降りてきますね。この子供	大日本雄弁会講談社	1958(昭和33)年 2月号　pp.20-21.

たちは、雪のペンキ屋さんなんですってー。ほら、大きなはけで、屋根も庭も、それから遊んでいるポチも順々に白く塗ってゆきます。そして、自分たちも屋根にくっついて、そのへんをまっ白くしてしまいます。早く雪の子がやって来て、みんなの家の屋根を塗ってくれるといいですね。そうしたら、雪のペンキ屋さんの歌を歌ってあげましょう。		
講談社の教育絵雑誌『たのしい幼稚園』 東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 童謡「ちゅーりっぷ」　えほんしょうか　初山　茂・絵 おかあさまへ 春です。ぽかぽかとお日さまが照って、暖かい庭に春が来ました。そして、たくさんの花が咲きましたよ。さあ、なんの花でしょう。チューリップの花です。みなさんの両方の手を合わせ、指先を離して、花を咲かせてごらんなさい。ほうら、ここにもチューリップの花が咲きましたよ。その花をゆらゆらと揺すって、おかあさまといっしょに、「さいたさいた」と歌ってみましょう。	大日本雄弁会講談社	1958（昭和33）年 4月号　pp.12-13.
講談社の教育絵雑誌『たのしい幼稚園』 東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 童謡「はやおきどけい」 富原　薫・詩　山中春雄・絵 おかあさまへ 明かるい朝です。子供も、すずめも。いぬも、朝の空気をいっぱいに吸って、元気にとび起きました。早起きするのは、強い、じょうぶな子です。みなさんのお子さんも、この子に負けないように早起きさせましょう。そして、早起きどけいの歌を歌ってください。お子さんは、ぱっちり目がさめて、手も足もぐんと伸びてきますよ。	大日本雄弁会講談社	1958（昭和33）年 6月号　pp.20-21.
講談社の教育絵雑誌『たのしい幼稚園』 東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 「うさぎのでんぽう」　北原白秋・詩 おかあさまへ 青く晴れあがった真夏の蒼空、まっ黄色なひまわりの花、そして、うさぎとひよこの組合せ……。子供にとって、すばらしい幻想の世界です。子供は、絵に現われているいっさいのものを擬人化して、自分と同じ心をもつものと考えるようです。おかあさまも、この楽しい絵と、この歌のリズムに乗って、しばらくの間、子供の夢の世界に遊び、童心のかてとなる物語を即興的に作ってあげてください。	大日本雄弁会講談社	1958（昭和33）年 8月号　pp.6-7.
講談社の教育絵雑誌『たのしい幼稚園』 東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 童謡「どんぐり　ころころ」 武井武雄・絵　　青木存義・詩 おかあさまへ おかあさまもお子さまも、よくご存じの「どんぐり　ころころ」を歌いながら、絵の中からお話の種を拾ってみてはいかがでしょう。「どんぐり坊やが、たくさんいること、いること。そろいの洋服で、みんなおもしろそうね。なにをしているのでしょう。秋になると、どんぐりは、ころころ、たくさん落ちるのよ。そして、木の葉は赤や黄のきれいな色になって、ひらひら散ってくるでしょう……。」 公園や木の多いところへ行ったときなどに、この歌のふんい気を十分味わせてあげてください。	大日本雄弁会講談社	1958（昭和33）年 10月号　pp.8-9.
講談社の教育絵雑誌『たのしい幼稚園』 東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 童謡「はたらく　おやま」 高橋掬太郎・詩　弘田龍太郎・曲　深沢邦朗・絵 おかあさまへ	講談社	1958（昭和33）年 11月号　pp.22-23.

つり橋をかけたり家を建てたりして、みんなが働いている山は、住みごこちのよいところのようです。うちの人たちの職業や仕事が、子供の生活とどんなつながりをもっているか、また、みんなが協力し、助け合うことによって、いっそうよい社会ができていくことを、このたのしい絵を見ながら話してあげてください。そして、おかあさまが、この歌をリズミカルに歌ってあげれば、子供たちも、リズムにのって働く山に参加したくなりましょう。		
講談社の教育絵雑誌『たのしい幼稚園』 東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 童謡「おもちゃのたんす」 坂口　淳・詩　武井武雄・絵 おかあさまへ この絵をじっと見ていると、子供の夢の世界に誘われていきます。唯一の遊び相手を勤めた人形たちは、この夢の世界では、まったく解放されて、手も足も自由に振り動かして踊りだしています。子供たち自身も、おとなの想像も及ばないほどのすばらしい夢を描いているのです。おかあさまが、子供と絵を見たり、歌を歌ったりしてくださるときに、子供が、自分でいろいろ見いだしたり、まねをしたり、声を出したりする自発活動をたいせつに育てて、よい遊び相手になってあげてください。	講談社	1958（昭和33）年 12月号　pp.22-23.
講談社の教育絵雑誌『たのしい幼稚園』 東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 童謡「ままの　おひざ」 坂口　淳・詩　岩崎ちひろ・絵 おかあさまへ どこの赤ん坊も、母親のひざの上で乳を飲みながら、むずかり、笑い、母親の子もり歌で眠ります。すこし大きくなると、さらに、歌やお話を、ひざの上で母の口から学び取ります。幼児の知恵も心もからだも、ひざの上で成長していきます。母のひざこそ、人の教育の始まる、比類なく尊い場であることを、お子さまにこの絵を通して教えてあげてください。	講談社	1959（昭和34）年 1月号　pp.22-23.
講談社の教育絵雑誌『たのしい幼稚園』 東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 童謡「うれしい　ひなまつり」 山野三郎・詩　松本かつぢ・絵 おかあさまへ ひな段を飾りつけるほかに、おかあさまが子供さんといっしょに、この童謡を歌いながら、おひなさまを折ったり、ひな段の飾り物を作ったりすることは楽しみなものです。その一つ一つの名まえなど、自然に覚えることでしょう。幼児にいちばんうれしいことは、おかあさまはじめ、家族の方やお友だちといっしょにひなまつりを祝うことですから、本物のおひなさま、お手製のものなどで、一家そろって祝ってあげてください。	講談社	1959（昭和34）年 3月号　pp.8-9.
講談社の教育絵雑誌『たのしい幼稚園』 東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 童謡　「ももたろうさん」 おかあさまへ ずっと昔からあった桃太郎のお話とはだいぶ違った絵ですが、昔の桃太郎の絵がお手元にあったら、比べて話してあげるのもよいでしょう。伝えられてきた絵もさることながら、時代を異にしてできたこうした絵も、子供の夢をはぐくみ、想像力を豊かにしてくれます。桃太郎のお話は、あくまで童話であって、一時騒がれたような軍国主義うんぬんの批評は、思い過ごしにすぎないのです。	講談社	1959（昭和34）年 4月号　pp.8-9.
講談社の教育絵雑誌『たのしい幼稚園』	講談社	1959（昭和34）年

東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 童謡　「おかしの　きしゃ」 絵　人形座・製作　田畑精一・構成 作詞　西城八十　作曲　小松耕輔 おかあさまへ この絵資料をお子さまになじみの深いものに替えて構成しました。このような楽しい歌からも、子供の夢をいっそう豊かに育てていきたいものです。		8月号　p.26-27
講談社の教育絵雑誌『楽しい幼稚園』 東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 特集みんなでうたいましょう 童謡　「おしょうがつ」　東くめ・詞　風間四郎・絵 お正月が、もうすぐ来ます。どんなに多忙なご家庭でも、お正月だけは仕事から離れ、家族がそろって楽しまれることでしょう。子供たちにとっても、そういう意味で待ち遠しいときです。ふだん、お子さまといっしょに楽しむ時間の少ないご家庭では、とくに、お正月だけはお子さま本位に考えてあげて、子供を中心に、くつろいだ遊びをしてください。この童謡特集も、その一つの手段として楽しんでほしいと思います。 「おしょうがつ」 子供たちは、楽しいお正月を指折り数えて待つことでしょう。時代が移り変わり、子供たちのお正月遊びの内容が代わっても、お正月を待つ心に変わりはないようです。かつて母がわたしたちに歌ってくれたように、お子さまに歌ってあげてください。おかあさまの歌は、そのまま、子供自身の歌になるでしょう。 「たわらは　ごろごろ」絵なし 昨年は四年続きの豊作で、ことしはねどしに当たっています。この絵のねずみたちもうれしそう。かわいらしく、表情を付けて歌ってください。絵の中のねずみたちが、何をしているのかなどの帆なしも出れば楽しいでしょう。 「十にんの　ちいさい　いんであん」 お正月は、すごろくや羽根突きなど、数に触れる機会が多いようです。このリズミカルな歌も、数の練習に役だてましょう。握った両手の指を、順次に起こしてみたり、握ってみたりしながら、指あそびをさせてみましょう。 「たきび」 十一月から十二月にかけて、ラジオなどでよく歌われる歌ですから、お子さまもよく知っているでしょう。歌うだけでなく、絵の中の会話も想像させてみましょう。そして、実際の生活でも、落ち葉集めなどをてつだわせたりして、自然に歌の出てくるふんい気を作ってやりましょう。 このように、この童謡の特集は、歌って楽しむだけでなく、動作に結びつけたり、絵から会話を想像させたり、進んでは、実生活に発展させたりして、多方面に活用してほしいと思います。	講談社	1960（昭和35）年1月号お正月特大号　p.58
講談社の教育絵雑誌『たのしい幼稚園』16（8） 東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 童謡「きゅっ　きゅっ　きゅう」 林義雄・絵、相良和子・作詞、芥川也寸志・作曲 おかあさまへ 幼児が、自分から進んで仕事を手伝うのは望ましいことですから、幼児のできる範囲で、おかあさまのおてつだいをさせてあげてください。それが、お子さまの独立心を養うことにもなります。「きゅっ　きゅっ　きゅう」のくつみがきの童謡は、その場を作り出すのに役だつ生活指導の歌になりましょう。	講談社	1960（昭和35）年11月号 ＊楽譜と文言のコピーが欠けている。
雑誌『たのしい幼稚園』　入園・進級お祝い特大号	講談社	1961（昭和36）年

東京都江東橋保育園園長　増子とし・指導 もんしろちょうちょうのゆうびんやさん　絵・柿本幸造 作詞サトウハチロウ　作曲中田喜直 おかあさまへ 幼児の世界では、いろいろなものを、ごく自然に擬人化して考えます。「もんしろちょうのゆうびやさん」「お花の咲いている横町」などといえば、子供たちは、それをすなおに受け止めて、美しい絵に見入ることでしょう。この絵を見ながら、花の色や名、花に集まる虫の種類や生態などの話をしたり、いっしょに歌ってあげたりしてください。		4月号　p.22-23

増子とし　作詞　　本多鉄麿作曲　二人のコンビによる曲　から

《あまだれ　ポッタン》　　『幼児のための音楽カリキュラム　春』所収

1.　あまだれポッタン　ポーン　ツン
　　あおいはっぱに　ポーン　ツン
2.　あまだれポッタン　ポーン　ツン
　　かえるのせなかに　ポーン　ツン
3.　あまだれポッタン　ポーン　ツン
　　あかいおはなに　ポーン　ツン

《うんどうかい》　　『幼児のための音楽カリキュラム　秋』所収

1.　そらは　あおぞら　うれしいな
　　きょうは　たのしい　うんどうかい
　　そろって　そろって　うたおうね
2.　はたは　ひらひら　きれいだな
　　きょうは　たのしい　うんどうかい
　　げんきで　げんきで　はしろうね
3.　かあさん　いっしょだ　うれしいな
　　きょうは　たのしい　うんどうかい
　　みんなで　みんなで　おどろうね

《おはよう》　　『幼児のための生活あそび』所収

1.　せんせい　おはよう
　　みなさん　おはよう
　　おはなも　にこにこ　わらっています
　　おはよう　おはよう
2.　せんせい　おはよう
　　みなさん　おはよう

ことりも　ちっちと　うたっています
おはよう　おはよう

《思い出のアルバム》　　『幼児のためのリズミカルプレー』所収

1.　(先生)いつのことだか
　　思い出してごらん
　　あんなこと　こんなこと
　　あったでしょう
(子ども)うれしかったこと
　　おもしろかったこと
　　いつになっても　忘れない
2.　春のことです　思い出してごらん
あんなこと　こんなこと
あったでしょう
ぽかぽかお庭で(野原で)
仲良く遊んだ
きれいなお花も　咲いていた
3.　夏のことです　思い出してごらん
あんなこと　こんなこと
あったでしょう
麦わらぼうしで　みんな　はだかん坊
お舟もみたよ　砂山も
4.　秋のことです　思い出してごらん
あんなこと　こんなこと
あったでしょう
どんぐり山の　ハイキング　ラララ
赤い葉っぱも　とんでいた
5.　冬のことです　思い出してごらん
あんなこと　こんなこと
あったでしょう
もみの木　かざって　メリークリスマス
サンタのおじいさん　笑ってた
6.　冬のことです　思い出してごらん
あんなこと　こんなこと
あったでしょう

寒い雪の日 あったかいへやで
楽しい　話　ききました
7.　1年じゅうを　思い出してごらん
あんなこと　こんなこと
あったでしょう
桃のお花も　きれいに咲いて
もうすぐ　みんなは　1年生

《くつの　アパート》　　『幼児のための生活あそび』所収
1.　もようのついた　くつのアパート
そとへでるとき　はいるとき
かわりばんこに　おるすばん

2.　おてんきてんき　うれしいね
そとぐつさんは　おにわです
げんきなこどもの　おともです
3.　ピアノがポンポンポン　よんでるね
うわばきさんは　おへやです
しずかなこどもと　いっしょです

《さんりんしゃ》　　『幼児のための音楽カリキュラム　秋』所収
1.　リボンをつけた　さんりんしゃ
あかしろきいろ　ならんでる
のってみたいな　さんりんしゃ
2.　リボンをつけた　さんりんしゃ
スピードだして　きょうそうだ
はしれりんりん　さんりんしゃ

《フレー　フレー　フレー》　『幼児のための音楽カリキュラム　秋』所収
1.　あおあおあおぞらだ
てんてんおてんきだ
みんないこうよ　うんどうかい
フレーフレーフレー　　フレーフレーフレー
2.　しろしろしろぐもだ
あかあかあかぐみだ

いちにのさんで　つなひきだ
フレーフレーフレー　　フレーフレーフレー
3.　ほいほいとうさんだ
やいやいかあさんだ
よーいどんで　かけっこだ
フレーフレーフレー　　フレーフレーフレー

《また　あした》　　『幼児のための生活あそび』所収
1.（子ども）
なかよくあそんだ　おにんぎょう
おもちゃもみんな　かたづけて
かえりのおしたく　できました
さよなら　せんせい　またあした
2.（先生）
げんきにあそんだ　よいこさん
かえりのみちを　きをつけて
おうちへなかよく　かえりましょ
さよならみなさん　またあした

子どもと先生（二重唱：子ども上の旋律、先生下の旋律）
さよなら　さよなら　またあした

増子とし作詞　　安西愛子作曲　　二人のコンビによる曲
《かたつむり》　　『幼児のための音楽カリキュラム　春』所収
まいまいつぶろ　まいつぶろ
おうちをしょって　なにしてる
まいまいつぶろ　まいつぶろ
おててもあんよも　うちのなか

増子とし作詞　渡辺　茂作曲　　二人のコンビによる曲
《おはなの　トンネル》　　『幼児のための音楽カリキュラム　春』所収
1.　きれいなさくら　おにわにさいた
おはなのトンネル　ぴーぽっぽ
2.　ちらちらさくら　おいけにちった
おはなのおふねが　ゆらりこ

《おだんご　ころろん》　　『幼児のための生活あそび』所収
ころろん　ころろん　おだんごふたつ　ころがった
　　ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ　　ちゅっ　ちゅっ　ちゅっ
　　ねずみがそれを　おいかけた

　くんくんくん　くんくんくん
　こいぬがそれを　おいかけた

　　がああああ　がああああ
　　あひるがそれを　おいかけた

ころろん　ころろん　おだんごふたつ　くっついた
　よいしょ　よいしょ

《こいぬの　ぼうや》　　『幼児のための生活あそび』所収
　こいぬのぼうやが　かくれんぼ
　　わんわんわん　もういいかい
　　ほらふたり　みつけた

《さくらのはな》　　『幼児のための音楽カリキュラム　春』所収
1.　さくらのはなが　きれいにさいた
　　きれいにきれいに　きれいにさいた
　　おにわもおやまも　まっさかり
2.　さくらのはなが　ひらひらちった
　　ひらひらひらひら　ひらひらちった
　　おにわもおやまも　まっしろだ

増子とし作詞　　磯部　俶作曲　　二人のコンビによる曲
《おちばのおどり》　　『幼児のための音楽カリキュラム　秋』所収
きーろいはっぱはっぱ
あかいはっぱはっぱ
おはなのように　ゆれてゆれて
ひらひらかぜと　とんでおいで

きーろいはっぱはっぱ

あかいはっぱはっぱ
ことりのように　とんでとんで
あつまっておどれ　おどりおどれ

増子とし作詞　　松田トシ作曲　　二人のコンビによる曲
《あめは　なぜ　ふるの》　『幼児のための音楽カリキュラム　春』所収
あめはあめは　なぜふるの
おそらが　まっくろだって
おてんとさまがないてるの

《きんとと》　　『幼児のための音楽カリキュラム　春』所収
1.　きんとと　きんとと　なにしている
あぶくぶくぶく　おはなしよ
2.　きんとと　きんとと　なにしている
あかいおべべで　おさんぽよ

《じどうしゃブーブー》　　『幼児のための音楽カリキュラム　春』所収
ブーブーブーブー　じどうしゃにのったね
ブーブーブーブー　おうちもうごいたの

《みずたまり》　　『幼児のための音楽カリキュラム　春』所収
ホラ　わらったろ　ぼくのかおが
みずたまりがわらったね

増子とし作詞　森義八郎作曲　　二人のコンビによる曲
《ゆきのこ》　　『保育のための音楽カリキュラム2』『幼児のための音楽カリキュラム　冬』所収
1.　ぼくはゆきのこ　ゆきこんこ
　　おやまものはらも　まっしろに
　　きれいにきれいに　かざりましょう
　　ラララ　ラララ　ラララララ
2.　わたしもゆきのこ　ゆきこんこ
　　おにわもおやねもまっしろに
　　きれいにきれいにかざりましょう
　　ラララ　ラララ　ラララララ

《ツリーのおかざり》　　『保育のための音楽カリキュラム2』所収

1.　ツリーのおかざりぎんモール
　　みんなゆれてる　ひかってる
　　メリーメリークリスマス
2.　ストーブあかあかもえている
　　みんなわらってる　うたってる
　　メリーメリークリスマス

増子とし作詞　ドイツ民謡

《うまごやのエスさま》　　『幼児のための音楽カリキュラム　秋』所収

1.　わらのにおう　うまごやで
　　こうまたちが　いいました
　　かみのおこのエスさまの
　　おこえをきいたと　いいました
2.　ほしのひかる　くさはらで
　　ひつじたちも　いいました
　　かみのおこのエスさまの
　　おかおをみたと　いいました
3.　クリスマスの　きのしたで
　　こどもたちも　いいました
　　このめでたいクリスマス
　　いわいましょうとうたいます

《なみとび》ドイツ民謡　　『幼児のための音楽カリキュラム　夏』所収

それそれきたよと　ざざぶ
それそれきたよと　ざざぶ
どんとなみくるよ　ざっとなみくるよ
それそれきたよと　ざざぶ

増子とし作詞

《おじぎ》　　『幼児のための音楽カリキュラム　春』所収

1.　ポンポンおはよ　ポンポンおはよ
　　なかよくあそびましょう
2.　太郎さんおはよ　太郎さんおはよ
　　なかよくあそびましょう

じどうしゃブーブー　ブーブーブーブー
じどうしゃブーブー　ブーブーブー

うさぎはピョンピョン　ピョンピョンピョンピョン
うさぎはピョンピョン　ピョンピョンピョン

たいこがドンドン　ドンドンドンドン
たいこがドンドン　ドンドンドン

増子とし作詞　　作曲者無記名
《にじのはし》　　『幼児のための音楽カリキュラム　夏』所収
おひさまにこにこ　わたしもにこにこ
おそらに　きれいな　にじのはし

増子とし作詞　Roeder．作曲
《まりあそび》　　『保育のための音楽カリキュラム2』『幼児のための音楽カリキュラム　冬』所収
ぽーん　ぽーん　ぽーん　かるく
ぽんとはねてくる
ひとつ　ふたつ　みっつで　ぽーん
ひとつ　ふたつ　みっつで　ぽーん

ぽーん　ぽーん　ぽーん　まりは
ぽんとはねてくる
ひとつ　ふたつ　みつよ　よつよ
いつつで　かわりましょう

増子とし作詞　編曲
《きしゃポッポ》(合唱曲)　　『幼児のための音楽カリキュラム　夏』所収
ポ　シュシュシュシュ　　ポッポッポッポッ　　ポッポッポッポッ
きしゃが　はしる　けむりをはいて
シュポポポ　シュポポ　シュポポポ　シュポポ

表6　増子とし-----年表と著作一覧

年号	事　項	補足・著作
1908（明治41） 2月3日	宮城県名取郡六郷村沖野9番地に4女として生まれる（4人の兄と3人の姉）	父:丹野保五郎 母:丹野良
1921（大正10）	13歳　宮城女学校高等女学科入学	
1926（大正15） 3月21日 4月	18歳 宮城高等女学校本科卒業 頌栄保姆伝習所入学	
1928（昭和3） 3月20日	20歳 頌栄保姆伝習所卒業（幼稚園保母免許状取得）	
1928（昭和3）＊ 4月1日	20歳 山形千歳幼稚園（保母）着任	*としは1928（昭和3）年から勤務と記しているが千歳幼稚園100周年記念誌には1929（昭和4）年から職員として名簿に記載されている
1931（昭和6） 4月1日	23歳 山形千歳幼稚園退職 盛岡泉幼稚園（保母）着任	
1933（昭和8） 7月20日	25歳 増子鐵哉と結婚	盛岡善隣館 シュレーヤ宣教師の司式
1935（昭和10） 12月25日	27歳 盛岡泉幼稚園退職	
1936（昭和11） 5月1日	28歳 東京市入谷尋常小学校附属幼稚園（代用保母）	
1937（昭和12） 4月30日	29歳 東京市入谷尋常小学校附属幼稚園（保母）	
1940（昭和15） 4月30日	32歳 東京市明石幼稚園（保母）	
1943（昭和18） 3月31日 7月14日 9月30日	35歳 東京市月島幼稚園（保母） 検定により国民学校音楽専科訓導免許取得 東京月島幼稚園（園長兼保母）	
1944（昭和19） 4月1日 4月1日	36歳 東京都月島戦時託児所長 東京都戦時託児所事務嘱託	
1945（昭和20） 6月18日 11月30日 12月1日	37歳 東京都富士見疎開保育所長兼務 終戦により疎開事業終了 東京都民生局厚生課厚生係兼務	
1946（昭和21） 4月30日 4月30日 4月30日 12月27日	38歳 東京都月島幼稚園保姆兼園長依願退職 東京都婦長職 民生局（東京都） 東京都民生局児童課	1946（昭和21）6月 東京都保育研究会発足（現NPO法人東京都公立保育園研究会）

1948（昭和23）	40歳 文部省より保育要領改訂委員会臨時委員を委嘱される	
1949（昭和24） 8月1日	41歳 検査史員（東京都）	1949（昭和24）9月　文部省 ・『幼児のためのおんがくとリズムの本』要領 1950（昭和25） ・『幼児保育講座第三巻』「幼児のリズム遊び」 ・『音楽手帖』「リズム楽器による幼児の遊びの導き方」 ・『保育』先生とお母さまの雑誌8月、12月号 1952（昭和27） ・『保育のための音楽カリキュラム第一集。第二集』
1953（昭和28）	45歳 文部省保育要領改訂委員	1953（昭和28） 文部省『幼稚園のための指導書　音楽リズム』 1953（昭和28）8月号から1954（昭和29）3月号 ・『月刊保育カリキュラム』「音楽リズム」
1954（昭和29） 11月1日	46歳 東京都江東橋保育園園長（民生局長）	1954（昭和29） ・『親と子のたのしいホームゲームとやさしいフォークダンス』 1955（昭和30）4、5、7、8、10、11、2、3月号 ・『保育』先生とお母さまの雑誌 1956（昭和31） ・『幼児のための音楽カリキュラム』楽譜集・解説　春5月20日、夏7月20日、秋11月20日、冬12月20日 ・『現代保育講座2　保育の技術（上）』 ・『保育の友』「リズム遊び」1月号 「音楽リズム」7月～ 1959（昭和34）2月号 1957（昭和32） ・『たのしい幼稚園』7、8、9、10、12月号 1958（昭和33） ・『たのしい幼稚園』1、2、4、6、8、10、11、12月号
1959（昭和34） 7月～ 9月	51歳 江東橋保育園舎の大改築 （工事費約五百万円） 10月18日改修工事完了:新装園舎で保育	1959（昭和34） ・『たのしい幼稚園』1、3月号 ・著書『幼児のための生活あそび』
1961（昭和36） 4月1日	53歳 江東橋保育園長（東京都墨田区長） 東京都立高等保母学院講師	1961（昭和36） ・著書『幼児のためのリズミカルプレー曲集』 『幼児のためのリズミカルプレー解説』
1963（昭和38）	55歳 江戸川区に善隣館保育園設立 脳髄膜炎発病。42度近い高熱が1週間続き慶応病院に入院。以降自宅療養をおくる。	

		1988（昭和63）3月18日 増子鐵哉召天　83歳
1997（平成9） 7月2日 7月3日 7月4日 11月24日 1998（平成10） 6月16日	89歳 召天 前夜式　日本基督教団豊島岡教会 葬儀式　　同　　上 増子とし偲ぶ会（場所 椿山荘） 増子とし埋骨式 仙台市青葉区北山キリスト教墓地 司会　仙台東一番丁教会　柏木英雄牧師	

2019年度戦災復興展の関連行事「宮城学院の日」より
宮城学院卒業生の空襲体験

宮城学院女子大学 学芸学部教授　大平　　聡

1945年7月、日付が9日から10日に変わった直後から、仙台市中心部は、アメリカ軍のB29爆撃機123機による焼夷弾攻撃を受け、焼け野原と化した。

この日を深く胸に刻み、平和な世界を守る意思を確認することを目的に、仙台市は、戦災復興記念館で「戦災復興展」を毎年、空襲のあった7月10日の前後10日間、実施している。

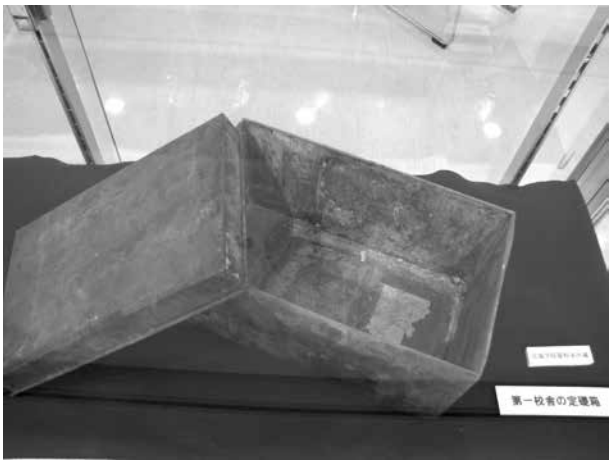
本年度は、企画展に「発掘‼戦火を越えたタイムカプセル－宮城学院の戦争被害－」を実施し、その関連行事として「宮城学院の日」を設け、3人の宮城学院高等学校卒業生の方々にその戦争体験を語っていただいた。3人の方々から当日の講演をもとに文章をお寄せいただき、本年報に掲載することができたのは、大変ありがたいことである。戦争体験者が世界的に日々その数を減らしていく中で、戦争の記憶が薄れ、国際問題の解決策に「戦争」という手段を用いることを公然と発言する風潮さえ現れてきた現在、3人の方々のお話は、未成年の若者、子どもの目に焼き付いた戦争の恐ろしさ、愚かさを、戦争未体験の私たちに現実感をもって感じさせてくれるものであった。本年報に掲載するに当たり、「宮城学院の日」を開催することとなった経緯を合わせ、「戦災復興展」と宮城学院のかかわりについて若干の説明を加えることとしたい。

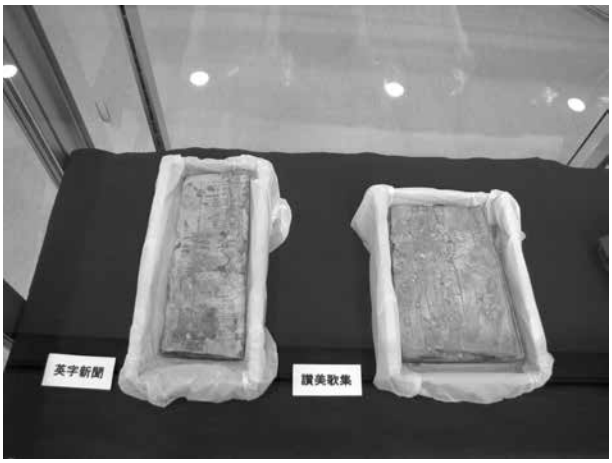
企画展は、宮城学院女子大学学芸員課程の「博物館実習」受講生4名が、仙台市戦災復興記念館での館務実習として制作したものである。本学学芸員課程は、2011年度の戦災復興展から、その開催に協力を続けている。2011年と言えば、誰しも3月11日に発生した東日本大震災・津波を思い起こすことと思う。戦災復興記念館は避難所の指定は受けていなかったが、被災した市民を一時収容したという。復興展の担当職員は、その体験を踏まえ、4ヶ月後に迫った復興展を何としても実施したいと、学芸員課程運営連絡会の座長をしていた筆者に協力を要請された。担当者の方には、前年に「博物館実習」受講生が企画するシンポジウムにご協力いただいたこともあり、微力ながら協力することとした。以来、本年に至るまで、毎年、本学の学芸員課程の学生が実習の一環として、またボランティアとして協力を続けてきた。戦災復興展は、昨2018年度より運営体制を改め、戦災復興展にかかわってきた諸団体を集めた運営懇話会での議論に基づき、運営されることとなった。筆者もこれまでの経緯から参加を求められ、加わっている。この数年は、仙台空襲研究会の方々の協力を得、今まで以上に質の高い展示を行ってきた。ただ、宮城学院だけでは限界があり、市内に戦前から存在する大学にも参加を求める必要を感じていた。そこ

で、昨年度の運営懇話会において、学校・大学に残る空襲、戦争の「証言者」を発掘し、市民に、より現実感をもって仙台空襲を認識していただき、平和を守る力となっていただこうと提案したところ、賛同を得、2019 年度は、提案を行った筆者がその責めを負い、宮城学院が口火を切ることとなったのである。

筆者が、本学院が口火を切ることを「覚悟」してこのような提案を行ったのは、十分その実現性を支えてくれる「遺物」を本学院が保存していたからである。それが、今回の主役となった旧キャンパスの第一校舎「定礎格納品」である。この資料については、本『資料室年報』9 号に紹介があるので参照されたい。外壁を残して焼失した第一校舎の、その焼け残った壁、定礎石の中に格納された銅製の「定礎箱」の中で蒸し焼き（乾溜）状態に置かれた定礎格納品は、1967 年、第一校舎の解体の際、取り出され、貴重資料として大学図書館に保管されてきた。しかし、年月の経過とともにその経緯は忘れ去られ、1990 年代始めには、それが何かわからなくなっていた。しかし、同窓会に保管・展示されてい

た、キャンパス移転の際、取り壊された旧校舎各建物から取り出された定礎格納箱から、第一校舎の定礎格納品である可能性が浮かび上がってきた。しかし、乾溜状態の内容物は、手を触れれば崩れ去っていく状況で、東京在住の紙資料修復士に保存処置を依頼し、一部を除き、なんとか観察可能な状態となったのである。しかし、修復後、今回の企画展に至るまで、その全容を公開する機会がなかった。





そこで、今回、企画展の協力を契機に、本資料群を公開し、戦争の悲惨さを知ってもらおうと考えついたのである。この企画を太田富美子総務人事部長に相談したところ、部長より嶋田順好学院長に説明がなされ、学院として復興展に全面的に協力していただけることになった。そこで、実習生が本年（2019）2 月から作業に取り組み、約半年の時間を使って、展示を制作したのである。『河北新報』2019 年 7 月 2 日付朝刊で報道された記事をご覧になった方も多いのではないかと思う。

展覧会の制作に合わせ、関連行事として、宮城学院の卒業生に戦争体験を語っていただけないかと考えた。そこでまず、仙台空襲を語り継ぐ活動をされている広瀬喜美子氏にお願いしたところ、ご協力を快諾していただいた。また、昨年、宮城学院高等学校の卒業生が戦争体験を一書にまとめ、各所に寄贈したことが報道され、本学院資料室にもその一冊が寄贈されていたことから、早速、同窓会に依頼し、『子供の時戦争があった』を編集された方に連絡をとっていただくこととした。その結果、体験談集に寄稿されたお二人の方、垂石洋子氏、皆川洋子氏にご協力いただけることとなった。

以上のような経緯をたどり、本年度の戦災復興展では宮城学院の資料を用いた展示を制作し、市民に戦争体験を聞いていただく「宮城学院の日」を実施することができたのである。ご協力いただいた 3 人の同窓生の方々には、改めてお礼申し上げたい。そして、半年間にわたり、展示制作に力を尽くした 4 人の実習生（日本文学科庄子愛乃・新妻礼菜・古

大平　　垂石洋子さん　広瀬喜美子さん　皆川洋子さん

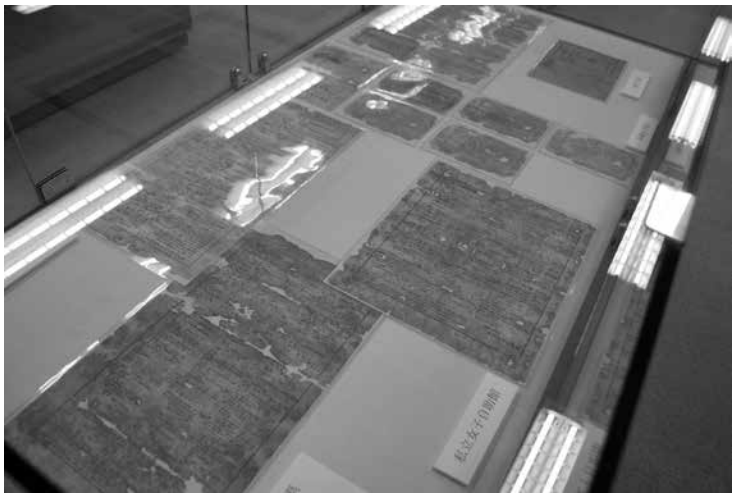
田愛奈、生活文化デザイン学科千葉江里子）の努力に感謝したいと思う。企画をご理解いただき、全面的に後押しをしていただいた学校法人宮城学院、学院側担当として様々にご協力いただいた資料室佐藤亜紀氏にこの場を借りて深くお礼申し上げる。

なお、企画展は宮城学院中学校・高等学校の生徒、教員の皆さんに見ていただいた。戦災復興記念館での展示中、教員の方から、もっと多くの生徒に見せたいので、学内で展示ができないかとの希望が寄せられ、急遽、大学の後期授業が始まる前、9 月 3 日から 7 日の 5 日間、大学講義館 6 階、実習資料室（609 教室）において展示を実施した。宮城学院中学校の生徒全員を始め、多くの教職員の方々に見ていただくことができた。戦災復興展では、ごく一部しか展示できなかった定礎格納品も、展示可能な資料はそのほぼすべてを展示することができたことを合わせて報告する。

最後に、第一校舎の定礎格納品で、今回、改めて考えさせられたことがあったことを記しておきたい。それは他の学校、当時仙台市内にあった 3 つのキリスト教系中等学校（仙台女学校〈現仙台白百合学園中学高等学校〉、尚絅女学校、東北学院）に加え、私立女子自助館（キリスト教系裁縫学校）、県立宮城県高等女学校（旧宮城県第一女子高等学校、現宮城県宮城第一高等学校）の学則類が納められていたことである。耐火煉瓦の新校舎建設に当たり、同じキリスト教主義の諸学校、女子教育を行う公立の高等女学校と連帯し、この仙台の地で教育活動を行っていく決意を示した当時の宮城女学校教員の信条に触れることができたことは、大きな喜びであった。

メモを取りながら、
熱心に説明を聞く生徒たち　〈講義館C609教室〉

他の校舎の定礎格納箱



定礎格納箱に入っていたキリスト教主義の学校要覧

空襲

垂石　洋子

「洋子、早く逃げろ！村上屋に焼夷弾が落ちたぞ！」と父の声。私はいつも用意しておく小さなリュックを背負い、防空頭巾をかぶり、家の地下防空壕から出た。そして住み込みの店員の阿部さんに手を引かれ、「阿部！洋子を頼んだぞ」の声を背に外へ走り出た。母と幼い妹達は前日に川渡に疎開し、私は学校の関係で父と二人残っていたのだった。また、父は町内会長のため、皆を逃がしてから自分は最後に行くので、何かあれば先に行くようにといつも言っていた。

外は暗く、だが一番町と虎屋横丁角の「村上屋」と、国分町角の「やぶや」からは、早くも火の手が上がっていた。私達は、急いでそこを走り抜け、まだ火の手の無い櫓町、立町の方へと走った。ちょうど立町まで来た時、七夕の短冊を細くし、その先が光っているようなものが､空いっぱいに広がりヒラヒラと落ちてきた。「うわぁ　きれい。何だろう」と思っているうちに、二つほど私の頭巾に付いてしまった。見ればそれは火のついた細長い布で、いくら手で掃っても張り付いて取れない。火はそのままじりじりと燃え広がってしまい、仕方なく頭巾を捨てた。ようやく私たちは、広瀬川の仲の瀬橋の川原まで辿り着いた。後で聞いた話によると、このヒラヒラは油脂焼夷と言って、布に油や石油を染み込ませそれに火をつけたもので付着すると取れないとのことであった（間違っていたらすみません)。

やれやれと川原に伏せていると、誰かが、「川原に落ちた爆弾で石が飛び、その石に当たって死んだ人がいるので向い側の横穴防空壕に行け」と言った。私たちは、急ぎ広瀬川を渡ることになった。しかし、幼い私は背も立たないし、もちろん泳ぎも出来ない。溺れそうになりながらも、ようやく向こう岸に着いたが、ズック靴は流されてしまったのだろうか、素足であった。仕方なく、手袋を足に履き、何とか横穴に辿り着いた。

壕は暗く満員で、立っているのがやっとの状態であった。とその時、誰かがタバコに火をつけた。「火をつけると、ガスが充満しているから爆発するぞ！」と怒鳴り声が。私はただただ恐ろしく、夜が明けるのをじっと待った。

街の方の空は随分と明るく、皆は「一番町が焼けている」「駅の方もやられている」などと口々に話をしていた。小さい私は、踏み潰されないように、連れとはぐれないようにと、しっかり手を握りながら立っているのがやっとであった。

ようやく空襲も終わり、夜も明けた。そのとき、外に出て吸った空気はなんと美味しかったことだろう。仲の瀬橋はまだ火を吐き、ちょろちょろと燃えていた。

どのようにして川を渡り、仙台駅まで辿り着いたのかという記憶は、私の中でプツリと途切れている。ただ、西公園の「偕行社」の所に馬が何頭も横たわっていたこと、手袋を履いた足でガラスの破片を避けながら歩いたことが今でも鮮明に思い出される。

今にして思えば、私達は今回の空襲で敵の最重要目的地である第二師団へと向かって逃げたという、まさに最悪の失敗をしたわけであるが。それにしてはよくも命を取り留めたものだ。聞けば、私の通ってきた道端にも随分と多くの人の死骸が横たわっていたそうである。父と一緒に逃げた人も、途中、直撃を受けて亡くなった。父は自転車で逃げたことが命拾いになったのかもしれないと言っていた。虎屋横丁の家や店は跡形もなく、あちらこちらから微かに薬の匂いのする煙が立ち上っていた。

幸いにも駅で父と再会することができ、一晩、駅で夜を明かし、三日目にようやく無蓋車（貨物列車）で川渡へと向かった。無蓋車から見た空の澄んでいたこと。どこまでも青くきれいだったこと。あの空から無数の火の玉が落ちてきたこと。川から上り西公園に立った時、一面の焼け野原で駅まで丸見えだったこと。これらは、今もって忘れられない記憶の中の風景である。その中でもやはり・・・あの無蓋車から見た、空の青さと美しさは鮮明に私の記憶に焼き付いている。

この青い空が、いつまでも平和な空であることを切に祈る昨今である。

青い空　こんないい空、空爆の空。

今、世界のどこかでは、さまざまな争いもあれば戦争も起こっている。その戦争により、いつでもどこでも、最も悲惨な哀しい目に遭うのは女性であり子どもたちなのだ。私たちは、その女性や子どもたちが流す涙を拭いてやるだけでなく、そのつぶらな瞳に涙がたまらないような、そんな世界になることを願い祈っている。

そして私たちに何が出来るのか、何をしたらいいのか考えていきたいと思っている。

（　たるいし・ようこ

1949（昭和 24）年 4 月　宮城学院中学校入学

1952（昭和 27）年 3 月　宮城学院中学校卒業

1952（昭和 27）年 4 月　宮城学院高等学校入学

1955（昭和 30）年 3 月　宮城学院高等学校第 7 回卒業

1955（昭和 30）年 4 月　宮城学院女子短期大学家政科入学

1957（昭和 32）年 3 月　宮城学院女子短期大学家政科第 6 回卒業　）

戦争時の記憶から

皆川　洋子

先日、もう年賀状のやりとりも絶えていた、40 年ほど前の友人で、いわき市に住んでいたとき、一緒に絵を描いていた 7 歳ほど下の方から、突然お電話がありました。彼女は日本画の研鑽を怠りなく続け、入賞を含め 8 回もの二紀展入選を果たしているとのこと。画材に困ると、庭に咲いている赤いけしの花を選び、それを描くたびそれを貰った人、私、皆川を思い出してくださるとのことでした。毎年 100 号作品を精力的に制作する彼女に賞賛の意を表しつつ、私はとても不安になりました。幸い栽培禁止ではなかったらしい、直径 10cm もあるけしの花を、彼女にあげた記憶はなく、自分自身栽培していた記憶もありません。全くもって思い出すことが出来ないのです。

こうしたことを最近経験してみて、記憶に頼るお話「子どもの頃の戦争体験」をここで語る資格があるのだろうかと悩まざるを得ませんでした。

しかし 82 歳の私は、70 年以上前の子どもの頃、太平洋戦争の時代を過ごしたのは事実です。その体験について記憶違いもあるかもと思いつつ、事実確認もあまりせず、お話しをさせて頂くことになります。ご了承下さい。

仙台空襲があった 7 月 10 日と終戦の日の 8 月 15 日の年、昭和 20 年、1945 年、私は小学生で、（当時は国民学校と言いましたが）3 年生でした。仙台ではなく仙南の船岡町、今の柴田町に住んでおりました。入学は岐阜市でしたものの、田舎に帰るようにとの祖父の要望に従い、まもなく父の生地に移り、転校しました。

戦局が敗退の色濃くなってきたと思われる終戦の前年 1944（昭和 19）年、2 年生の私たちの教室には、まさに日本軍が戦っている太平洋の島々、ガダルカナル、インパール、サイパン島などが大きく手描きされた地図が貼ってあり、19 歳の代用教員の先生は、その地図を指し示しながら「大変な状況の中、日本軍は善戦しています。私たちも頑張って、銃後の守りを果たさなければなりません」と戦っている兵隊さんたちに感謝しつつ、我々を叱咤激励されるのでした。悲惨な負け戦の実情が伝えられることはありませんでした。大本営の報道規制により、勝ち戦を装った報道が、遍く伝えられていたのです。その先生は戦後、師範学校を卒業し、中学校の先生になり、私が教育実習をしたときにお世話になりましたが、戦時中「神風の国、日本が、絶対鬼畜米英に打ち勝つ」という信念が、いかに若者たちの頭と心にすり込まれていたかを語って下さいました。

当時船岡には、東洋一と言われた、火薬などを製造する「第一海軍火薬廠」の工場が、

民家や田畑を接収した 530 万 m^2 の敷地に建設されており、労働力不足を補うため、中学校や女学校の学徒（今の中高生の年齢の人たち）が 3000 人も動員され、働かされておりました。その若いティーンエージャーの学生たちは、徴兵にとられたわけではありませんが、学業と青春をうち捨て、油と汗にまみれて、お国のためにと悲壮感をもって、火薬という危険を伴う物を扱う仕事をしなければならないのでした。

その点、私たち国民学校の生徒は、先生や親に言い聞かされていた「この戦いを勝ち抜くまで、私たちも我慢し、頑張る」という信条を、そんなに深刻には考えることが出来ず、現象面でしか物事を捉えられないのでした。

毎朝の登校時に通る所に、軍需関係以外の生産性のあるものなど作ることができない当時、なにやら機械をがたがたと忙しく動かしている小さな町工場がありました。しばらくすると工場のあまり広くもない敷地いっぱいに、一機が縦横 3m ほどの大きさの木製飛行機が、3 機ならべてありました。それらは、日本軍戦闘機をかたどったらしく、カーキ色に塗装された機体には、日の丸がついていました。

通学時に、そばを通る子どもたちは興味津々で、特に男の子たちは敷地内に入り、その操縦席も穿ってもいない丸太を削っただけのような飛行機を調べ、口々に飛行機の名前を言い合っていました。玩具にしては大きすぎるその木製飛行機が何のために作られたのか、だれも分らないのでした。

戦争が終ってから分ったことは、沢山の日本軍戦闘機のダミーを並べておけば、空からそれらを見た敵軍はひるみ、進路を変えるに違いないと考えていたのだということでした。火薬廠を擁していた船岡は、仙台よりも先に標的になり得ることを意識して、笑い話のような考えを現実化したということだと思います。実戦になれば、敵兵と竹槍で戦うと、真剣に考えていた人も沢山いましたから、当時は笑い事ではなかったのです。

7 月 9 日深夜、これまでにないほどの鬼気迫る半鐘とサイレンの音で、飛び起きた私は、非常時に備え、常に枕元に畳んである衣服に着替え、外に出ました。仙台は船岡の北に位置しているのですが、あたりは深夜と思えぬほど明るく、西の空も真っ赤に染まり、北西の空全体をそめる血の色は、夕日のそれとは不気味に違うのでした。だれに教わらなくても「仙台が空襲で、火の海なんだ」という確信の衝撃に貫かれました。仙台空襲は、日付が 7 月 10 日に変った 0 時 3 分に始まり、2 時間続いたということです。

「蔵王連峰の影響で起きる乱気流のため、敵機は火薬廠に近づけなかった」などの説もあり、船岡は空襲を逃れました。終戦後、船岡に駐屯することになった米軍は、火薬廠に残っていた利用できるものは接収し、爆破処理可能なものは爆破によって処理しました。

天皇陛下の大切で重要なお言葉が、正午に放送されると知らされていた 8 月 15 日は暑い日でした。何事について述べられるのか知る人はなく、どこの家でもラジオの前に、お言葉を聞くため家族一同が集まる用意をしておりました。

その日どういうわけか、放送が始まる 30 分ほど前、私は祖父にお使いを頼まれました。

子どもに放送を聞かせたくない意図があったとも思えないのですが、理由は分りません。お使いというのは、土地の測量や売買関係の仕事をいつも頼んでいる代書人宅（司法書士や税理士のこと）に、書類を届けるだけのことで、その日緊急に届ける必要があったとも思えないのです。

1 キロ半ほど歩いて書類を届け終わり、再び同じ道を戻り始めると、あたりには人っ子ひとり、犬一匹見あたらず、家々からは天皇陛下のお声のみが聞こえていました。玉音放送が始まっていたのです。真上からの熱い太陽に照りつけられ、家々から流れるラジオの音を耳にしながら、なんの感情も持たず黙々と帰り道を戻ってきました。すべて時間が止まったような世界の中で、動いているのは呪文のような玉音放送と、歩いている自分だけ。あの固まったような空気と雰囲気は、何だったのだろうと、ずっと思っていました。

後に、人の気配のない街の建物と、その間をひとり輪回しをしていく少女の影を描いた、イタリアのシュールレアリズムの画家、ジョルジオ・キリコの「街の神秘と憂鬱」という絵に出会って、ああこの雰囲気だったと納得したのでした。

家に戻ると丁度放送が終ったところのようでしたが、だれも私に「お使いご苦労さん」などと声をかけることもなく、祖父母も母も叔父も、魂を抜かれた人のように、心ここにあらずの様子でした。

「負けたということだ」と祖父が言うと、叔父は「よく聞こえなかったけど、終ったということだね」と言いました。そのやりとりを聞いた途端、私の胸の中で重いカーテンが左右に開き、眩しい光が差し込んだのです。もう「警戒警報」「空襲警報」の不気味なサイレンの音に飛び起きなくてもいい。米軍爆撃機 B29 の姿に怯え、防空壕に飛び込まなくてもいい。戦争は終ったのです。

そして空襲に怯えることなく学校に通うことことが出来るようになったものの、私たちにとって、吃驚するようなことが待っていました。

久しぶりに揃った生徒に向かって、先生は墨をするよう準備させてから、教科書を出すよう命じ「これから言う箇所に墨を塗って下さい」と話されたのです。大切な教科書、特に国語や修身の本の国威を表現しているところ、軍国主義表現と見られるようなところは、たちまち墨で黒く塗り潰され、読むことができなくなりました。

日本が勝利することを信じてきた先生たちは、敗戦となって新体制「民主主義」を教えることになり、昨日まで教えてきたことと真逆のことを教える自信がなく、うろたえている様子が、子ども心にも分りました。

戦後の教科書と言えば、黒塗りの教科書とともに思い出深いのは、新聞紙のような教科書です。終戦翌年の 1946（昭和 21）年、4 年生になって渡された教科書は、両開きの新聞紙状の物が 3、4 枚で、その大きな紙を破れないよう持ち帰り、自宅で切り離し、綴じて本らしくしつらえなければならないのです。父は、入学した 1 年生の弟と私の新聞紙教科書を整え、表紙はありあわせの厚紙で補強してくれました。しかしすぐぼろぼろになっ

てしまいます。特に私の本のくたびれようが凄かったのは、その教科書が大好きになり、繰り返し読み返す愛読書になったからです。その年以降、まともな教科書が配布されるようになってからも、4 年生時の粗末な教科書を、しばらく大切に保管していたくらいです。

その時の国語の教科書は、すべて外国や日本の童話で埋めつくされていて、宮沢賢治の「注文の多い料理店」やアンデルセンの「みにくいアヒルの子」「マッチ売りの少女」などを読むことができたのです。アメリカ占領軍に配慮した、思想性が強いものを極力排除した結果だと思われます。

私の読書欲が目覚め、叔父や叔母が読んだ本で、自分が読める本がないか家中漁りだしたのは、新聞紙教科書以来だったような気がします。食べ物、着るものに窮していた戦争直後、大人も子どもも同じく知的に飢え、読み物を求めており、出版された粗末な紙の本が飛ぶように売れたのです

火薬廠の町、船岡は戦後すぐさまアメリカの占領軍が駐留する所となり、ガムを噛みながら歩く米兵やジープが見られ、彼らにこびるよう軽快なジャズ音楽が町に流れてきたりしました。駐留軍施設で働く日本人たちも、戦時中には見られなかったような派手な服装で、楽しそうに仕事に向かうのでした。

過激な日本中心の軍国主義が、敗戦の日を境に逆のものにガラリといとも簡単に変化したことに、とても不思議を感じました。人間は「昨日、正しかったことを、今日、間違ったことに変えることが出来る」と子どもながら考えたのでした。

私の経験した太平洋戦争終戦前後の日常を、戦争の罪や辛さにのみ言及することなく、あえて平坦にお話しをさせて頂きました。

ご静聴ありがとうございました。

（　みながわ・ようこ

1949（昭和 24）年 4 月　宮城学院中学校入学

1952（昭和 27）年 3 月　宮城学院中学校第 5 回卒業

1952（昭和 27）年 4 月　宮城学院高等学校入学

1955（昭和 30）年 3 月　宮城学院高等学校第 7 回卒業

1955（昭和 30）年 4 月　宮城学院女子大学英文学科入学

1959（昭和 34）年 3 月　宮城学院女子大学英文学科第 7 回卒業　）

戦中戦後の宮城学院について

広瀬喜美子

私は片平丁国民学校（現在の小学校）を 1945（昭和 20）年 3 月に卒業し、当時宮城高等女学校と云われた現在の宮城学院中学校に入学した。確か 4 月 8 日だったように思う。入学式の日、昔の三番丁にあった「宮城」の門をくぐると、なんて美しい学校なのだろうとわくわくした。正面脇に噴水があり、白い木蓮の花が咲いていた。右手に赤煉瓦の第一校舎、左手に立派な大講堂があり、第一校舎の後ろに宣教師館があったように思う。当時は和風の建物が普通なので、まるで西洋のお話の中に入っていくように思えたのが忘れられない。私のクラスルームは、その美しい第一校舎の中だった。その建物群の間に、一本広い道が通っていて、右手に奉安殿（これは戦前戦中、天皇のお写真が中に奉られていた建物で、どの学校にもあった）があり、奥の左手に赤煉瓦の第二校舎があった。その第二校舎は、建物の一部を日本陸軍の軍人が使っていた。

その頃女学校は 4 年制だったが、4 年生は多賀城の軍需工場へ学徒動員で働いていたので学校内にはいなかった（3 月に横須賀で卒業を迎えた方々も、卒業したのに動員が続いていた）。後で聞いたことだが、3 年生も学校内で勤労奉仕させられていたとのことだった。先生方は交替で横須賀や多賀城へ行っていた。英語は敵性語で禁止だったが、私たちは簡単な会話を習うのが楽しかった。体操の時間は、当時男子校には「教練」と云う軍隊式訓練があったが、私たち女学生にもやはり「教練」があり、軍隊式の立ち居振る舞いを訓練された。食料や生活物資の不足の中ではあったが、この様な女学校生活が、私にはそれなりに楽しかった。

そんな日々を過ごすうちにも、日本各地は空襲を受けていた。そのニュースは新聞やラジオで簡単に知らされるが、その実態はよく知らなかった。ある 5 月の日中、空襲警報が鳴り、私たちは家に帰された。家路を急いでいると、敵機が一機飛んできた。空襲は夜に行われることぐらいは知っていたので、なぜ日中に敵機が飛んでいるのか不思議だったが、仙台の写真を撮っていたのだろうという事を後で知った。

敵機は、7 月 9 日から 10 日にかけて大編隊で襲ってきた。仙台の中心部は火の海となり焼けてしまった。私は夜が明けて落ち着いてから、学校に行ってみた。なんとあの美しかった第一校舎と宣教師館、木造の校舎などは焼けてしまい無残な姿となっていた。幸いにも大講堂と第二校舎は無事だった。敷地内の真ん中の通路が明暗を分けたのだ。学校は夏休みとなり、8 月 15 日に終戦。その後私たちは、焼け跡を片付けるために学校へ行った。見上げると、この間まで敵機として恐れられていたアメリカの飛行機が飛んでいて敗戦を

告げるビラをまいていた。その後学校はしばらく休みが続く。それは、仙台にもアメリカの占領軍が来ることになったからだ。仙台中の学校（上は専門学校の女性から、下は小学校 5 年生の女子生徒まで）が休みとなり、登校禁止だった。私たちが、校舎の焼け跡片付けに行って以来はじめて学校へ行ったのは 10 月 1 日。その日から授業が始まった。

私たち 1 年生は、大講堂での初めての礼拝に感動した。何しろ入学式にも礼拝は無く、西山貞校長先生による教育勅語拝読と軍歌調の学徒動員をたたえる歌を歌っていたのだから・・・。私たちは、聖書拝読と讃美歌にただただ感動した。その時、戦争が終わったこと、もう空から爆弾が降ってくることが無いこと、平和になったということを心に深く感じた。12 月のクリスマスは雪が降っていた。大講堂では、女学校 1 年生から専攻科までの学生・生徒が一堂に会し、クリスマスの讃美歌を歌った。そのことは、その後経験した何度かのクリスマスよりも、まるで昨日のことのように思い出される。

その頃は、多賀城に動員されていた上級生ももう戻ってきていたので、教室が足りず、私たちは焼け残った第二校舎や大講堂の隅っこで床に座り、授業を受けた。大講堂には、グランドピアノがあり、音楽科の上級生が奏でる名曲を毎朝礼拝前に聴くことは、心落ち着くひとときであった。学校の外、世の中は焼け跡にインフレ等々・・・日本の最悪な時代だった。しかし私は、そのような中だから、なおさら学校に行くのが楽しくて仕方がなかった。翌年の 1946 年 4 月に、私は女学校の 2 年へ進級した。

学校の第一校舎は再建され、焼け跡に木造校舎（いわゆるバラック校舎）が次々と建てられた。他の県立や市立の学校が、午前か午後どちらかの授業だけとか、焼け残った学校に間借りして勉強しなければならない状態の時、私たち宮城の生徒は、普通に授業を受けられるようになっていた。それはアメリカの教会から資金が送られてきて、援助があったからだと思う。当時、小学校 6 年を卒業すると男子は「中学」、女子は「女学校」に進学する時代だったので、宮城女学校はしっかりと授業が受けられると優秀な生徒が殺到した。1947 年には、戦争でアメリカへ帰っていた宣教師の先生方が戻って来られ、英語を習うことができた。私は、リンゼィ先生、ホーイ先生、ゲルハードご夫妻に生きた英語を習うことができ、本当に幸せだったと今でも感謝している。

空襲を免れた大講堂は、戦後、仙台市民の芸術の拠点となった。日本中の有名音楽家、ピアニストやヴァイオリニスト、NHK オーケストラの前身の管弦楽団、有名劇団や有名人の講演など･･･いつも宮城の大講堂の前に、人があふれていた。その中でも、1948 年、ヘレン・ケラー女史が来仙し、大講堂へ来たことは忘れられない。学制改革で、私がちょうど宮城学院高等学校 1 年生となった頃だ。学内で選ばれ、ヘレン・ケラーをお迎えする歌を尚絅の生徒と一緒に仙台駅で歌うことになっていた。しかし、駅前には大勢の人がいて、人混みの中でそれどころではなかった。人波に揉まれているうちに、ヘレン・ケラー女史の目の前に出てしまったという、今では考えられないことだが、良い思い出である。

1949 年、高校 2 年生の時、三番丁通りの向かい側に高等学校の校舎ができた。身の周

りの物資不足・食糧不足も大分解消され、生活も落ち着きを取り戻していた。私たちは、戦後復活第一弾として、夜行列車に揺られながら京都・大阪へ修学旅行に行くことができた。しかし、旅館に泊まるのにお米は持参しなければならなかった。

1951 年、大学の英文科に進学する頃、第二校舎の向かい側に、鉄筋コンクリート建ての大学校舎ができ、私たちは翌年からその校舎で学ぶことができた。その後、次々と新しい校舎が造られたが、大講堂の威容に変わりはなかった。学生時代を思い返す時、運動場の隅にあった「センチが丘」と呼ばれたクローバーを敷きつめた小高い場所もとても懐かしい。友達と話をしたり、おやつを食べた所だった。

最後にもう一つ、書き加えたい。それは、終戦後に、現在の中国東北地方（終戦前は満州と呼ばれた）や韓国や北朝鮮、中国などのいわゆる外地に住んでいた人たちは、「引揚者」と呼ばれていた。その引揚者の娘さんたちを宮城学院中高は受け入れていた。他の県立・市立の高校は、校舎も完成せず席に余裕がなかったから、受け入れていなかったと聞いている。私のクラス(中学 2 年時)にも、4 人の引揚者が編入してきた。どの人も優秀で、卒業式には、総代に選ばれた人もいた。

私が「宮城」に在籍していた時期は、ちょうど戦中戦後、日本の混乱期真っ只中であった。しかし、私は「宮城」という囲いの中で、安全に守られ、青春を過ごすことができた。その幸せは、神さまのご加護と感謝している。もちろん、ご指導くださった先生方と両親を忘れることはできない。

（　ひろせ・きみこ

1945（昭和 20）年 4 月　宮城高等女学校入学

1948（昭和 23）年 3 月　宮城学院中学校卒業

1948（昭和 23）年 4 月　宮城学院高等学校入学

1951（昭和 26）年 3 月　宮城学院高等学校卒業

1951（昭和 26）年 4 月　宮城学院女子大学英文学科入学

1953（昭和 28）年 3 月　宮城学院女子大学英文学科 2 年修了　）

宮城学院の植物たち　その１

宮城学院女子大学 一般教育部准教授　木村　春美

この短いコラムでは、宮城学院の敷地内、特に遊歩道を彩る植物をご紹介しようと思います。とはいえ、専門家ではありませんし、ただのオタクのひとりごとであることをご理解ください。

まず、ご紹介したいのはカタクリです。ユリ科の多年草で、古くは堅香子（カタカゴ）と呼ばれていたようです。春の訪れを告げる「春の妖精」（スプリング・エフェメラル）の代表的植物で、雪解けとともに葉っぱが顔を出します。発芽 1 年目から 1 枚だけ地上に葉を出した姿が春に数週間見られます。7-8 年後に 2 枚目の葉を出すと、そこでやっと花をつけます。カタクリは虫の助けを借りて受粉を行う虫媒花で、さらにはアリに種子を運んでもらう仕掛けも用意しています。カタクリとアリの共生関係については次の機会に譲るとして、特にお天気の良い日中は大きく花を開き、その紫色の姿は清楚でありながら華やかでもありますが、それは実のところ切実な理由によるものなのでしょう。宮城学院の遊歩道を歩いていくと、数箇所に群生しています。温暖化の影響か開花は年々早くなるようで、実習館のピアノプラクティスルームの南側斜面は 3 月末には満開となりますが、弓道場下あたりの日当たりの悪いところは、4 月中旬まで楽しむことができます。

2014 年 4 月 16 日撮影

万葉集の「もののふの　八十娘子らが　汲みまがふ　寺井の上の　かたかごの花」（もののふの やそおとめらが くみまごう てらいのうえの かたかごのはな）は、大伴家持の詠んだ歌です。水を汲みに集まった少女たちと、うつむきかげんに咲く薄紫色の花は、作者の目にはどちらも現実だったのか、乙女たちを見て堅香子の花を思ったのか、堅香子の花を見て乙女たちを想像したのか、いずれであったのだろうかと考えてしまうのは素人の妄想的解釈にすぎませんが、どちらにしても、待ちに待った春の訪れを喜ぶ、軽やかな気持

ちが伝わります。山や森歩きに出かけカタクリに出会うと、毎年のことなのに、躍る心を抑えられません。

象潟出身の版画家池田修三氏の作品に、「かたくりの花」と題した木版画があります。カタクリの花を眺めている、あるいはカタクリの花に語りかけているような少女を描いた作品です。この時、少女は何を思っていたのだろう、何を語りかけたのだろう、そう思いながら眺めているのがとても好きで、にかほ市を訪れたときにこの版画の絵葉書を見つけ買い求めました。毎年カタクリの花の季節になると、部屋に飾っています。

仙台市在住の漫画家いがらしみきお氏が、この「かたくりの花」に「そのあと」と題した詩を寄せています。版画で描かれたシーンのその後に、この少女が何を思い、何をしたかを想像しながら書いたもののようです。この版画の第一の魅力はもちろんこの少女の仕草や表情にあるのでしょうが、この作品が人々の想像力を掻き立てる一因は、少なからずカタクリの花にもあるのではないかと思います。写真は 2017 年にせんだいメディアテークで「まちびとプロジェクト」主催で行われた池田修三木版画展「ワンピース」会場にて撮影したものです。にかほ市象潟郷土資料館の許可を得て掲載しています。

2017 年 8 月 21 日撮影

以前は 350 円の切手がカタクリのデザインでした。オークションサイトで見ると高値がついています。カタクリの球根で片栗粉を作っていた時代は遠い昔で、現代の片栗粉は主にジャガイモのデンプンを使っています。今では保全の対象となり、各地でカタクリ群落の再生が進んでいますが、この愛らしいカタクリが「昔は里山のあちこちに自生していた花」などとなってしまわないことを願ってやみません。

謝辞）この文章を書くにあたり、にかほ市象潟郷土資料館、三重県四日市市メリノール女子学院（現四日市メリノール学院）元国語科教諭高木直美先生、本学学芸学部日本文学科の九里順子先生、生活環境科学研究所の藤原愛弓先生、資料室の佐藤亜紀さんにお世話になりました。紙面を借りてお礼申し上げます。

□彙報

2019（令和元）年度彙報

宮城学院資料室

資料の蒐集・受贈関係（2019年3月1日～2020年2月29日）

以下の資料受贈について感謝をもって報告いたします。（敬称略。冒頭の4桁数字は受贈・受領月日）

（1）定期刊行物関係

受領月日	刊行物名	発行元
0301	白金通信　No.498	明治学院大学
0301	國學院大学研究開発推進機構ニュース　Vol.12	國學院大學研究開発推進機構
0301	青淵　第840号　3月号	渋沢栄一記念財団
0308	校史　Vol.29	國學院大學研究開発推進機構國學院大學
0325	英語英文学研究所　紀要　第44号	東北学院大学
0329	東京大学文書館ニュース　Vol.62	東京大学文書館
0329	一粒の麦　No.2	西南学院史資料センター
0329	琉球だより　No.06	沖縄公文書館
0329	東北大学史料館だより　No.30	東北大学学術資源研究公開センター史料館
0329	東北学院時報　第750号	学校法人東北学院
0401	青淵　第841号　4月号	渋沢栄一記念財団
0408	白金通信　No.499	明治学院大学
0419	明治学院歴史資料館資料集　第15集	明治学院歴史資料館
0426	名古屋大学大学文書資料室ニュース　第36号	名古屋大学大学文書資料室
0426	ニュースレター　明治大学史　No.15	明治大学史資料センター
0426	帝国データバンク史料館だより　Vol.34	帝国データバンク史料館
0510	青淵　第842号　5月号	渋沢栄一記念財団
0603	青淵　第843号　6月号	渋沢栄一記念財団
0701	青淵　第844号　7月号	渋沢栄一記念財団
0701	白金通信　No.500	明治学院

受領月日	刊行物名	発行元
0701	京都大学　大学文書館だより　第36号	京都大学大学文書館
0720	わだつみのこえ記念館　記念館だより　No.13	わだつみのこえ記念館
0720	キリスト教史学会報　第174号	キリスト教史学会
0802	東北学院時報　第752号	学校法人　東北学院
0802	青淵　第845号　8月号	渋沢栄一記念財団
0802	大学時報　No.387	日本私立大学連盟
0801	ARCHIVES 沖縄県公文書館だより　第57号	沖縄県文化振興会公文書管理課
0904	青淵　第846号　9月号	渋沢栄一記念財団
1004	白金通信　No.501	明治学院
1004	東京大学文書館ニュース　Vol.63	東京大学文書館
1004	東北大学史料館だより　No.31	東北大学学術資源研究公開センター史料館
1007	東北学院時報　第753号	学校法人　東北学院
1010	原阿佐緒記念館だより　第50号	原阿佐緒記念館
1010	青淵　第847号10月号	渋沢栄一記念財団
1010	琉政だより　NO.10	沖縄県立公文書館
1010	市史せんだい　Vol.29	仙台市博物館
1110	青淵　第848号　11月号	渋沢栄一記念財団
1121	京都大学大学文書館だより　第37号	京都大学大学文書館
1126	東北学院時報　第754号	学校法人　東北学院
1202	青淵　第849号　12月号	渋沢栄一記念財団
1202	白金通信　No.502	明治学院
1209	キリスト教史学会報　第175号	キリスト教史学会
0104	青淵　第850号　1月号	渋沢栄一記念財団
0104	帝国データバンク史料館だより　Vol.36	帝国データバンク資料館
0115	琉政だより　NO.11	沖縄県立公文書館
0115	東北学院時報　第755	学校法人　東北学院
0201	青淵　第851号　2月号	渋沢栄一記念財団
0225	西南学院史資料センター通信　一粒の麦　第3号	西南学院史資料センター
0229	第5回発表会報告集	近代仙台研究会

（２）書籍関係（紀要・年報・目録・図録を含む）

受領月日	刊行物名	発行元
0306	第4回発表会　報告集	近代仙台研究会
0308	近代日本研究　第35巻	慶応義塾福沢研究センター
0318	早稲田大学史記要	早稲田大学大学史資料センター
0325	東洋英和女学院　資料集　第6号	東洋英和女学院　資料室委員会
0325	國學院大學　校史・学術資産研究　第11号	國學院大學研究開発機構　校史・学術資産研究センター
0325	GCAS　Report　Vol.5	学習院大学大学院人文科学研究科　アーカイブズ学専攻
0325	大阪市立大学の歴史	大阪市立大学大学史資料室
0329	東北学院史資料センター年報　Vol.4	東北学院史資料センター年報編集委員会
0329	東北大学史料館紀要　第14号	東北大学史料館
0329	東京大学文書館紀要　第37号	東京大学文書館
0402	北海道大学大学文書館年報　第14号	北海道大学大学文書館
0402	大東文化大学史研究紀要　第3号	大東文化大学百年史編纂委員会
0402	立教学院史研究　第16号	立教学院史資料センター
0408	沖縄県公文書館研究紀要　第21号	沖縄県公文書館
0419	専修大学史紀要　第11号	専修大学　大学史料課
0419	武蔵学園史年報　第22号	武蔵学園記念室
0419	学院史料　Vol.32	神戸女学院史料室
0426	名古屋大学大学文書資料室紀要　第27号	名古屋大学大学文書資料室
0426	大学史紀要　第25号	明治大学史資料センター
0507	「西南学院百年史」(通史編・資料編)	学校法人　西南学院
0520	「東京女子大学100年史」	学校法人　東京女子大学
0611	渋沢史料館年報2015年度・2016年度	渋沢史料館
0701	成瀬仁蔵関係書簡集1	日本女子大学成瀬記念館
0720	成瀬記念館2019	日本女子大学成瀬記念館
0904	長野県安曇野市　上原家資料Ⅰ	慶応義塾福沢研究センター
0907	キリスト教史学　第73集	キリスト教史学会

受領月日	刊行物名	発行元
0913	青山学院150年史	学校法人青山学院
1004	資料に見る京都大学教育学部の70年	京都大学大学院教育学研究科・教育学部
1118	西南学院史資料センター紀要	西南学院史資料センター
0205	渋沢研究　第32号	渋沢史料館
0210	青山学院150年史編纂報告3　「青山日誌」	青山学院150年史編纂委員会

（3）受贈資料

受領月日	刊行物名	発行元
0318	平和への道　傷ついた葦を折ることなく	元中高教諭　松尾光章様
0720	2018年度　宮城学院女子大学卒業アルバム	(株)東陽写場　後藤浩策様
0826	昭和二十年の日本横断旅行	木﨑弘美様
0920	北京の碧い空を	海野道郎様
1015	遠野での「物語」ブゼル先生最終章	尚絅学院理事長・学院長 佐々木公明様

資料室運営委員会

委員長	嶋田順好	（宮城学院学院長）
委員	田中弘志	（宮城学院理事）
	長井祥子	（宮城学院同窓会会長）
	栗原　健	（宮城学院女子大学准教授）
	松本彰子	（宮城学院中学校・高等学校教諭）
	伊藤幸子	（宮城学院中学校・高等学校事務室）
陪席	本田辰雄	（宮城学院事務局長）
資料室	佐藤亜紀	（宮城学院事務嘱託職員）

宮城学院資料室年報『信・望・愛』2019年度 第25号

2020(令和2)年3月31日発行
編　集　宮城学院資料室運営委員会/宮城学院資料室
発　行　学校法人宮城学院
〒981-8557
宮城県仙台市青葉区桜ヶ丘9-1-1
電話　022-279-1311(代表)
022-279-7765(資料室直通)
E-mail　shiryoshitsu@mgu.ac.jp

印　刷　株式会社　東誠社
〒983-0004　仙台市宮城野区岡田西町1-55
電話　022-287-3351